

コトニ付一言陳辨セントシテ其時機を得ザリシガ、本大臣ハ決シテ權利ヲ争フノ意ニ非ズ。或ハ閣下ノ感情ヲ傷クノ恐アレバ尙少ク云ハシニ、時刻ヲ限ルコトヲ非トスルハ我ニ於テ休戰時期ヲ最後マデ利用セントスルニアラズ。唯ダ我方ニ在テハ十一時頃マデ猶豫ヲ乞ハザルベカラザル都合アリテ言ヒタルノミ。其ハ北京ヨリ回電ヲ得ル爲メナルハ閣下ニ於テモ了解セラレン。尤モ十一時ニハ其回電ノ有無ニ拘ラズ記名調印ノ手續ヲ了ヘ交換ノ式ヲ完結セントス。

伊東 了解セリ。然ラバ其時マデ猶豫セバ必ズ滞リナク交換ヲ行フベシト言明セラル、カ、即チ其時刻至ラバ兩閣下ハ全權ヲ以テ屹度交換執行セラル、カ。大切ナル事柄ナレバ重ネテ確メ置キタシ。

伍 其時マデ猶豫ヲ許諾セラル、ニ於テハ、回電ノ有無ニ拘ラズ又其回電ノ趣意如何ヲ論ゼズ、必ズ交換ヲ行フベキコトヲ茲ニ改メテ明言ス。

伊東 其明答ヲ得テ聊カ安意セリ。本大臣ハ其事ヲ筆記ニ大書セシムベシ。併シ旅順口ヘノ報知ノ遲達スルコトハ何分困却ナレドモ、爲シ得ベキ限りハ本大臣責任ヲ取リテ貴方ノ便宜ヲ謀ルベシ：：兩閣下ハセメテ八時頃マデニ交換スルヲ得ザルカ、若シ幸ニ同意セラシ、ナラバ此所ニテ一切ノ書類ヲ調整シ置クベシ。

伍 閣下等ノ食事ハ何時ヲ以テセラル、カ。

伊東 (微笑シツ、) 兩閣下ヨリ餘リ苦メラレタレバ寢食共ニ其時ヲ定ムルニ暇アラズ。

伍 (聯全權大臣ト協議シテ後) 八時マデニハ迎モ參堂スルヲ得ズ、願クバ十時トセラレタシ

伊東 本大臣ハ今宵用濟次第直ニ乗船センコトヲ望ム。

伍 交換濟ノ上ハ夜分ニテモ護衛ヲ付シ安全ニ乗船セラル、様取斗フベシ。

伊東 護衛等ノ事ハ決シテ尊慮ヲ煩スヲ欲セズ。唯今約諾セラレタル事ハ豫メ我政府ニ電報シ置カントス、異議ナキヤ。

伍 差支ナシ。

伊東 此ノ如ク本大臣ヨリ我政府ヘ豫報シ置カバ或ハ我政府ヨリ旅順口ヘ豫メ電命スル所アラシム知ルベカラズ。然ラバ本大臣ガ其報ヲ齎スヨリモ數時間速達スルノ利アリト思考ス。

伍 殊ニ好都合ナリ。

伊東 本大臣ハ何等ノ責任ヲ取ルモ斷然一身ヲ犠牲ニ供シテ兩國永遠平和ノ回復ヲ謀ルベケレバ、兩閣下ニ於テモ相違ナク十時ヲ期シテ交換執行セラレタシ：：(此時伊東全權大臣ハ批准書ニ代フル公文案ヲ伍全權大臣ニ渡シツ、) 此文案ハ假ニ兩閣下ノ書記官ノ勞ヲ省ク爲ニ起筆シタルモノナリ。批准書ヲ欠ケルコトハ必ズ我國ニ於テ多少ノ議論アラン

モ亦料知スベカラズ。仍テ本大臣ハ此公文ヲ得テ貴國ノ例批准書ナキコトヲ證明セザルベカラズ。他ノ書面ニモ「御筆批准」トアリシモ本大臣ハ皆之ヲ削除シタリ。是レ聊カ兩閣下ノ困難ヲ解クノ微意ニ出ヅ。

(此ノ時双方書面ヲ示シ合ヒ最後ニ伊東全權大臣ハ李鴻章ガ下ノ關ニ携帯シタル委任狀ヲモ參照トシテ示サレ伍聯兩全權大臣披閱ス)

伍 閣下ハ遠カラザル内北京ニ來ラレザルカ。

伊東 深く希望スル所、願クハ一個人トシテ切ニ北清ノ漫遊ヲ望ミ居レリ。

伍 必ズ來遊セラレタシ。

伊東 先年北京ニ趣キタル時ノ如キ日夜事務ニ執掌シテ寸隙ヲ得ザリシヲ以テ市街ヲダニ一覽スル能ハザリキ。

伍 必ズ然リシナラン。次回來遊ノ節ハ十分北京ノ勝區ヲ探ラレンコトヲ望ム。

伊東 回顧スレバ十年前北京ニ趣キタルハ其意專ラ日清兩國ノ衝突ヲ避クルニ在リシモ、不幸ニシテ昨年來兵馬ノ間ニ相見ル事トナレリ。然レドモ今回和約成リタル以上ハ、兩國ノ交誼ハ從前ヨリモ一層ノ親厚ヲ加ヘザルベカラズ。今回貴國ニ在テ平和ノ首唱ハ李中堂ナリト聞ク、我國ニ於ケル平和ヲ重ズルノ政治家ハ先ヅ指ヲ伊藤伯ニ屈ス。其伊藤伯

ニシテ李中堂ト共ニ安定シタル所ノ平和條約ハ幸ニ兩國皇帝陛下ニ於テ嘉納シ玉フ所トナレリ。尚ホ一言ヲ加ヘンニ、伍全權大臣ハ多年李中堂ニ從テテ事務ヲ執ル、本大臣亦少壯ノ時ヨリ伊藤伯ノ知遇ヲ得テ伯ノ爲ニ推薦セラレタルハ蓋シ兩閣下ノ了知セラルル所ナラン。而シテ兩伯辛苦ノ結果タル平和條約ノ批准交換ヲ、閣下ト本大臣トノ間ニ於テ執行スルニ於テハ當ニ兩國皇帝陛下ノ御満足ハ勿論、伯亦必ズ其衷心安ゼラルベキヲ信ジテ疑ハザルナリ。

伍 寔ニ同感ナリ。批准交換ヲ了ラバ兩國ノ關係ハ寧ロ從前ヨリモ親厚ニセザルベカラズ。

伊東 眞ニ然リ。

伍 今宵ハ公署へ先駕セラル、カ。

伊東 本大臣ハ批准終リ次第瞬刻モ早ク乗船シタシ、就テハ兩閣下ノ來館セラレンコトヲ望ム。且交換ノ時刻ハ十時トスルモ書類讀合セノ爲メニ時間ヲ要スルヲ以テ、一時間ニテモ二時間ニテモ前ニ來館セラレタシ。

伍 然レドモ多分ノ書類ヲ携帯セザルベカラザルヲ以テ寧ロ閣下ノ公署ニ來臨セラル、方便宜ナラン。

伊東 當方ニ在テモ同ク多分ノ書類ヲ携帯セザルベカラザルノ要アレバ兩閣下ノ來館ヲ請フ。

而シテ事終ラバ直ニ乗船歸途ニ就クコト、セン。此ノ如ク交換ヲ猶豫シタルニ付テハ恐クハ我本國政府ヨリ強ク攻撃セラルベシト雖モ、本大臣ハ重責ヲ負フテ兩閣下ノ乞ヲ容シタルナレバ、一時間ニテモ速ニ此地ヲ出發シ得ル様配慮セラレタシ。

伍

今夜事濟マバ直ニ乗船セラル、カ：事全ク終リタル上兩三日間滯留セラレテハ如何。閣下ヲ饗應スルノ用意モ略々整ヒ居レバ本大臣等ハ偏ニ閣下ノ逗留ヲ望ム。

伊東

此地ノ風景ハ本大臣ノ親愛セル我神戸ニ酷似スルヲ以テ、兩三日間滯留センコトヲ切望スルモ、如何セン交換執行ノ上ハ直ニ船ヲ旅順口ニ還スベキノ君命ヲモ帶ビ居レバ、私ニ滯留スルヲ得ズ：本大臣ハ滯留中此ノ如ク鄭重接遇セラレタルヲ深謝ス。孰レ歸朝ノ上ハ貴國ノ厚誼ヲ我皇帝陛下ニ備サニ上奏セントスレバ、我政府ヨリモ貴國政府ニ對シテ厚謝スル所アルベシト信ズ。

伍

其ノ如ク歸路ヲ急ガル、ハ遺憾千萬ナリト雖モ閣下ノ重任ヲ念フニ於テ抑止スルヲ得ズ：本大臣等ハ交換事終リ兩國平和ノ克復ヲ見ルニ至リタル以上、十分歡待センコトヲ希望シ、多少準備スル所アリシモ今ハ是非ナシ。

伊東

本大臣ニ於テモ愈々平和回復ノ後ハ尤モ吉祥ナル食卓ヲ與ニシ歡ヲ聲シテ辭別センコトヲ欲スルハ勿論ナリト雖モ、一刻モ早く平和回復ノ報ヲ旅順口ニ齎シ、一刻モ早く兩國

ノ軍隊ヲシテ安心セシメザルベカラザルノ使命ヲ奉ズルモノナレバ、寧ロ會食ノ爲メニ費ス所ノ時間ヲ省キテ、速ニ其喜報ヲ致スコトニ致スコソ平和回復ノ爲ニ簡派セラレタル全權大臣タルモノノ任務ニシテ、且更ニ愉快ナルベキヲ信ズ。兩閣下ノ厚意謝スルニ辭ナシト雖モ、幸ニ微意ノ存スル所ヲ諒察セラレヨ。貴國ノ軍隊モ我國ノ軍隊モ昨秋以來櫛風沐雨ノ苦難ヲ嘗メツ、アレバ、瞬時モ早く休息セシメザルベカラズ。尤モ我が後發ノ軍隊ニシテ未ダ一回ノ戰爭ヲ爲サズ、髀肉ヲ歎シ居ルモノアレバ、是レ等ノ軍隊ニ對シテハ特ニ兩國平和ノ回復ヲ速知セシムルノ要アリ：目下休戰中ニ在テハ彼等ハ無事ニ困ミ、一タビ休戰期滿タバ手腕ヲ試ミント待構フルモノナレバ、最先ニ平和ノ回復ヲ告ゲザルベカラザルナリ。既ニ此場合ニ至レバ本大臣ハ復藏ナク事實ヲ述ベテ聊カ兩閣下ノ厚意ニ酬ヒントス。

伍

閣下ハ永ク旅順口ニ滯留セラル、カ。

伊東

然リ、迎モ永ク滯留スルヲ得ズ。本大臣ハ本國ニ在リテ尤モ繁劇ナル地位ニ居リ、實ニ一日ヲ曠クスルヲ得ズ。今回ノ使命ハ伊藤伯ニ於テモ特ニ重キヲ置キテ本大臣ヲ薦奏セラレタルナレバ、一時間ニテモ半時間ニテモ歸朝ヲ急ガザルヲ得ズ。

伍

閣下ノ地位ノ繁劇ナルコトハ予モ承知セリ。(談判此ニ終ル時午後五時五十分)

芝罘談判記要

第五

(第五回)

五月八日午後九時三十分「ビーチホテル」ニ於テ

出席者官氏名

| | |
|--------|---------|
| 全權辦理大臣 | 伊東 巳代治 |
| 外務省參事官 | 西 源 四 郎 |
| 公使館書記官 | 鄭 永 昌 |
| 隨 員 | 龍 居 賴 三 |
| 同 上 | 佐 藤 顯 理 |
| 同 上 | 檜 原 陳 政 |
| 換約全權大臣 | 伍 廷 芳 |
| 同 上 | 聯 芳 |

翻譯官 盧 永 銘

外ニ書記 壹名

(例ノ如ク迭ニ禮ヲ施シ席着ノ後)

伊東 先ヅ書類ノ讀ミ合ハセヨリ始ムルヲ當然ノ順序ト思考ス。

伍 貴命ノ如クスベシ：：條約本書ヨリ讀ミ合ハスベキカ。

伊東 然リ條約本書ヨリ始メン：：(清帝鈐璽セラレタル條約本書ヲ熟視シツ、)此「皇帝之寶」ト刻シタル印ハ所謂御璽カ。

伍 然リ御璽ナリ。

(此時和漢文ノ讀ミ合セ終リ、我レ批准書漢譯及全權委任狀ノ本書及漢譯ヲ改メテ伍聯兩全權大臣ニ渡シ、彼レヨリハ左ノ公文及全權委任狀ヲ出シ滯リナク此ニ本書ノ交換ヲ了ス) 大清帝國欽差換約全權大臣三品衛聯二品頂戴伍三品衛聯

爲事照得中國與各國訂立約章向例本國

大皇帝批准以鈐用

御璽爲憑並無

御筆批入約本照行已久此次中日兩國於光緒二十一年三月二十三日在下之關所定和約及

別約已經奉本國

大皇帝批准鈐用

御璽以照信據並無

御筆批入約本相當照會

貴大臣請煩查照須至照會者

右 照 會

大日本帝國欽差全權辦理大臣

伊 東

光緒二十一年四月十四日

伊東 過般李中堂ガ携帶セラレタル全權委任狀ニ鈐シタル印ト交換本書ニ鈐セラレタル印ト同ジカラズ其理由如何。

(此時伊東全權辦理大臣ハ李鴻章ノ委任狀ヲ展ベテ示サル)

伍 批准交換ノ爲メト、李中堂ヘノ全權委任トハ己ニ其目的異ナルヲ以テ、用キル所ノ印璽

モ同ジカラザルナリ。他ニ理由ナシ。

伊東 國ニ依リテハ御璽ト國璽トノ二個アリ、貴國ニ於テ凡ソ幾個アルカ。

伍 (聯全權大臣ト談話シテ後) 我國ニテハ三個ノ印アリ「皇帝之寶」ハ世々相傳フルモノナ

リ。

伊東 (彼レガ渡サントシタル三國云々ノ諭旨ヲ記セル書面ヲ突キ戻シツ、) 此書面ハ本大臣

ノ受取ル能ハザルモノナリ。若シ強ヒテ渡サントセラル、トキハ自ラ議論ノ多岐ニ涉ル

ヲ免レズ。仍テ本大臣ハ兩閣下ノ全權委任狀及批准書ニ代フベキ外交的公文ノミヲ以テ

満足スベシ。三國云々ニ付テハ伊藤伯及李伯ノ間ニ往復セラル、所アレバ、一切關涉セ

ザルヲ可シトス。本大臣ノ權限ハ批准交換ノ外ニ踰越スルヲ許サレズ。

伍 閣下ノ受領ヲ乞ハザルヲ得ズト雖モ、受取ラレザレバ是非ナキコトナリ。

伊東 惡シカラズ承知セラレタシ、其理由ハ既ニ述ブル所ニテ明白ナラン……先ヅ交換ヲ結了

スルコト、セン。

(此時伊東全權辦理大臣ハ和漢兩文ノ交換證書ヲ伍聯兩全權大臣ニ示サレ、双方讀ミ合セ

ノ上記名調印ヲ了リ、各々和漢兩文ヲ交換受領ス、其全文左ノ如シ。是ニテ式全ク完

結ス。時ニ午後十一時三十分ナリシ)

下名ハ明治二十八年四月十七日即チ光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニ於テ締結調印シ

タル大日本帝國皇帝陛下ト大清帝國皇帝陛下トノ間ニ於ケル媾和條約及別約ノ批准書ヲ

交換スル爲メ茲ニ會合シ、右條約及別約ノ批准ヲ篤ト對照シ、其各相符合スルコトヲ認

メ、定式ニ依リ本日右交換ヲ執行ス

右證據トシテ各此ノ交換證書ニ記名調印スルモノナリ

明治二十八年五月初八日即光緒二十一年四月十四日芝罘ニ於テ之ヲ作ル

大日本帝國欽派全權辦理大臣

伊東 巳代治

大清帝國欽差換約全權大臣二品銜

伍 廷 芳

大清帝國欽差換約全權大臣三品銜

聯 芳

大清帝國

欽差換約全權大臣二品銜

伍 廷 芳

欽差換約全權大臣三品銜

聯 芳

大日本帝國

欽派全權辦理大臣伊東巳代治爲互換經奉

大清帝國

大皇帝

大日本帝國

大皇帝陛下批准

大清帝國與

大日本帝國於光緒二十一年三月二十三日即明治二十八年四月十七日在下之關所訂和約及別約互相會同將和約及別約詳加查核俱屬妥善無訛照式互換爲此兩國全權大臣欲立文憑署名蓋印以昭信據

大清帝國欽差換約全權大臣二品銜 伍 廷 芳

大清帝國欽差換約全權大臣三品銜 聯 芳

大日本帝國欽派全權辦理大臣 伊東 巳代治

光緒二十一年四月十四日

明治二十八年五月初八日

訂於煙臺

伊東 批准交換ニ付テハ李中堂ガ非常ノ盡力アリシヲ疑ハズ。何レ伊藤伯ヨリモ中堂ヘ書翰ヲ贈ラルベシ。是レニテ全ク兩國永遠ノ平和回復セラレ兩國ノ幸慶比スルニ物ナシ。又批准交換ノ全權大臣タル閣下及本大臣ニ於テモ一身ノ面目何物カ之ニ加ヘンヤ。

伍 實ニ兩國ノ慶事之ニ過グベカラズ：(三通ノ照會ヲ机ニ措キテ)就テハ改メテ此三通ノ照會ヲ受取ラレタシ。本大臣等ハ閣下ヲ經テ貴國政府ニ此書ヲ致スベシトノ君命ヲ蒙リタリ。

伊東 如何ナル書面ナルヤヲ知ラズト雖モ唯今披見スルノ必要アルカ。
伍 然リ何卒披讀セラレタシ、閣下ニ宛タルモノナレバ：(此時伊東全權辦理大臣ハ三通ノ照會ヲ披讀セラル)

伊東 強テ本大臣ニ受取ルベシト云ハル、時ハ事體頗ル困難トナルベシ。批准交換ノ執行既ニ完結スル上ハ先ヅ三鞭酒杯ヲ舉ゲテ兩國平和ノ回復ヲ相慶セン。

伍 (此時一同起テ杯ヲ舉ゲ兩國ノ爲ニ相慶祝ス)
此ノ如ク己ニ兩國ノ平和回復セラレタル上ハ、兩三日間滯留セラレンコトヲ切望ニ堪エ

伊東 是ト雖モ、詳細閣下ヨリ辯明セラル、所アリテ抑止スル能ハザルハ遺憾千萬ナリ：(此三通ノ照會ハ決シテ閣下ノ迷惑トナラザルベケレバ兎ニ角携歸セラレタシ。本大臣等ハ是非トモ閣下ニ渡スベシトノ君命ヲ得タレバ此儘止ミ難キコトハ十分諒察ヲ乞フ。

伊東 此照會ヲ受領スル時ハ何トカ答酬スル所ナカルベカラズ。然ルニ本大臣ノ帶ブル所ノモノハ批准交換ノ全權ニシテ敢テ他事ニ涉ラザルナレバ、假令何様ノ事情アリトモ委任ノ外ニ踰越シテ商議シ若クハ答酬スルヲ得ザレハ勿論ナリトス。若シ夫レ貴國政府ニシテ我政府ニ申込マル、事柄アラバ、他ノ相當ノ手段ニ依リ直接本國政府ニ照會セラレタシ。然レドモ目下互ニ公使駐紮セザル場合閣下ヲ煩勞スルヨリ他ニ手段ナシ。

伊東 平和回復ノ上ハ遠カラズ公使ヲ北京ニ駐紮セシメラルベケレバ、其公使ヲ經テ申込マル、トモ又ハ其前米國公使デンビー氏ヲ經由シテ申込マル、モ貴國政府ノ任意ナリ。本大臣ハ批准交換ノ事ノ外ハ何等任命セラル、所ナキヲ以テ、強テ本大臣ニ渡サル、ナラバ本大臣ハ受取ル能ハザルノ理由ヲ叙シテ返却スルノミ。殊ニ今夜モ深更ニ及ベバ其レ等ノコトノ爲ニ時間ヲ費スハ尤モ迷惑ナリ。

伍 閣下ハ餘リ用愼深キニ似タリ。今我國ニ於テ貴國ヲ代表スル人ハ唯ダ閣下アルノミ：(我ヨリ一ノ「デスパッチ」ヲ呈スレバ閣下ハ携歸セラレザルカ。

伊東 互ニ圭角アル議論ヲ闘ハスハ今ノ場合ニ當リ本大臣ノ殊ニ欲セザル所ナリ：我ヨリハ陛下ノ批准書ヲ渡シ、貴方ヨリハ批准書ナキヲ以テ其代リトシテ外交的公文ヲ受取リタルニテ、私交上ノ事ハ別段トシテ公然ノ任務即チ單純ニ批准交換スルコト既ニ終リ、本大臣ノ使命ハ此ニ盡キタリ：若シ此ノ如キ委任ノ外ニ涉レル文書ヲ携歸セバ、我國ニテハ權限尤モ嚴ナルヲ以テ、必ズ面倒ヲ生ゼン。閣下等若シ強テ渡サル、ナラバ、本大臣ハ受領シ難キ理由ヲ付シテ返却スルノ外ナシト雖モ、最早乗船ノ時機モ切迫スレバ、其レ等ノ爲ニ時間ヲ割クハ頗ル困却スル所ナリ。

伍 必ズ閣下ノ責任ニ關スルコトナカルベシ。本大臣等ハ君命如何トモスベカラザルヲ以テ偏ニ閣下ノ高義友情ニ依頼スルナリ、夫レニテモ尙ホ許諾セラレザルカ。

伊東 閣下ハ本大臣ノミヲ以テ我國ノ代表者ナリト云ハル、モ、本大臣ハ屢々縷陳スル如ク其ノ任務ハ單ニ批准交換ノ一事ナルヲ以テ、之レニ關シテハ固ヨリ商議往復スベキモ、此ノ如キ條約ノ事項ノ變更ニ關スルモノニ至テハ本大臣ノ委任權限ヲ踰越スルヲ以テ商議往復スルコト能ハズ：但シ一身上ノコトニ付テハ其及バン限り貴囑ニ應ズル覺悟ナリ。然ラバ閣下ニ渡スペシトノ君命ヲ得タル本大臣等ハ如何ニ處スベキカ。

伊東 或ハ只今述べタル事柄ヲ記セル書面ヲ添テ返却スルヨリ外手段ナカラシカ。

伍 恐悚ニ堪ヘザルモ其ノ如ク取計ハレタシ。閣下乗船ノ上返付セララル、モ可ナリ。

伊東 然レドモ此事ハ唯ダ本大臣ヲ困却セシムルモノナリト思考ス。若シ兩閣下ニシテ一片友義アラバ本大臣ヲシテ一刻モ早く此地ヲ出發シ、旅順口ニ向フコトヲ得セシメラレタシ。本大臣ヨリ別ニ書面ヲ添ヘザルモ、貴國政府ヨリ直接我政府へ申込マル、ナラバ足レリト信ズ。本大臣ハ瞬時モ速ニ平和ノ惠ヲ我軍隊ニ傳ヘンコトヲ望ム。願クハ盧永銘君ヨリ聯全權大臣ニモ十分微意ノ存スル所ヲ通ジラレタシ。

(此時盧永銘ハ日本語ヲ以テ聯全權大臣ノ爲ニ通辯シ、數回問答ノ末伊東辦理大臣ハ遂ニ答書ヲ添テ照會三通ヲ返却スベキコトヲ承諾セラル)

伍 臺灣ニ派遣セラレルベキ貴國全權員ノ誰ナルカヲ閣下ハ知ラル、カ。

伊東 然リ。

伍 何人ナルカ。

伊東 本大臣ハ今公言スルヲ得ズ。

伍 承知：臺灣ヲ貴國ニ割與スルニ付同地ノ人民ガ騷擾シ居ルコトハ聞知セラレタルカ。

伊東 種々ノ風説ハ聞キタルコトアレドモ未ダ實否ヲ知ラズ。假令何等ノ事アリトモ我國ニ引受クル以上ハ容易ニ秩序ヲ保持スルコトヲ得ベシ。

伍 清國官吏ニシテ退去スルナラバ寧ロ之ヲ殺戮スルモ貴國ノ權下ニ服セズト騷ギツ、アル事實ハ聞カレタルカ。

伊東 未ダ聞カズ、然レドモ愈々我國ニ引受タル後ハ清國官吏ト人民トニ論ナク我政府ハ之ニ對シテ必ズ適當ノ處置ヲ施スコトヲ懈ラザルベキニ因リ幸ニ意ヲ安ンゼラレタシ。

(此時伊東全權辦理大臣ハ村田砲兵中佐ヲ招キ伍聯兩全權ニ紹介セラレ送ニ談話アリ)

伊東 照會ハ出發ノ際一書ヲ添テ返付セン：：本大臣ハ我政府ニ代リ貴國ノ欸待ヲ此ニ鳴謝ス：：最早是レニテ別辭ヲ告ゲタシ。

伍 本大臣埠頭マデ送禮スル筈ナレドモ、折角ノ御辭退ニ付缺禮ヲ宥怒セラレタシ。

(談判全ク終結ヲ告ゲ互ニ健康ヲ祈リツ、訣別シタルハ九日午前一時四十分ナリ)

(伊東全權辦理大臣ハ發駕ノ際ニ臨ミ彼ヨリ送リタル照會三通ニ左ノ答書ヲ添ヘ米國領事ヲ經由シテ伍聯兩全權大臣ニ返付セラレタリ)

大日本帝國欽派全權辦理大臣伊東 爲

照會事照得現經由

貴大臣面受照會三件查本大臣蒙本國

大皇帝簡派來此換約本大臣相應遵守職分辨結換約之外並不能干涉他事因此將貴照三件送回

請貴大臣查狀可也理合照會須至照會者

右 照 會

大清帝國欽差換約全權大臣伍聯

明治二十八年五月初八日

伊東辦理大臣復命書

臣日清兩國媾和條約及別約批准交換ノ爲メ全權辦理大臣トシテ清國芝罘ニ前往スルノ 詔命ヲ恪シ、乃チ本月一日ヲ以テ 行宮ヲ拜辭シ、途廣島旅順ヲ經テ七日該地ニ達スルヲ得タリ。芝罘到着ノ時直ニ書ヲ米國領事ニ寄セ以テ登岸會商ノ便ヲ議スルノ照會ヲ道臺ニ致サシム。伍廷芳聯芳ノ二人清國欽差換約全權大臣トシテ既ニ在ルヲ聞キ、臣道臺ノ回答ニ接到スルト同時ニ登岸シ、彼レノ準備セル旅館ニ入ル。其接遇鄭重ヲ極メ旅館内外及途上警備亦嚴重ナリ。當日伍聯兩當大臣ヲ旅館ニ招キ第一回談判ヲ開ク、同夜臣彼レノ公署ニ趨キ、先ヅ其全權委任

狀ヲ査閱スルニ、彼等ノ帶有スルモノ不完全ニシテ加フルニ俄德法三國ノ干涉ニ關スルノ諭詔ヲ示セリ。臣ハ更ニ使命ノ存スル所ヲ告ゲ、此ノ如キノ諭詔ハ臣ノ收受スルヲ得ザル所ナリト道破シタリ。委任狀ノ不完全ハ逆メ料知スル所 臣發軔ノ前外務大臣ト商議セル旨意ニ依リ嚴ニ之ヲ咎責セズ。又本條約ト皇帝ノ印璽ヲ鈐スルニ止リ、所謂批准文ヲ具備セザルモ是清國ノ例ナリト云フニ信ジテ遽ニ非難セズ。惠心過カニ本書ヲ互換セントシ、說クニ休戰滿期ノ切迫ヲ以テス。彼等漸ク臣ガ言フ所ニ從フ。時會々天津ヨリ伍聯兩大臣ニ電音届ル、即チ我ノ休戰及批准交換ノ延期ヲ許諾セルヲ通ズルモノニシテ彼等亦茫然自失スルモノ、如シ當時臣ハ未ダ此ノ如キノ訓電ニ接セザルヲ以テ、斷ジテ猶豫スベカラズト主張シ、更ニ翌日ノ會見ヲ約シテ辭別ス。其翌日八日午前午後兩回ノ談判ニ於テ、彼等ハ頻リニ休戰及批准交換延期ニ關スル訓電ノ臣ガ手ニ達セザルヲ恠シムト雖モ、臣ハ告グルニ未到ノ實ヲ以テシ、陰ニ陽ニ我ノ決意ヲ似シ、彼レ仍ホ躊躇踏起スルニ於テハ、臣斷然進止ヲ擇バント勵言シ、且彼レノ批准文ニ代フルノ外交上公文ヲ發セシムルノ商議ヲ遂ゲ、之ガ案ヲ付與シタリ。彼等略ボ之ニ同意シタルモ最後ノ訓電ヲ北京ニ得ル爲メ第五回談判ヲ同夜十一時マデ猶豫センコトヲ請フ。臣聽カズ。談論數刻ニ涉リ竟ニ限ルニ十時ヲ以テス。而シテ此ノ最終ノ時期ニ到ラバ北京訓電ノ如何ニ拘ラズ必ズ批准交換ヲ行フベシ。

キコト、及本書ノ照較並ニ交換證書ノ鈐署等ノ爲ニ定刻前ニ會同スルコトヲ條件トシテ之ヲ許諾シタリ。伍聯兩大臣去ルノ後僅ニ五六分時ニシテ外務大臣ヨリ五日間休戰延期ヲ承諾シタリ批准交換ハ此期內ニ於テ成ルベク快速ニ行フベシ。但シ更ニ訓令スルマデハ芝罘ニ留リ何等動作スベカラズト尋常英語ヲ以テセル訓電ヲ得タルモ、當夜十時ヲ限り交換執行ヲ約シタル後ナルヲ以テ、彼尙シ其約ヲ踐マザルニ於テハ更ニ猶豫ヲ與フル爲メ兩國全權大臣ノ間ニ訂約セントシ、用備己ニ成リテ定刻ノ至ルヲ俟テタルニ、伍聯兩大臣ハ約ノ如ク九時半ヲ以テ本書照較ノ爲メ盧繙譯官及書記壹名ヲ引具シテ來會シタリ。

臣席ニ莅ミ彼等ト語談ノ際、外務大臣ヨリ猶豫ナク批准交換ヲ行フベシトノ訓電ヲ得タリ。伍聯兩大臣ハ本書ヲ照較シ了ル時三通ノ照會ヲ手ニシ、屢々挿言ヲ試ミ、臣ハ之ヲ遮リ本書互換ノ後ニ於テスベシト制止シ、先ヅ本書及委任狀ヲ互換シタルニ、彼等ハ復タ三國干涉ニ關スルノ諭詔ヲ付添センコトヲ望メルモ、臣ハ使事ノ外ニ涉ルヲ以テ收接スルヲ得ズト說テ之ヲ排斥シ、更ニ批准文ニ代フル爲メ左ニ載スル所ノ外交上公文ヲ徵シタリ。

大清帝欽差換約全權大臣

二品頂戴
三品銜 伍聯

爲

照會事照得中國與各國訂立約章向例本國

大皇帝批准以鈐用

御璽爲憑並無

御筆批入約本照行已久此次中日兩國於光緒二十一年三月廿三日在下之關所定和約及別約已經奉本國

大皇帝批准鈐用

御璽以照信據並無

御筆批入約本相應照會

貴大臣請煩查照須至照會者

右 照 會

大日本帝國欽差全權辦理大臣 伊 東

光緒二十一年四月十四日

下名ハ明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日、下ノ關ニ於テ締結調印シタル大日本帝國皇帝陛下ト大清國皇帝陛下トノ間ニ於ケル媾和條約及別約ノ批准書ヲ交換スル爲メ茲ニ會合シ、右條約及別約ノ批准ヲ篤ト對照シ、其各相符合スルコトヲ認メ、定式ニ依リ本日右交換ヲ執行ス。

右證據トシテ各此ノ交換證書ニ記名調印スルモノナリ。

明治二十八年五月初八日光緒二十一年四月十四日

芝罘ニ於テ之ヲ作ル

大日本帝國欽派全權辦理大臣

伊 東 已 代 治

大清帝國欽差換約全權大臣二品銜

伍 廷 芳

大清帝國欽差換約全權大臣三品銜

聯 芳

大清帝國

欽差換約全權大臣二品銜 伍 廷 芳

欽差換約全權大臣三品銜 聯 芳

大日本帝國

欽派全權辦理大臣伊東已代治爲互換經奉

大清帝國

伊東全權辦理大臣復命書

大皇帝

大日本帝國

大皇帝批准

大清帝國與

大日本帝國於光緒二十一年三月二十三日即明治二十八年四月十七日在下之關所訂和約及別約互相會同將和約詳加查核俱屬妥善無訛照式互換爲此兩國全權大臣欲立文憑署名蓋印以照信據

大清帝國欽差換約全權大臣二品銜

伍廷芳

大清帝國欽差換約全權大臣三品銜

聯芳

大日本帝國欽派全權辦理大臣

伊東巳代治

光緒二十一年四月十四日

訂於煙臺

明治二十八年五月初八日

批准交換ノ式全ク終リタルハ同夜十一時三十分トス。伍聯兩大臣ハ臣ニ宛タル遼東半島ノ放棄臺灣ノ騷擾及ビ三國干涉ノコトニ關スル諭詔ノ照會三通ヲ出シ、以テ我政府ニ到達ヲ求メタリ。臣ハ此レ等條約ノ變更ニ關スル事項ニ付テハ、何等公文ヲ接受シ及之レニ回答スルノ權能ヲ有セズ。今次ノ使命ハ單ニ批准更換ニ止マルコトヲ反覆辯論スルモ、彼等ハ口ヲ君命ニ籍キ必ズ臣ニ交付セザルヲ得ズト主張シ、之ガ爲ニ九日午前一時ニ至ル。其極彼等ハ臣ガ答辨スル所ノ意義ヲ以テ公然ノ覆照ヲ望ミタルニ由リ、乃チ臣ハ米國領事ニ托シ三通ノ照會ニ左ノ答書ヲ付シテ之ヲ返還シタリ。

大日本帝國欽派全權辦理大臣

伊東 爲

照會事照得現經由

貴大臣面交照會三件查本大臣蒙本國

大皇帝簡派來此換約本大臣相應遵守職分辨

結換約之外並不能干涉他事因此將

貴照三件送回請

伊東全權辦理大臣復命書

貴大臣查收可也理合照會須至照會者

右 照 會

大清帝國欽差換約全權大臣

聯伍

明治二十八年五月初八日

臣ハ九日午前五時ヲ以テ芝罘ヲ發シ再ビ旅順ニ寄り、廣島ヲ經テ本日 闕下ニ還ル。其第五回ニ涉ルノ談判筆記ハ更ニ繕寫ノ後上リテ 聖覽ニ供ヘントス。又別紙具スル所ノ臣ノ隨員皆能ク日夕勵精シ大ニ裨補スル所ナリ。

今謹デ互換スル所ノ本書及附屬書ヲ齊整捧呈スルニ當リ、茲ニ使事ノ顛末ヲ復命ス。臣誠惶誠恐

頓首再拜

明治二十八年五月十三日

全權辦理大臣 伊東巳代治

隨行員

外務省參事官 西 源 四 郎
內閣屬 龍 居 賴 三

佐 藤 顯 理
檜 原 陳 政

右三人高等官心得ヲ以テ談判席ニ列セシム
內閣屬 石 原 鍋 藏

大總督府派遣旅順口ヨリ同行

陸軍砲兵中佐 村 田 惇
海軍大尉 山 縣 文 藏
海軍大尉 野 間 口 兼 雄
公使館書記官 鄭 永 昌

英國政府ハ決シテ臺灣ヲ占領スルニ意 ナキコトヲ宣言シタル電報

五月十二日午前十時二十分發

同 十一時三十五分着

陸奧外務大臣

林外務次官

英公使館書記官(ラッサー)只今來省、同氏ヲ公使不在中代理公使ト爲スコトニ關スル英國外務大臣ヨリノ書翰ヲ持參シ、且本國政府ヨリ訓令ナリトテ述ベテ曰ク。近頃英國ハ臺灣ヲ占領スルトノ風説アレドモ全ク虚説ナリ。英國ハ決シテ彼島ヲ占領スルノ意ナキコトヲ宣言ス。但シ此宣言ハ新聞紙ニ出ヌヨウニセラレタシト、本官思フ、右ニ對シテ相當ノ謝辭ヲ英文ニテ御電報アリタラバヨロシカラシ。

清國皇帝條約批准ノ電報

五月十一日天津發 十二日京都接

京都

伊藤總理大臣

李

鴻

章

我政府ノ命ニ依リ左ノ事ヲ閣下ニ傳達ス。

頭等全權大臣李鴻章ヨリ媾和條約ノ批准ヲ皇帝陛下ニ上奏セル末、該條約ヲ批准セラル、ノ上諭ヲ發セラレタリ。然レドモ該上諭中ニ左ノ一節ヲ加ヘラレタリ。

朕聞ク、露佛獨三國ハ日清新條約中へ修正ヲ加ヘントシテ、三國聯合シテ日清兩國ト商議中ナリト、若シ該修正ニシテ本條約ノ規定スル所ト矛盾スル處アレバ、該修正ニ因リ本條約ヲ修正セザルヲ得ズ。此ヲ欽セヨ。

因テ清國政府ハ今前記ノ事ヲ日本政府へ通知ス。又曩ニ清國政府ヨリ休戰延期ノコトヲ請求スルニ當リ、米國公使「デンビー」氏ヨリ左ノ回答ニ接セリ。即チ日本政府曰ク、批准交換ハ規定ノ時期内ニ之ヲ行ヒ、若シ露佛獨三國ニ於テ欲スル所ノ修正ヲ加フルコト必要ナルトキハ、批准交換前ニ之ヲ爲サンヨリハ寧ロ交換後ニ於テ之ヲ爲ス方却テ容易ナラント、清國モ亦此處

理法ニ從ヒタリ因テ何等ノ修正アルトキニハ、批准交換濟ノ條約ノ外別ニ追加定約ヲ締結シ、兩締盟國ニ於テ之ヲ遵奉スルコト必要ナルベシ。

又清國政府ハ臺灣ニ於テ人民一般非常ニ激昂シ、終ニ内亂ニ至ルヤモ測ラレザルガ故ニ、批准交換ノ後ニ該事情ヲ勘考シテ其救濟策ヲ講ズルコト必要ナルベシト思考ス。

清國頭等全權大臣ハ已ニ右ノ次第ヲ日本國總理大臣ヘ電報シ置ケリ。

歐洲列國景況ヲ告知スル來札

在 英 加藤公使發信

拜啓時下益々御清福奉賀候。陳バ折角御苦辛之末清國ト満足ナル平和條約御調印相成候處、晚詩ニ、露佛獨三國ノ故障出デ遂ニ遼東半島ノ永久占有ヲ棄テザルベカラザルコトニ相成候由此間ノ御心勞眞ニ不一方義ト窃ニ恐察仕候。併シ佛獨ハ兎ニ角露國ハ如何ニモ眞面目ニ被察、

我ニ於テ彼ノ申分ニ從ハザレバ或ハ干戈ヲ以テ相見ヘザルヲ得ザル事ニモ可立到、果テ右様ノ場合出來セバ假リニ一時ハ勝利ヲ占ムルコトアルモ遂ニ大不幸ノ結果ヲ來スコトアルベシト考ヘザルベカラズ。仍テ残念千萬ナレドモ暫ク彼ノ申分ヲ立ツルハ誠ニ已ムヲ得ザル御處置ト奉存候。尤モ世間ノワイワイ連ハ隨分喧シカルベク、御苦勞ノ程奉察候。加フルニ大陸地ノ占領ト永遠ノ利害果シテ如何。隨分疑ハシキ事ト存候。若シ之ヲ棄ツル代償トシテ清國ヲシテ其償金額ヲ増サシムルノ御胸算アラバ、聊カ名義モ相立テ永遠ノ實益上ニ於テハ却テ好都合ナルベキカトモ存候。

英國政府ハ此度ハ餘程考ヘタルモノト相見ヘ仲々利口ナル働ヲ致候、御訓令ニヨリ我ノ味方ヲナサシメント盡力致候得共、純粹ノ中立ヲ守リ我ニ反對セザルト同時ニ一向我味方ヲモ爲サズ、全ク高見ノ見物ヲ致居、我方ヨリ云ヘバ甚ダ頼ミ甲斐ナキ事ナレドモ、彼ノ地ニ立テ之ヲ考フレバ、三國ノ向フニ立ツテ我ヲ助クルト云バ仲々彼ニ取リ大事ナルノミナラズ、其助力ヲ受クル報酬トシテ彼ヲ動スニ足ルモノヲ我ヨリ差出シ様モ之レナキニ付、彼ガ我ニ助力ヲ與ヘザルモ亦至極尤ノ事ト云ハザルベカラズ。外務大臣ト對談ノ模様ハ今便機密公信ニテ申上候間詳細右ニテ御承知可被下候。

此度ノ干涉ニ付最モ惡ムベキハ獨逸ナリ。彼ハ前日迄公然我ノ味方ナルカノ如キ舉動ヲ爲シ

日本政府ハ勿論歐洲人ヲモ油斷セシメタルニ、突然向フツラニ相成管ニ露國ヲ助ケタルノミナラズ或ハ之ヲ煽動シタル跡方モナキニアラズ。

是レ全ク一方ニハ露國ノ歡心ヲ得、一方ニハ佛國ガ類リニ露國ニ頼ルヲ妨ゲンタメノ歐洲政略ニ相違有之間數モ、其豹變一ニシテ止ラズ。最初ハ頻リニ我ニ好意ヲ表シ、愈々大切ノ場合トナリテ我ニ反對シ、又結局ニ就キ双方ヘゴマヲスリ、仲裁メキタル舉動ヲ爲シ其行爲一ニ幫間的ニテ、大國ノ威嚴ヲ損スルモノト云ハザルベカラズ。是ニ付青木子爵ハ一方ナラザル由、先日打合ノ爲メ内田書記官ヲ差向クベキ様照命有之候ニ付早速差遣ハシタルニ非常ナル弱リ方ニテ、殆ンド寢食ヲ安ゼザル體ナル旨内田ノ復命ニ御座候。此場合誰シモ心痛ハ無論ノ事ニ存候得共、從來ノ關係上青木子ノ失望心痛ハ嘸カシト被察候。内田書記官歸朝被命候處未ダ後任者ノ御沙汰參ラズ、兼テ御内意承候通り國府寺ニテモ御遣ハシ可相成哉相察候。誰ニテモ宜敷候間可成早ク御遣ハシ被下度候。

此度ノ事件一段落相付候上自然外務省員ヘ勲賞譽等ノ御汰沙有之候節ハ、當方公使館員モ其内ヘ御加ヘ相願度、内田伊集院兩書記官トモ電信ノ往復等一方ナラズ勲勵致シ慥ニ多少ノ御賞譽ニ預ル丈ノ働致候。

昨年來戰爭開始後今日マデ當地セントラル、ニユースハ我味方トシテ非常ノ効能ヲ現ハシ候

英國輿論ノ大體ニ於テ常ニ我味方ヲ爲セシニ就テハ、セントラル・ニユースノ功大ニ與ツテカアルコトニ御座候、尤モ其源ヲ云ヘバ常ニ我政府ヨリ其材料ヲ得タルコトユヘ、彼ニ於テ我政府ヲ德トスルハ無論ニ存候。畢竟彼レガ大ニ其社ノ名聲ヲ上ゲタルモ我ノ御蔭ニヨルコトトハ存候得共、支那地方ニモ通信者(デトリングハ其通信者ナル由)ヲ有シ居候事ユエ、時ニ支那ニ利アリテ我ニ不利ナル材料モ來リタル由ナレドモ、此分ハ可成世間ヘ配付セズ、苟モ我ニ利アル通信ハ勉メテ其配付ヲ謀リタル等、營業上トハ申ナガラ我政府ノ爲メ盡シタルコト隨分淺少ナラズ、仍テ此際其社ノ主幹某並ニ毎日當館ヘ出入候社員某ノ兩名ヘ勲章下賜ノ御沙汰相成候様仕度、何レ其事ハ公信ヲ以テ詳細可申立積リニ候間、可成申立通り御採用被下度希望ニ不堪。左スレバ今回ノ勞ニ酬ユルノミナラズ、將來彼ヲ使用スルノ必要有之候節大ニ便利ニ付可成ト存候。 頓首

五月十日

在 英 加 藤 高明

陸奥子爵閣下

李鴻章馬關遭難ニ關シ露國各新聞 論評西公使ヨリ報告

明治廿八年五月廿四日

内閣書記官^印

李鴻章遭難ニ關スル露國各新聞ノ評論在露西公使ヨリノ報告
右高覽ニ供ス。

親展送第三二一號

過般李鴻章遭難ニ關シ露國各新聞ニ於ケル種々ノ論評客月一日附ヲ以テ在露西公使ヨリ別紙
寫ノ通り報告有之候間右差進候也。

明治廿八年五月廿一日

外務大臣子爵 陸 奥 宗 光^印

内閣總理大臣伯爵 伊藤博文殿

送第二五號

最初下ノ關ニ於ケル李鴻章遭難ノ報當地ニ達スルヤ朝野一般ノ感情甚ダ惡シク、幾ント日本
開化ノ點ニ疑ヲ容ル、ノ情勢ニ有之候處、爾後右遭難事件ノ爲メ我 天皇陛下ハ清國ノ哀求
ヲ容レ、一時休戦ニ同意スベシトノ勅令ヲ下シ給ヘリトノ報再ビ相達感情稍々相和候様覺候。
本件ニ關シ當府ノ重立タル新聞紙ハ概ネ氣ノ毒ガリシモノ、如ク一時黙過シタル有様ナリシモ
其後迄ニ種々ノ論評ヲ下ダスモノ見聞候ニ付今其二三ヲ抄譯シ左ニ叙列候。

(三月廿七日 發兌) 「ジユルナル・デ・サン・ペテルスブル」新聞ノ評

直隸總督李鴻章ハ日清間媾和談判ノ爲メ數日前下ノ關ニ到着セシ處、同所ニ於テ兇暴者
ノ爲メ負傷シ、如此キ惡ムベキ所行ニ關スル詳細ノ事情ハ昨夜ノ電報ニテ余輩ニ報知セ
ラレタリ。

最初ノ通信ニハ加害者ハ愛國心ノ謬想ニ由リ右様ノ所行ヲ爲セシガ如ク報知アリシモ、
今日ニテハ兇暴ノ所行ヲナス一種政治上ノ黨與ニ屬スル壯士ノ一人ナリト云ヘリ。彼ハ
自己一人ノ意志ニ因テ此ノ所行ヲ爲セシカ、又ハ媾和ヲ妨害セントスル戰爭狂亂黨ノ教
唆ニ出デシカトノコトハ本件糾問ノ上明亮トナルベシ。此變難ニ付テハ日本朝廷諸大臣

高等官吏等ヨリ李氏ニ對シ親愛ノ衷情ヲ表セリ。又議會ハ本件ニ付哀悼ノ意ヲ表ストノ決議ヲ爲シテ同情ヲ表セリ。李氏ノ負傷輕少ナリシト云ハ幸ナリト雖ドモ、之ガ爲メ數月前ヨリ絶東ノ二帝國間ニ繼續スル戰鬪ヲ止メシメントスル媾和談判ノ遲延セザラントハ各國共同利害ノ上ニ於テ望マシキコトナリトス。

(廿八年三月廿六日發兌) 露國半官報

今ヤ全歐洲視線ハ遠ク日本大本營ノ隣市ナル下ノ關ノ一點ニ向テ注射集合シ、東亞將來ノ運命ヲ決スベキ媾和談判ノ結果如何ハ未ダ之ヲ知ルニ由ナキモ、兎ニ角事局ハ漸ク終結ニ近カラントス。「オストアシアチシユ、コレレスボンデント」新聞ノ説ク如ク、今回清國ガ日本ヲシテ和議ニ肯諾セシメ得ルヤ否ヤハ其關係スルトコロ頗ル重大ニシテ、苟モ日本人ノ賦性堅忍ニシテ智力アリ、且ツ非常ニ自愛ノ精神ニ富ムノ國民タルコトヲ知ルノ人タランニハ、必ズ輕忽ニ之ヲ觀過セザルベシ。若シ一朝不幸ニシテ和議破裂スルニ至ラバ、東洋ニ於ケル未曾有ノ葛藤ヲ醸シ、獨リ老朽ナル清國ハ危殆ノ域ニ陥ルノミナラズ、歐洲諸大國ノ利益モ亦タ損傷ヲ蒙ルコト甚シカラシ。歐洲諸新聞ハ概ネ之ト大同小異ノ意見ヲ有スレドモ東洋ニ於テ將ニ終結セントスル出來事ニ對シ、歐洲諸國ノ

執ルベキ決意ヲ論ズルニ方リ、斯ル重要ナル問題ヲ處理スルニ必要ナル共同心ニ乏シ。今重立タル諸機關ガ論ズルトコロノ要點ヲ舉グレバ、歐洲諸國ハ日本要求ノ度大ナルヲ見テ將來安心スベカラザルモノアルガ故、媾和談判ノ終結前ニ干渉ヲ爲スコト必要ナリ。若シ日本ハ文明諸國ト伍列スル名譽ノ地位ヲ得タル道德上ノ權利ノ外、更ニ過分ノ實益ヲモ併得セント欲セバ、歐洲諸國ハ到底默過スル能ハズト云フニ在ルガ如シ。英國ハ新大國ナル日本ト同盟シテ太平洋上ノ霸權ヲ握ランコトヲ望ミ、又亞細亞ニ領土ヲ有スル歐洲某國ハ此好機ニ乗ジ清國ヲシテ土地ヲ讓與セシメ、自國版圖ノ擴張ヲ謀ルト迄喧傳シタレドモ、最モ信用スベキ新聞ニ據レバ如此キ傳説ハ警戒ヲ加フベキコトニシテ、東亞ト直接ニ利害ノ關係ヲ有スル諸國ハ其中假令ヘ實際如此キ企圖ヲ抱キシモノアリトスルモ、此種ノ事件ハ暫ク之ヲ後日ニ讓リ、今日ハ先ヅ失墜シタル清國ヲシテ其領土中ノ大部分ヲ日本ニ割與スルノ危險ヲ避ケシムルコトニ共同盡力セザルベカラズ。然ラズンバ東洋ノ大勢全ク一變シ、其結果ハ獨リ清國ノ爲危險ナル而已ナラズ、東洋ト政略及貿易上ノ利害ヲ同フスル諸國ノ地位ニ及ストコロノ影響モ亦頗ル大ナラント。歐洲諸國ハ日本ヲシテ其領土ヲ擴張セシムル能ハズト論ジタル「タイムス」新聞ノ意見ハ世人皆既ニ之ヲ知レリ、「ニュー、フレイ、プレス」新聞モ亦タ如此キ意見ヲ有シ「中華國ノ

中心ヲ衝キ、之ヲ倒伏セント欲スル日本ノ決心ハ滿洲ノ土地ヲ讓與スベカラズト勸告シタル清國ノ諸友邦ヲ沈黙セシメ、清國モ亦タ之ヲ犠牲ニ供セシメ、平和ヲ恢復スルノ望ナシ。歐洲諸國ハ清國ノ諸港ヲ開放シテ萬國貿易ノ市場ニ充ツルノ必要ヲ説ケドモ、日本ハ全ク之ニ反對セリ。故ニ歐洲諸國ハ最早ヤ日本ガ清國ノ土地ヲ割キ版圖ヲ擴ムルコトヲ妨ゲ得ルノ望ヲ失ヘリト論ゼリ。歐洲ノ某外交社會ニ於テハ清國政府ノ提議セシ媾和談判ノ成否ニ疑ヲ抱キ居タルガ、果シテ過日歐洲諸國ノ共同干涉ニ關スル協議ハ米國ヨリ公然タル拒絶ヲ受ケ、諸國ヲシテ兩交戰國ニ勸告シ速カニ東洋ノ平和ヲ再興スルノ希望ヲ失ハシメタリ。米國人ハ自己ノ請求ノミヲ主張シ列國ノ共同干涉ヲシテ益々錯雜困難ノ域ニ陥ラシメタリ。故ニ李鴻章ノ談判モ或ハ從前ノ使節ト一般、日本ヲシテ和議ヲ肯諾セシメ得ザルヤモ難斗、然レドモ現今ノ情勢ハ兎ニ角一方ニ於テ誠實ニ平和ヲ希望スルノ意ヲ示シ、他ノ一方ニ於テモ和議ニ同意シ事局ヲ結了セントスルノ念アリ。只ダ一ノ困難ナル事情ハ日本ニ於テ北京攻略ヲ主張スル者多ク國民尙武ノ氣焰頗ル旺盛ニシテ殆ンド之ヲ壓止スベカラザルノ勢ヲ呈セルニ在リ。下ノ關發電信ハ忽チ「清國皇帝ノ派遣シタル媾和使節李鴻章ハ一狂妄者ノ爲メ銃撃セラレタリ」ト傳フ。此銃撃ハ外國使臣ノ神聖ヲ犯シタルモノニシテ歐洲ヲシテ悲痛ナル感情ヲ抱カシメタルハ疑ヲ容ルベカラズ。犯罪者ハ素ヨリ相當ノ處罰ヲ受クベシト雖ドモ、其兇行ハ日本人ノ短所ヲ明示シ、歐洲ノ武器ト制度ヲ利用シタル東亞國ガ、歐洲文明ノ外裝ヲ以テ掩蔽シタル暗黒ナル裏面ニ向テ世人ノ注視ヲ促セリ。

(三月三十一日發兌)

「ジユナル・デ・サン・ペテルブル」新聞ノ評

露國電報會社昨日付ノ通信及本日領收セル「ルーテル」電報會社「ワシントン」府發電信ニ由レバ、日本皇帝陛下ハ日本政府ニ於テ休戰ヲ承諾スベシトノ旨ヲ李鴻章ニ通知スベキ訓令ヲ下ノ關ニ在ル日本ノ全權委員ニ與ヘラレタリト云ヘリ。此通信ハ同府ニ於ケル日本公使館ヨリ出デシモノナリトノコトナレバ其確實ナルコト疑ナカルベシ。而シテ此報告ノ重要ナルコトハ喋々ヲ要セザレドモ、此程負傷セル直隸總督ノ容體ハ續テ快方ナルヲ以テ、一時中止スルコトナキヤト杞憂セル媾和談判再ビ開始シテ、各國交渉ノ利害ヲ調和スルガ如キ結局ノ決定ヲ見ルニ至ル様其談判ノ進行センコト吾人ノ希望スルトコロタリ

(三月三十一日發兌)

「ノウオウエ・ウレミヤ」新聞ノ社説

「日本皇帝ハ清國ニ對スル戰鬪ヲ中止セシメタリ」トノ露國電報社ノ昨日付通信ハ本日接收シタル「ワシントン」府發電信ニテ全ク正確ナル事實トナレリ。日本皇帝ヲシテ如

李鴻章ト露國各新聞論評

此キ處置ニ出デシメタル理由ナリトテ前記電報社ノ説ヲ聞クニ、同國皇帝ハ下ノ關ニ於テ清國使節李鴻章ニ對スル兇行ヲ聞キ大ニ震怒セラレ、痛悼ノ意ヲ表スル爲メ清國ノ請求ヲ容レ、休戦ニ同意スル旨ヲ負傷シタル李氏ニ傳達セシメラレタリト。

日本皇帝ガ如此キ處置ヲ執リ、清國政府並歐洲諸國ニ對シ日本政府ト兇行者トハ全ク反對ノ地位ニ立ツノ實證ヲ表示セラレタルノ事實ハ既ニ明瞭ナリ。然ルニ日本ガ今度清國ノ請求ニ應ジ媾和ニ取懸リタルハ、單ニ日清事件ニ關係ヲ有スル歐洲諸國ノ注視ヲ他方ニ轉向セシメンガ爲メノ一演劇ニ過ギズ云々ノ風説評ハ、近頃歐洲諸國間ニ流布シ、爲メニ今回下ノ關ニ於ケル狙撃一件モ亦モ日本政府ノ不利益ニ向テ解釋ヲ下スモノ往々見聞スルハ同政府ノ夙ニ熟知スルトコナラン。故ニ此際前記ノ如キ誤解ノ風評ヲ豫防シ得ルハ只ダ事實ヲ以テ之ヲ證スルニ在リ、現ニ同國皇帝ガ斷然タル處置ヲ執行シ休戦ノ請求ヲ容レタルハ全ク此等誤謬ヲ避クルニ必要ナル一實證トナルベシ云々(以下省略)

明治二十八年四月一日

在露特命全權公使 西 徳次郎

日清媾和談判ニ關スル歐洲諸國殊ニ露國ニ於ケル意向 在米栗野公使ヨリ報告

明治廿八年五月廿四日 内閣書記官印

日清媾和談判ニ關シ歐洲諸國殊ニ露國ニ於ケル意向ニ付在米栗野公使報告

右供高覽

親展送第三一號

日清媾和談判ニ關シ歐洲諸國殊ニ露國ニ於ケル意向ニ付在米栗野公使ヨリ三月二十八日附ヲ以テ別紙ノ通り報告有之候間爲御參考右寫差進候也

明治二十八年五月廿一日

外務大臣子爵 陸 奥 宗 光印

内閣總理大臣伯爵 伊藤博文殿

機密第々四號

日清媾和談判ニ關スル露國ノ意向

清國政府ハ今回ノ談判ニ關シ再ビ歐洲四強國ノ干涉ヲ求ムル様子アルニ付テハ、内々ニテ國務長官ニ面會シ双方熟懇ノ間柄ヲ利用シ、同官ヨリ在英佛獨露ノ米公使ニ訓令シテ同四國ノ意底ヲ探知セシムル様懇請可致旨ノ御電訓去ル十九日夕刻接到候ニ付、本官早速國務長官ヲ其宅ニ訪ヒ本官一箇ノ心付トシテ右ノ次第懇談ニ及候處「自分モ此事ニ關シテハ兼テ苦慮致居リテ何トカ穩ニ日清間ノ話相纏リ候様致度モノト祈居タル折柄御内話ニ接シ御心勞ノ程御察申候、乍去歐洲諸國ノ外交政略ハ中々我公使ニテハ突留兼候故、迪モ充分ノ事ハ行届ク間敷ト存ズレドモ幸ニ大統領モ歸府セラレタルコトナレバ一應ハ相談可相試ニ付、明日正午頃重テ來訪ノ勞ヲ煩シタシ」ト申候ニ付、翌日如約同長官ヲ國務省ニ訪ヒ候處、同長官ハ「昨日御話ノ事早速大統領ニ相談致タルニ、矢張り本官ト同見込ニ御座候、尙合衆國ノ外交政略ハ本官今更申迄モナク貴官御承知ノ通り故、今日ノ日清問題ニ關シテモ歐洲諸國ト相結テ貴國ニ干涉ヲ試ムルガ如キハ決シテ有間敷事ニ有之、此段ハ本官誓テ御受合可申モ、歐洲諸國ノ意底ヲ探知スルノ一段ニ至リテハ實ニ難中ノ難事ニシテ、假令ヒ當合衆國ヨリ派遣ノ大使公使ニ訓令ヲ發スルモ彼國政府ノ底意ヲ測量スルコト容易ナラザルノミナラズ、殊ニ日清事件ノ如キ重要ノ關係ヲ有スル國外交政略ニ就テハ、到底其目的ヲ達シ能ハザル義ト存候、去リトテ強テ之ヲ質サントスレバ忽チ彼國ノ疑惑ヲ惹起シ現政府ハ合衆國ノ定策ニ違ヒ、且ツ嚴正中立ノ定義ニ違反スルモノナ

リトノ誹評ヲ招キ、現政府ヲシテ頗ル困難ノ位地ニ陥ラシムルモ難計ニ付、此事ハ乍遺憾御望ニ應ジ難シ。尤モ自分ノ考ニテハ目下公然清國ヲ助ケテ貴國ニ反對ノ舉動ヲナス國モ有間敷ナレドモ、英露諸國ガ貴國ノ東洋ニ雄飛スルヲ好マザルハ明瞭ニシテ、殊ニ露國ノ如キハ少シノ機會ダニアラバ之ニ乗ゼントスルモノ、如クニ相見ヘ候ヘバ、貴國ニテモ充分之ニ御注意アラントトヲ希望ス。又今回貴國ガ清國ニ要求セラル、條件ノ細目ハ本官之ヲ承知不致候ヘドモ、聞ク處ニヨレバ巨額ノ償金ト領地ノ讓與ヲ命セラレントスルハ事實ニ近キモノ、如シ、乍去臺灣ハ扱置キ亞細亞大陸ノ一部ヲ得ラレントスルノ一事ハ貴國政府ガ將來蒙ルベキ軍事上並ニ財政上ノ負擔責任ノ輕重ニ比シ頗ル考慮ヲ要スベキモノト存候。云々相話候ニ付本官ハ同長官ニ對シ合衆國ガ我國ニ對シ終始公平ニシテ且ツ友厚ノ政策ヲ執ラル、ハ我國ノ喜悅スル處ナル旨ヲ述べ、且ツ同長官ガ如此何事モ打明テ談話セラレタル好意ヲ謝シ歸館ノ後別紙甲號寫ノ通り貴大臣迄發電致シタル次第ニ有之候、然ルニ去ル廿三日本官日米條約批准交換濟ニ關シ、貴大臣閣下ヨリノ電報傳達ノ爲メ同官ヲ訪ヒタル際、同官ハ在露米公使ヨリ長電ヲ接受シタル趣ヲ以テ内々ニテ左ノ其要領ヲ明シ吳レ候

露國ガ極東ニ對シ有スル所ノ大望ハ當時愈々其勢焰ヲ増シ、日清戰爭ガ數年ノ後ニ起ラズシテ今日ニ發シタルヲ大ニ遺憾トスルモノ、如シ。露國ハ兼テ北支那及滿洲ヲ併吞

センコトヲ希望シ好機會アラバ之ヲ實行セントスルモノナリ。故ニ日本ガ滿洲地方ヲ占領スルニ至ラバ必ず彼ハ反對スベシ。又同時ニ日本ガ朝鮮ヲ保護國ト爲スコトアルニ於テハ是亦反對ヲ表スベシ。露國ハ萬一ノ事變ニ應ゼンガ爲メ既ニ二萬九千五百ノ兵ヲ清露ノ國境ニ派遣シ、猶追々其士官並ニ兵ヲ儀裝シテ其武力ヲ増加スルモノ、如シ。又露國ハ目下日清交渉事件ニ付テハ陰ニ清國ヲ教唆スルモノ、如シ。要スルニ露國ノ舉動ハ到底日清ノ利害ト相容レザルベシ。

國務長官ハ語ヲ添テ曰、在露米公使ハ炯眼英敏ノ人ナレバ此電報モ事實トハ甚シキ相違有間敷ト存候。乍去右ハ極メテ祕密ニ取扱ヒ居リ大統領ト同官ノ外絶テ知ル者ナケレバ本官ニ於テモ其舍ニテ口外セザル様致度旨申添候ニ付テハ貴大臣閣下ニ於テモ右様御承知相成候様致度存候。

歐洲諸國ノ干涉ニ關シ貴大臣閣下ヨリ御電報ノ次第ハ前述ノ通り國務長官ニ於テモ表向一旦ハ謝絶致候ヘドモ、數日ナラズシテ在露米公使ヨリ右ノ飛報到達致候ハ本官察スルニ全ク國務長官ヨリ内密ニ訓令ヲ發シテ回電セシメタル決果ニ可有之、且露國ノ企圖ニ關シ同電ノ報ズル所モ亦本官等ガ仄ニ承リ及候處ト大差無之候。別紙乙號寫ノ通り發電候ヘバ既ニ委曲御承知ノ義ト存候ヘドモ猶爲念別紙相添及具申候也（別電略）

明治二十八年三月二十八日

日清媾和事件ニ付在伊高平公使ヨリ清國 公使ヨリ伊皇ノ助力ヲ懇願シタル義ニ付 報告

明治廿八年五月廿四日 内閣書記官

日清間媾和事件ニ付伊國駐劄清國公使ヨリ伊國皇帝ヘ其助力ヲ懇願セル儀ニ關シ在伊高平公使報告

右供高覽

親展送第三三號

日清間媾和事件ニ付伊國駐劄清國公使ヨリ伊國皇帝ヘ其助力ヲ懇願セル義ニ關シ在伊高平公使ヨリ客月九日附ヲ以テ別紙ノ通り報有之候間爲御參考右寫差進候也

明治廿八年五月廿一日

外務大臣子爵 陸 奧 宗 光

內閣總理大臣伯爵 伊藤博文殿

機密第七號

英佛兩國駐劄清國公使龔某ハ當國兼勤ノ職ヲ帶ブルモノニ有之候得共、客歲新任以來未ダ當宮廷ニ對シ就任ノ手續ヲ履行致居不申候處、去月十二日突然當地ニ來着シ十六日ヲ以テ皇帝陛下ニ謁見シ、十七日日本任地ニ向テ歸去致候。同氏ノ當地ニ來着スルヤ忽チ世人ガ注目スル所トナリ、日清間ノ講和事件ニ付清帝ノ密旨ヲ奉ジテ伊國皇帝ノ助力ヲ依頼スル爲メ渡米候様唱道候者有之候ニ付、拙官ハ此際同氏ノ使命ヲ妨害スルノ手段ヲ取ルコト適當ナラント存候得共、外務大臣ハ十三日ヲ以テ「ゼノア」公第二子出產ニ關スル公證事務ノ爲メ「チユリン」府ニ發向相成候ニ付、彼此躊躇罷在候處十四日ニ至リ李鴻章氏朝鮮獨立軍費賠償土地割讓等ノ委任狀ヲ携帶シテ本邦ニ渡來可致旨ノ御電報相達候ニ付、右ハ固ヨリ機密ニ付スベキモノニ有之候得共、清使ノ使命ヲ妨害スルニハ右李氏ノ委任條件ヲ伊政府ニ內告シ以テ清政府ノ講和ニ關スル決心ノ程度如何ヲ表明シ、在外公使ノ口舌ニ依テ動搖スベキモノニアラザルコトヲ訓示致候儀必要ト存候間。十五日ヲ以テ外務次官ニ面會シ右御電音ノ趣ヲ機密的ニ內話候處、同官ハ土地

讓與ノ條件ヲ以テ豫想外ニ措キタルモノ、如ク、稍々驚愕ノ色相見エ候ニ付拙官ハ略左ノ意味ヲ以テ陳辯致置候

清政府ニ於テ己ニ土地割讓ノ決心アル上ハ、妄ニ他國ノ容喙ヲ許スベキモノニアラザルコト勿論ナレドモ、近來新聞紙上ニハ我國ニ於テ臺灣ヲ要求スル旨ヲ記載スルモノアリ、滿洲ヲ願望スル旨ヲ記載スルモノアリ、又兩地ヲ併セテ占領セントスル旨ヲ說道スルモノアリテ其中ニハ種々ノ異議ヲ發スルモノ亦多キガ如シ。本使ハ我政府ノ意向果シテ如何ヲ知ル能ハザレドモ、本使一己ノ私見モ亦多少貴政府參考ノ裨益タルモ知ルベカラズ。依テ一應閣下ノ清聽ヲ煩ハサント欲スルナリ。即チ和議功ヲ奏シ戰爭終ヲ告ルノ後ハ朝鮮ハ固ヨリ獨立國タルベキモ、其保護ノ責任ハ專ラ我國ニ歸スルコト論ヲ俟タザレバ、該半島ノ背面ニ在ル所ノ土地ハ我國ノ版圖トシテ之ヲ占領スルコト將來ノ平和ノ爲メ必要ナルノミナラズ、若シ歐洲列國ニ於テ我國ヲシテ東洋諸國ニ對シ文明ノ大義ヲ代表セシメントスルノ意アラバ、我國ノ勢力ヲ亞細亞大陸ニ施用スルノ根據ヲ占領セシムルコト甚ダ緊要ナルベシ。何トナレバ臺灣ハ一大島ナリト雖ドモ大陸ト交通隔絶スルヲ以テ其政治上ノ勢力ハ何程文明主義ヲ遵行スルモ土地接續ノ土區ノ如ク容易ニ他方ニ感染スルノ便利ヲ有セザレバナリ。故ニ我政府ニ於テ果シテ滿洲又ハ其一部ヲ占領スル

ノ意アリテ、各國モ亦干涉ヲ加ヘザルモノトスレバ本使ハ東洋ノ文化是レヨリ進涉シ商業亦大ニ發達シテ各國共ニ其利益ヲ享受スルニ至ランコトヲ信ズルナリ。尤土地問題ニ付講究ヲ要スベキハ其提出ノ方法如何ニ在リ、露土ノ戰爭ニ於テハ露ハ軍費ノ外ニ償金及損害要償ヲ請求シ、其總金額ノ一部ニ對シ土地ヲ讓與セシメタレドモ、普佛ノ戰爭ニ於テハ普國ハ當初ヨリ軍費外ニアルサスロレンヲ要求セリ。故ニ償金ノ一部ニ對シテ土地ヲ割讓セシムルモ又償金及土地ヲ併セテ共ニ要求スルモ皆歐洲文明國間ニ於テ己ニ先例アルコトナレバ、右ハ此際豫メ御記憶アラシコトヲ希望スルナリ。云々

是ニ於テ外務次官ハ貴公使ノ所説ハ之ヲ了悉セルモ、其眞意ノ所在ハ如何トノ尋問有之候ニ付拙官ハ我胸中ノ志望ヲ眞率ニ吐露スルトキハ貴政府ニ於テ我各般ノ要求ヲ是認セラレントヲ希望スル旨相答候處、大臣歸來ノ上ハ早速轉告可致旨次官申聞候ニ付、更ニ大臣歸來ノ後十七日ヲ以テ之ヲ訪問致候處、大臣曰ク土地ノ問題ニ關シテハ各國干涉ノ辭柄タルベキコト屢々貴公使ニ内話セル如クナレドモ、若シ貴政府ニ於テ果シテ土地ヲ請求セラレントセバ英露ノ如ク東洋ニ於テ最モ直接ノ關係アルモノト豫メ協議ヲ遂グルコト必要ナルベシ。而シテ露ノ如キハ自然支那ノ一部ヲ割取スルノ意アルベシ。貴公使ハ露ニ於テ何地ヲ請求スベシト思ハル、ヤ。拙官曰ク露ハ差當リ西伯利亞鐵道ヲ浦潮港ニ到達セシムル爲メ滿洲ノ一部ヲ望ムナラント

思フナリ。大臣曰クソレハ貴政府ニ於テ好マザルベシ、拙官曰ク該地方ナラバ不得已場合ニ於テ我政府同意スルヤモ難計、大臣曰ク事茲ニ至レバ英モ亦某地ヲ望ムナラン、拙官曰ク或ハ然ラン然レドモ英ハ己ニ廣大ノ土壤ヲ有シ其政府ニ困難ナルノ狀ハ世人ノ所知ナリ。故ニ英ハ東亞地方ニ於テ更ニ版圖ヲ膨脹セシメ自ラ其政務ニ當ルノ責任ヲ好マザルベシト雖モ、露ノ東侵モ亦其恐ル、所ナルヲ以テ數月前迄ハ清ヲ助ケ朝鮮ヲ保護シ以テ露ニ當ラントスルノ意ナリシガ如クナレドモ、清ハ今回ノ戰爭ニ於テ全ク其實勢ヲ表證セル爲メ今日ニ於テハ全ク從來ノ方略ヲ一變セルノ狀アリ、故ニ若シ露ニ於テ西伯利亞鐵道ノ爲メ滿洲ノ小部分ヲ割取セントスルトキハ英ハ軍略的ノ要地ヲ得テ之ニ當ルノ策ヲ取ルモ難計。大臣曰ク右等ノ土地問題ハ貴政府ニ於テ己ニ英露ノ意見ヲ叩カレタルコトアリヤ。拙官曰ク本使ノ所言ハ皆一己ノ私言ナリ、大臣曰ク貴國ハ各國ノ干涉ヲ避ケントスルノ意ナレドモ、元來貴國ニ於テハ今般媾和ノ機ニ乗ジ清國ト同盟シテ將來歐洲各國ニ反抗スルノ方向ヲ取ルベシトノ説アリ如何、拙官曰ク歐洲ノ諸新聞紙ニハ右様ノ暴説ヲ記載スルモノアリシモ我國ハ清國ノ如ク反覆無常ノ欺騙ヲ以テ各國ト交際スルモノト同盟スルコトナキハ本使ノ斷言スル所ナリ。清ハ曩ニ英ト結ビ中ゴロ變ジテ露ニ依リ、遂ニ英ノ信用ヲ失ヒタルハ皆人ノ所知ナリ。我國ハ如此邦國ト共同シテ何等ノ利益ヲ得ベキヤ、況ンヤ我國ハ宇内各國ノ活劇場裏ニ出入シテ長ク文明諸國ノ伴侶タルコトヲ願望ス

ルモノナレバ、假令亞細亞ニ僻在スト雖モ、清國ト協力シテ歐洲列國ニ反抗スルガ如キ愚策ヲ取ルモノニ非ズ。大臣曰ク元來伊國ハ東洋ニ於テ土壤的ノ責任ヲ望ムモノニアラザレドモ、若シ貴國ニ於テ今般清國ヨリ割取セラルベキ地ニ於テ伊國ノ商工業的利益ヲ特別ニ保護スルコトヲ約諾セラルレバ、本大臣ハ伊國政府ヲシテ各國ノ干涉ヲ妨排スルノ手段ヲ取ラシムルコトヲ試ムベシ貴説如何。拙官曰ク貴大臣ノ好意ハ每度感謝ニ餘アリ、然レドモ本使ハ熟考ノ上我政府ニ稟議セザレバ決答スル能ハズ。大臣曰ク本大臣ト雖モ此事ニ就テハ伊政府ノ意見ヲ代表スルモノニ非ズ、若シ貴政府ニ於テ同意ナラバ伊政府ノ意見ヲ一定スルコトヲ努メントスルノ意ニ過ギズ、拙官曰ク本使モ亦熟慮ノ上更ニ教ヲ請フコトアルベシ唯差當リ貴大臣ニ請ハントスルコトアリ、他ナシ今般我政府ニ於テハ愈々媾和談判ヲ開始セントスルニ付テハ貴政府ノ如キ最モ友好ニシテ最モ公正ナル政府ノ下ニ駐劄スル本使ノ職分ハ力ヲ盡シテ各國ノ舉動ヲ探知シ我政府ノ參考ニ供スルヲ以テ必要トナス。故ニ貴大臣ニ於テ本使ノ請ヲ容レ時々必要ノ教示ヲ與ヘラレナバ益々閣下ノ厚志ニ感銘スルナリ。大臣曰ク貴意ヲ領セリ。

外務大臣トノ談話ハ右ノ通りニシテ其内伊國政府ヲシテ各國ノ干涉ヲ妨排セシメントスルノ一事ハ拙官ニ於テ伊國ノ東洋ニ於ケル努力ヲ洞知セザルニモアラズ。又各國ノ猜疑ヲ排撥スルノ虞ヲ感ゼザルニモ非ザレドモ、即坐之ヲ擯斥スルヲ得ズ、又將來媾和談判ノ模様ニ依リテハ之ヲ利用シテ我利益ヲ謀ルノ時機モ可有之存候ニ付、拙官限リ姑ク參考ノ一資料トシテ留心致置、其他ノ事ハ去月十七日第四十一號拙電ヲ以テ清公使渡米ノ事ト共ニ其概要ヲ具報致置候儀ニ有之候處、右談話等ノ結果トハ難申候得共、清公使當國皇帝陛下へ謁見ノ後當府「イタリー」新聞中別紙切抜ノ通記載相成、其筆鋒精銳ニシテ趣意公正ナルトコロヲ見レバ尋常新聞記者ノ所説トモ不被存候間、或ハ其筋ノ使嗟ニ出デタルモノナルヤモ難計候。果シテ然ラバ清公使謁見ノ節皇帝陛下勅語ノ次第モ之ニ依テ推察被致、隨テ其使命ノ結果モ察知スルヲ得ベキコト、被存候

右具報致候 敬具

明治廿八年九月四日

在伊特命全權公使 高平小五郎

外務大臣子爵 陸奥宗光殿

新聞切抜ハ略ス

聖駕還幸ニ付各國使臣言上振

佛國使臣言上振

我佛蘭西國政府ガ貴帝國ノ名譽アル凱旋ト 陛下ノ幸福ヲ懇禱スル誠意ヲ 陛下ニ奏上スルヲ得ルハ余ノ最モ感銘ニ堪ヘザル所ナリ。

米國公使言上振

陛下ハ貴國及貴國臣民ノ爲メニ深く 宸襟ヲ惱マシ遠征ノ勞ヲ親ラセラル爰ニ數曆月、今ヤ平和恢復ノ佳節ニ際シ勇壯健全帝都ニ還幸アラセラレ、米國代表者トシテ余ニ拜謁ノ榮ヲ與ヘラレ余ヲシテ親シク至誠ナル祝意ヲ叡聞ニ達スルノ好機ヲ得セシメラレタルハ余ノ光榮ニ堪ヘザル所ナリ。

獨逸公使言上振

余ハ 陛下ノ軍隊及帝國ノ名譽タル戰勝ノ後首府ニ凱旋セラレタルニ際シ、爰ニ謹ンデ至誠ノ祝詞ヲ奏上スル光榮ヲ有ス。

和蘭辨理公使言上振

本日陛下ノ謁見ヲ辱フセシヲ深謝シ 陛下遠征中ノ御心勞在ラセラレシニモ係ラズ、御康寧ニ渡ラセラル趣本國ニ通知可致候。

布哇國辨理公使言上振

平和恢復ノ佳節ニ際シ余ハ 陛下ノ健全還幸アラセラレタルヲ歡喜シ、爰ニ誠實ナル祝意ヲ表白シ奉リ、尙ホ 陛下ノ萬壽康寧ヲ祈リ奉ル。

墨西哥代理公使言上振

墨西哥政府及人民ノ名義並ニ余一個人ノ資格ヲ以テ、今日 陛下ニ咫尺シ親シク凱旋ヲ祝シ奉ルノ好機ヲ得タルハ余ノ幸榮ニ堪ヘザル所ナリ。而シテ余ハ日本帝國ノ爲ニ 天皇陛下ノ萬壽ヲ誠實ニ禱ルモノナリ。

西班牙臨時代理公使言上振

陛下ハ永ク廣島ニ於テ戰勝ノ軍隊ヲ指揮シ、今ヤ首府ニ凱旋アラセラレタルニ際シ、余ハ爰

ニ至敬ノ祝詞ヲ奏スル光榮ヲ有ス。

英國臨時代理公使言上振

帝國軍隊ノ功績ヲ奏セシヨリ 陛下首府へ還幸アラセラレ日本帝國ノ爲ニ一大名譽ナル平和ノ結了ヲ告ゲタル佳節ニ逢ヒ 陛下ニ咫尺シ奉リ親シク誠實ナル祝意ヲ奏上スルコトヲ得タルハ余ノ最モ光榮トスル所ニシテ、余ハ 陛下ガ此ノ特權ヲ余ニ授ケラレタルヲ深く感佩スルモノナリ。

在清林公使清國償金募集ニ付ハート氏ト談話ノ件

機密第貳號信

本使本日總理衙門ヨリ歸途各國公使ヲ訪問致候。次デ以テ總稅務司サー、ロベルト、ハート氏ヲ問ヒ談話ノ末日本へ可拂償金募集ノ事務ハ必ズ貴下ニ任セラル、所ト存ズル旨申出候處、

同氏申候ニハ先頃迄ハ本司ノ手ニテ取斗ノ筈ナリシニ、露獨ノ交渉以來種々ノ障害相生ジ此後如何ニ相成候哉不相分、露獨ハ此度ノ事ニ付テハ其本意ノ如何ハ姑ク置キ、清國ニ對シテハ實際ノ恩アルヲ以テ清國ハ之ニ報ヒザルベカラザル地位ニ立テリ。故ニ露獨ノ望ニ從ヒ其保證ニテ公債ヲ起ス事ハ清廷ノ肯ズル所ナレ共、兩國政府ノ所望ニ因リテハ之ガ爲メニ他日政治上ノ繁累ヲ貽ス事ハ又清廷ノ大ニ恐ル、所ナレバ、未ダ全ク露獨ニ依頼スル事ニ決セズ。清國ノ此災難ヲ濟フ事ハ全ク日本政府ノ意向一ツト存候。若シ七年ノ期ヲ延べ十年ヲ以テ償金完済ノ機ト爲ス事ヲ得バ、海關ノ收入ヲ以テ支拂フ事ヲ得ルガ故ニ、露獨ニ依頼スルニ及バズ又後患ヲ貽スノ恐レナシ云々ト。言稍々デリケートノ點ニ及ビ、且ツ過日御電示相成タル在日本英國代理公使ノ云フ所ト稍ヤ符合スル丈ケハ相分候ニ付、話頭ヲ他ニ轉ジ辭シ去候、右爲念御報知申候。敬具

明治廿八年六月廿五日

清國北京ニ於テ

特命全權公使 林

董

外務大臣臨時代理侯爵 西園寺公望殿

清國償金募集ニ付ハート氏ト談話

荒川領事ヨリ伍廷芳羅豐祿等清國內情ヲ打明タル旨ノ報告

當地ハ意外ニ一般ノ氣受ケモ宜敷、從テ萬事圓滑ニ相運居候ヘバ稍々再任ノ甲斐有之愉快ニ御座候。伍廷芳羅豐祿兩氏ノ如キハ李鴻章ト當館トノ間ニ在テ度々來館、頻ニ清國ノ運命如何トモ難致單ニ此末ハ北京駐在日本公使ノ刺撃如何ニ因テ清國ノ改革見ルベキモ、敗軍ノ結果トシテハ更ニ其氣慨ヲ抱クモノナシ。外交ノ失策ハ今更申迄ナク現今ハ清ハ露ノ爪牙ノ下ニ置カレ恰モ昔日朝鮮ガ清ノ下ニ在リシガ如キ狀ニ陥リ、遂ニ又四分五裂自滅ノ場合ニ相成ルモ難計ト親敷内情ヲ打明カシ慨嘆致居候。北京ノ翁同龢獨リ權力ヲ振ヒ最モ李鴻章ニ反對ノ趣ニ候。從テ李ノ配下ヨリ公使ヲ出スニ至テモ中々容易ナラザル模様有之候ニ付、過日來林公使ヘハ内情申通シ間接伍ノ如キ内外ノ事情ニ通ジタル人物ヲ東京ニ駐在セシメ度旨希望ヲ相述置申候。

親展送第八四號

旅順港船渠ニ於ケル諸機械等保存方ノ義ニ付、李鴻章ヨリ伍廷芳ヲ以テ申越候件ニ關シ在天津荒川領事ヨリ別紙之通リ報告致來候間右寫差進候也。

明治二十八年七月十九日

外務大臣臨時代理 文部大臣侯爵 西園寺公望印

內閣總理大臣伯爵 伊藤博文殿

機密第二號

本月二日午後伍廷芳氏李鴻章伯ノ命ヲ帶ビ來館之上李伯ノ願意ヲ左ノ如ク開陳致候

目下旅順港船渠ハ如何相成居候哉、諸機械所ハ破壞致シ居ラザル歟。李伯知ルニ由ナシト雖モ同地モ早晚清國ヘ還付可相成義ニ付テハ右二ヶ所ハ敗軍後ノ清國ニ於テ更ニ新設スル等ノ事ハ誠ニ困難中ノ困難ニ候ヘ共、愈御還付可相成場合同港屯在ノ帝國軍隊ニ於テ一切破壞セザル様取計方其筋ヘ切望ノ趣轉報致吳候旨申出候。

右ハ遼東半島還付ノ談判モ未ダ開カレザルニ先ンジ自由ケ間敷申込ミトハ存候ヘ共、平和ノ

爲ヲ結ビタル今日ニシテ、是レヨリ交情ヲ温メントスル際ニ斷然轉報方拒絶スルハ如何ガト存
ジ、小官ニ於テハ一切旅順港ノ事情ハ詳ニ承知セザルニ依リ、李伯切望ノ趣旨ハ其筋ヘ取次可
致旨相答置候本件ニ關シテハ林公使ヘモ通知致置候右申進候。敬具

明治二十八年七月二日

在天津 一等領事 荒川 己次郎

臨時外務大臣侯爵 西園寺公望殿

遼東半島拋棄及臺灣海峽自由航通ニ關 スル露佛獨三國ヨリ質問ニ對シ閣議案

明治廿八年七月十六日 内閣書記官

内閣總理大臣

博文署名

内閣書記官長

外務大臣○大藏大臣○海軍大臣○文部大臣○遞信大臣○内務大臣○陸軍大臣○
司法大臣○農商務大臣○黒田議長

遼東半島拋棄及臺灣海峽自由航通ニ關スル問題ニ付キ露佛獨三國ヨリノ質問ニ對シ丁號ノ通
回答ニ及ブベク、且第二項ハ第二案ノ通り臺灣海峽ノ事ニ付テモ第二案ノ通り閣議決定相成ル
ベキ哉

親展送第七七號

遼東半島返還之件ニ關シ五月三十日露獨佛三國政府ヨリ別紙甲號ノ通り申出ノ義ニ付テハ、
六月四日陸奧外務大臣ヨリ請義ノ主旨ニ基キ閣議決定相成候ニ付、同月五日別紙乙號ノ通り
同大臣ヨリノ口頭ヲ以テ三國公使ヘ通知相成候處、三國公使ハ更ニ本月四日ニ至リ別紙丙號ノ
通申出候。就テハ六月四日ノ閣議ニ於テ既ニ御決定相成候次第モ有之候ヘ共、今日ノ形勢多少
取捨増減ヲ要スル點モ有之候ニ付、更ニ別紙丁號ノ通り右三國政府ニ對シ宣言致度、且ツ本件
ハ早速宣言スルヲ必要ト認メ候ニ付至急決定相成度、右乞閣議

明治二十八年七月十六日

露佛獨三國ヨリ質問ニ對シ閣議案

文部大臣侯爵 西園寺公望

内閣總理大臣伯爵 伊藤博文殿

五月三十日露獨佛三國公使外務大臣ニ面晤シ其各自ノ政府ヨリノ訓令ニ從ヒ左記ノ三ヶ條ヲ提陳セリ

一、遼東半島拋棄ノ報償トシテ日本政府ハ何程ノ償金ヲ清國政府ヘ請求セラル、積ナルヤ
二、目下遼東半島ニ駐留ノ兵ハ幾時頃迄ニ引揚ゲラル、見込ナルヤ。

三、三國政府ハ臺灣清國間海峽ノ航海ヲ自由ナラシムル事ニ付日本政府ヨリ保證ヲ得タシ
五月三十日會談ノ時ニ於テ三國政府ヨリ帝國政府ヘ申出ダサレタル三點ノ問題ニ對シ確答ヲ爲ス前ニ當テ帝國政府ハ先ヅ左ノ數點ニ就キ保證ヲ得ンコトヲ望ム

一、帝國政府ハ若シ文書ヲ取換ハス必要アリテ之ヲ取換ハシタルトキハ相互政府ニ於テ之ヲ祕密ニスベシトノ意見ナリ。故ニ帝國政府ハ三國政府ニ於テ右ニ付異存アルヤ否承知シ置キタシ

二、帝國政府ニ於テ若シ三國政府ヨリ提出セラレタル問題ニ對シ満足ナル回答ヲ爲スニ於

テハ、其清國ニ對シ申出ベキ提議ヲ清國ヲシテ承諾セシムルコトニ付三國政府ヨリ有効ノ助力ヲ望ムコトヲ得ベキヤ

三、三國政府ハ以上記スル所ノ點ニ付書面ヲ以テ約束スルコトヲ承諾セラル、ヤ

帝國政府ニ於テ以上記スル所ノ問題ヲ三國政府ヘ申出ル義務アリト思考スル所以ハ、即チ遼東半島ニ關スル問題タルヤ旅順口ノ砲臺、日本ニ對シ種々ノ關係ヲ有シタル清國人ノ處分、該半島ニ於ケル日本人埋葬地等ノ如キ是ト關聯シタル問題ヲモ共ニ疏解スベキモノトスルノ意見ナレバナリ。

賠償金ノ額並ニ撤兵ノ時期ハ必ズ此等隨伴スル所ノ問題ノ措辦如何ニ因テ決定セザルベカラザルモノトス。

清國ノ内政秩序ノ問題ニ干渉ヲナスコトハ三國政府ニ於テ爲シ能ハザル所ニモアリ、又關係國双方ニ取テ利益トモ思ハレズ、且ツ又慣習ト先例トニモ戾ル所ナリトス。

然レドモ三國政府ハ帝國政府ノ満足セラルベキ精神ヲ以テ、清國ニ對シ戰死者ノ墓碑修覆及戰勝軍ノ用務ニ服シ、多少節ヲ屈シタル占領地ノ土人ニ附與セラルベキ保證ニ關シ、文明諸國ニテ是認セラル、相當ノ約束ヲ爲サンコトヲ勸告シ、以テ帝國政府ノ爲メ進デ一臂ノ勞ヲ執ルコトヲ承諾ス

又三國政府ハ帝國政府ノ内情困難ナルヲ認メ之ヲ度外視セザルヲ以テ、關係政府間若クハ其代表者間ニ遂ゲラルベキ談判ハ、其口頭ヲ以テスト書面ヲ以テスルトヲ問ハズ、一切祕密ヲ保ツコトヲ承諾ス。

然レドモ三國政府ハ貴重ノ時間ヲ費サザランコトヲ希望スルヲ以テ、此談判ノ基礎ヲ鞏固ナラシメンガ爲メ、帝國政府ニ於テ正當トセラル、報酬的償金ノ額ヲ定メ之ヲ書東ニテ申越サレンコトヲ希望ス、然ルトキハ三國ノ代表者ハ速ニ之ヲ其本國政府ニ報告スベシ。

又帝國政府ハ右書東若クハ別簡ヲ以テ遼東撤兵ノ時日ハ凡ソ何時頃ナルヤ。又該時日ハ財源アル保擔ト清國ヨリ帝國政府ニ向テ已ニ約シ若ハ將來約スベキ償金ノ支拂トニ對シ如何様ノ關係ヲ有シ居ルヤヲ公言セラル、コトハ、三國政府ニ於テ帝國政府ノ爲メニ利益ナルベシト思考ス。

此處理手續ハ全ク帝國政府ノ機利及威嚴ヲ重ズルト、三國政府ガ今尙有スル所ノ友好ノ精神ヨリ出デタルモノナレバ、三國公使ハ帝國政府ニ於テ其有益懇篤ナルヲ認メラレンコトヲ希望ス。

三國政府ハ日本國政府ニ於テ臺灣海峽ノ自由航海ヲ保證セラレ、且ツ臺灣澎湖兩島ハ決シテ他國ヘ讓與セザルコトヲ約セラレンコトヲ希望ス。

宣言案

帝國政府ニ於テハ遼東半島ニ關スル未決問題ヲ成可丈速カニ辨理スルコト關係諸國ニ取テ利益ナルベシト認メ、且ツ三國政府ニ於テ平生懷ク所ノ友情ヲ顧ミ、之ニ向テ重テ其尊重スベキ帝國政府ノ和衷ノ意ヲ證明セント欲スルヲ以テ、帝國政府ニ於テ不日直接ニ清國ト成シ遂ゲントスル談判ヲ開クニ先チ左ノ宣言ヲ爲ス。

第一、奉天半島ノ永久所有權ヲ拋棄スルノ報酬トシテ日本國ヨリ清國ニ對シ要求セントスル償金額ヲ定ムルニ當リ、帝國政府ニ於テハ今放棄セムトスル土地ノ實價ニ等シキ金額ヲ辨償セシメントセバ、清國目下ノ内情ニ於テ頗ル困難ヲ感ズベシト慮リタルヲ以テ、帝國政府ハ清國ノ財政ヲ酌量シ、大ニ其ノ正當ナル要求ヲ減却シ、追加償金ノ額ヲ庫平銀五千萬兩ト定メタリ。

第二、日本國及清國間ノ平和親睦ハ舊ニ復セラレ、且ツ善隣ノ關係ヲ維持スル爲メニハ、此際兩國間將來不和爭論ノ種子ヲ取除キ置クコト肝要ナルヲ以テ、帝國政府ハ清國ガ下ノ關係約ノ約款ヲ全ク履行シ、且ツ前記庫平銀五千萬兩ノ追加償金ヲ全ク拂込ミタルヲ待テ奉天半島ノ撤兵ヲ爲スベシ。

第三、帝國政府ハ三國政府ノ請求ヲ酌量且ツ一般ノ國際通商ノ利害ヲ慮リ左ノ如ク宣言ス。
帝國政府ハ臺灣海峽ヲ以テ各國公共ノ航路ト認メ隨テ該海峽ノ自由航通ニ關スル共同ノ權利ヲ重ンズベキコトヲ約ス。

帝國政府ハ臺灣及澎湖島ヲ他國ニ讓與セザルコトヲ約ス

撤兵期限ニ關スル第二案

帝國政府ハ奉天半島全部撤兵ノ第一着手トシテ追加償金庫平銀五千萬兩ヲ拂ヒ、且ツ下ノ關條約ニ規定シタル軍費賠償金第一回ノ拂込ヲ了リタル時ハ其ノ占領軍隊ヲ金州半島境界内ニ撤回スベシ。又右軍費賠償金ノ第二回拂込ヲ了リ且ツ下ノ關條約ヲ以テ速カニ締結スルコトヲ規定セラレタル通商航海條約ノ批准交換ヲ了リタルトキハ全然奉天半島ノ撤兵ヲ爲スベシ。

臺灣海峽航海ノ自由ニ關スル第二案

帝國政府ハ臺灣海峽ヲ以テ全ク各國公共ノ航路ト認メ、隨テ該海峽ハ獨リ日本國ノ專有又ハ管轄ニ屬スルモノニアラズト宣言ス。

伊藤內閣總理大臣 三國干涉ニ付演說筆記

本日ハ此度ノ媾和談判ニ引續キマシテ、三國干涉ノ起リマシタコトヲ一ト通り御話シ申シマス。此各國トノ交渉ノ事件ヲ一々明瞭ニ御話シ申上ゲマス内ニ於テハ、無論未ダ世ニ公ニスベカラザル事モ數多アリマス。此ノ種々ノ事柄ニ付テハ無論殊更ニ申述ブルニ及バズ、祕密ヲ御保ニナランコトヲ望ミマス。昨年朝鮮事件ニ引續キ日清ノ交戦ト相成ツテ以來、戰鬪ノ繼續シテ居ル間ニ於キマシテ、素ヨリ何レノ國ニ於テモ同様ニ此ノ兩國間ノ戰爭及戰鬪ニ依テ生ズル所ノ利害ニ付テハ、各國ノ共ニ注目スル所デ、且又其間ニ於テ種々ナ議論モ出來致シタ。併シナガラコウト云フテ談判ノ開ケルニ至リマスマデハ、一ツモ之ニ對シテ十分ニ干涉スルト云フ理由ヲ發見スルコトガ出來マセナカッタ。時ニ或ハ各國トノ間ニ照復致シマシタコトモアリマスケレドモガ、格別干涉ト云フ程ノコトハナカッタノデアアル。然ルニ媾和談判ヲ開キ、即チ最初ニ支那ヨリ使節ヲ送り廣島ニ於テ談判ヲ開キマシタル際ヨリ、大ニ從前ト違テ各國ノ注目ス

ル所ト相成タ。右ノ使節到來ノ時ニ際シテハ、事柄ノ速ニ平和ノ回復ヲ得ルコトノ勸告ハ多クゴザイマシタ。併シ唯其勸告ノ趣意ニ於テハ日清事件ハ日清兩國ノ間ニ平和ヲシテ吳レイト云フ趣意デゴザイマシタ。而シテ重ニ其勸告ヲ致シマシタモノハ英米露獨逸佛蘭西伊太利等ノ國デアリマス。併シ最初ノ使節ハ充分ナル全權ヲ有セザルノ廉ヲ以テ談判ヲ謝絶致シマシタ故ニ我政府ノ媾和ノ條件トシテ提出スル所ノモノヲ未ダ世ニ公ケニスルニ至ラズシテ拒絶致シタノデアアル。最初ヨリ政府ノ見ル所ニ於テハ到底媾和談判ノ條件ガ世ノ中ニ公ケニサラル、上ハ、其利害ノ關係スル所ニ就テハ必ズ各國カラ色々干渉セラル、デアラウト云フコトハ豫想シテ居ツタノデアアル。併シナガラ此談判ニ取り掛テ愈々平和ノ局ヲ結ブコトヲ得ルト云フ見計ヒノ付ク迄ハ可成帝國政府ノ要求スル所ノ條件ヲ秘密ニ保チ、而シテ事ノ結局ノ付カザル以前ニ他ノ國ヨリ喙ヲ容レサセルコトヲ豫防致シタ。其ノ譯合ハドウ云フ譯合デアルカト云フニ、元ヨリ土地ヲ占領スルトカ或ハ條約ノ結果ニ依テ得分ヲ得ルヨリナ事ヲ致スト云ヘバ、彼等各自ニ影響スル譯デアリマスカラ必ズ異存ヲ喚起スルハ疑ヒナイコト、存ジテ居ツタ。而シテ未ダ平和ノ條約ヲ結ブニ至ラズシテ各國ヨリ異存ガ出テ參リマヌルト云フト、我政府ハ支那ト談判ヲ開始スルニ當テ既ニ異存ノ説ヲ作ツテ行クノデアアル。コレ支那政府ニ申出ス前ニハ異存ノ説ヲ作ルコトヲ避クル爲メニ勉メテ秘密ヲ保ツタノデアアル。夫故此干渉ノ議論ハ我平和ノ條件ガ世ノ

中ニ公ケニスルト同時ニ顧ハレテ來タ所以デアアル。歐羅巴ノ諸國ト雖ドモガ元ヨリ日本政府ノ支那ニ對シテ要求スル所ノ條件ハ如何ナルモノデアロウカト云フコトニ至テハ注意ハシテ居リマスト雖ドモ、確實ナル證據ヲ見マセンケレバ此事件ニ付テ係ハル所ヲ明カニシ且又此レニ對スル口實ヲ得ルコトガ出來マセン。故ニ多分日本ハ斯様ナコトヲ望ムデアロウト云フコトハ豫期シテ居ツタト推察致シテ居リマスガ、確實ノ證據ノ出ル迄彼等ヨリハ何等申サンデ居ツタノデアリマス。然ルニ最後ニ於テ支那政府ヨリ全權ヲ與ヘタル使節ヲ派シ、即チ彼ノ李鴻章ト馬關ニ於テ會見ヲスルコトト相成タノデアアル。其當時露國政府ノ如キ可成速ニ此使節ト日本國ハ平和ノ結局ヲ御付ケナサルガヨロシイ、日本ノ要求スル所ノ條件ハ重キニ失シテ、夫レガ爲メニ此平和ガ結局ニ至ラズト云フコトニ至ルヨウナコトデアルト甚ダ容易ナラヌト考ヘルト云フヨウナコトモアリマシタ。ソコデ此平和ノ局ハ多分結ベルモノデアアル。結ベタナラバ日本ノ條件ハ初メテ明カニナツテ來ルト待チ構ヘテ居ツタ所ニ、豈計ランヤ不幸ニシテ御承知ノ通り狂人ガ支那ノ使節ニ兇行ヲ加ヘルト云フコトニ至ツタ。此時ニ當テ各國ノ形勢ト云フモノハ其以前ニ於テ日本ニ餘程友情ヲ表シテ居ツタモノモ一時ハ非常ナ反對ノ感觸ヲ表ハシマシテ、各國ノ新聞ハ(聞キ取レズ)

夫レガ爲メニ日本ニ對シテ友情ヲ懷クモノハ日本ノ爲メニ甚ダ悔ンダ。殊ニ露國ノ如キニ至

ツテハ丁度明治廿四年皇太子來遊ノ砌、大津ニ於テ巡查ガ兇行ヲ加ヘタコトヲ漸ク忘レントシテ居ツタコトヲ回顧シテ思ヒ出サセルヨウニナツタ。日本ト云フ國ハ實ニ危險極マル國デア。表面ニ文明ヲ裝ヒテ野蠻ヲ内ニ包ンデ置クト云フコトヲ露西亞全體ノ新聞ハ口ヲ揃ヘテ論ジタノデアリマス。然ルニ此事ノ起リマス前ニ既ニ談判ノ端緒ヲ開キテ、我ヨリ清國ノ求メニ對シ休戰ノ條件ヲ提出致シテ居リマシタガ、此條件ハ到底彼レノ承諾シテ履行シ能ハザル所ノモノデアルト斷ハツテ居ツタ。其時ニ當テ右ノ不幸ニ際會致シタ爲メニ、此休戰ハ無條件ヲ以テ或ル時間ノ間ヲ許サル、ト云フガ如キ御處置ニ相成リマシタニ依テ、此事ガ世界萬國ニ表ハル、ト同時ニ、日本ノ處置ヲ至極稱賛シテ居ル。此事件ニ付テ（聞取レズ）

願ハフト存ジテ居リマシタラ、彼時早シ此時遲シ（聞取レズ）而シテ李氏ノ負傷ハ快復スルト共ニ彼レハ休戰ノ時期ハ僅カニ三週日ノ間ニアル、故ニ其間ニ事ヲ結了センコトヲ望ミタルニ付、丁度 月 日媾和條件ヲ彼レニ示シマシタ。此條件ニ付キマシテハ最初ニ内閣ニ於テ評決致シ、而シテ大本營ニ於テ文武（不明）シテ評決相成 御裁下ヲ蒙ツタノデアリマス。故ニ其事ニ付テハ文武官ノ間ニ於テ一ノ異見ヲモ起ラズ、又決シテ異見ノ生ズル様ナコトガアリマシテハナラント云フコトガ此レハ最初ニ使節ノ參ツタ時ノ（不明）

故ニ最後ニ李鴻章ガ使節ヲ奉ジテ參リマシテ談判ヲ開キマシタトキハ即チ此條件ヲ示シマシ

タ。示シマスルト彼レハ一見シテ實ニ我レノ要求ノ過重ナルニ一驚シタノデアリマス。此レ亦當然ノコトデアリマシテ、彼レニ在テハ此負擔ハ甚ダ困難ナル次第デアラウト、思フノデア。ル。

丁度 日ニ示シマシテ私ハ四日、日限ヲ切テ確答ヲ促シマスルト。三日目ニ彼レヨリ回答ヲ致シマシタ其回答ノ趣ハ支那ノ財政困難ナル此負擔ニ堪ヘザルノ事情ヲ陳述シタルノ書面ニ致シテ回答ト見做スベキ要領ヲ得マセヌ。故ニ重テ其書面ヲ以テ我が提供シタル所ノ條件ノ諾否ヲ知り難キニ依テ、支那ガ承知シ得ベキト得ザルトノ回答ヲ得タイト云フコトヲ促シ、而シテ再ビ彼レヨリ回答ヲ受ケマシタ、其回答ニ於キマシテハ元ヨリ我が要求スル所ノ半バニモ及バヌコトデア。ル到底承諾ノ出來ル回答デア。リマセンガ、併シナガラ其時ノハ彼レノ回答ト見ルニ足ルベキモノデア。アツタノデア。ル。勿論此間ニ於テ支那ノ使節ハ本國政府ニ電報ヲ往復シテ一ニ欽命ヲ聞イタモノト推察致シマス。此ノ如キ談判ニ付キマシテハ元ヨリ双方押シ合ヒノコトニナルハ論ヲ俟タヌコトデ、要求ヲスル方ハ其目的ヲ貫カントシ、要求サル、方ハ必ず輕減シテモラハント云フコトヲ望ムハ當然ノコトデア。ル。最初ニ於テ提出シタル所ノ目的ハ第一朝鮮ノ獨立ヲ確認スルコト、此レハ此度締結ノ條約ニ於テモ變更ハ來タサヌ。其次ハ金州半島臺灣澎湖島ノ讓與デア。リマス。此レニ對シテハ彼レハ朝鮮接續ノ地ニ於テ鳳凰府寬甸縣安東縣三ヶ所ヲ讓與シテ居リマス。ソウシテ私ハ償金三億萬兩ヲ彼レニ要求シタ。然ルニ彼レハ一億萬兩

ニシテ吳レイト云フ。此レニ付テハ既ニ支那ノ財政ノ困難ナルコトヲ説キ此レ丈ケノ金ヲ持タ
ヌト云ヒ、而シテ外國ニ借財ヲ起スコトハ抵當トスベキ財源ガナイト云フコトヲ以テシタ。且
ツ臺灣ハ未ダ日本ノ兵蹟ノ及バザル地ダカラ此レハイケン、日本ノ兵力ヲ以テ取ラレタ所ハ仕
方ガナイケレドモ兵蹟ノ及バザル所ヲ上ゲテハ困ルト云フ事情ヲ申述ベタ。私ハ到底當初請求
シタル所ノモノハ彼レ等ノ承諾シ得ザル所ノ理由ヲ發見致シマシタニ依リマシテ、最初私ノ請
求シタノハ丁度奉天府ト(不明)ソコヲ東ニ參テ遼河ヲ界ニ致シマス積リデアリマシタケレド
モ、夫レヲ現在我ガ日本軍ノ占領シテ居ル所ニ減ジテ吳レタ。ソウスルト大概最初ノ要求ヨリ
ハ三分ノ一以上、半バニハ少シ足ラヌ位ノモノヲ減ジタノデアアル。ソウシテ三償萬兩ト云フ償
金ヲ二償萬兩ニ致シ、夫レカラ貿易ノ爲メ新タニ開クベキ港ノ場所ヲ初メハ慥カ六ケ所デアツ
タト思フ、夫レヲ二ケ所ヲ減ジテ四ケ所ト致シマシタ。夫レカラ支那ノ貿易場ニ於テ拂フベキ
税金ハ歐羅巴人ハ唯今譬ヘバ上海ノ港カラ貨物ヲ内地ニ輸送スルニ當テハ、或ル規定ノ場所迄
持テ行キマスルト二厘五毛拂テ、夫レカラ他ノ場所ニ輸送スルニハ又税金ヲ取ラル、譯デアリ
マス。申サバ神戸ノ港カラ陸揚ゲシテ之ヲ播州姫路迄持ツテ行クナラ其所迄ガ二厘五毛、夫レ
カラ又横濱ヘ持テ行クト云フニハ別ニ税金ヲ取ラル譯デアリマス。併シナガラ日本ノ貿易ニ
於テハ最初ヨリ五厘ヲ拂ハナケレバナラナイ。ソウシテ矢張到ル所ニ於テ又税金ヲ掛ケラレル

様ニナツテ居ル。之ヲ私ノ最初要求シタル所ノモノハ二厘五毛拂テ居ルノヲ二厘ニシテ、支那
全國一般何所ヘデモ行ケルヨウニト云フ要求デアリマシタ。勿論此レハ日本ノ國ガ貿易上ノ利
害ヲ得レバ日本國計リデハナク支那ト貿易スルノデアリマス。其要求ヲ致シマシタ處ガ何分ソ
ウスルト歳入ヲ減ジテ償金ヲ拂フコトモ困難ヲ來タス様ニナルト云フコトデスカラ、此レハ日
本人モ歐羅巴人同様ニスルト云フコトニ止メマシタ。右等ノ事ヲ以テ再ビ要求ヲシテ既ニ談判
ノ末ニ四月十五日ニ至テ要求ノ通りニ承諾致シタノデアアル。此レハ談判筆記ヲ御覽ニ供シマシ
タラバ其始末ハ分リマシヨウト思ヒマス。大要此ノ如キモノデアリマス。而シテ十七日ニ談判
ヲ結了シ、私ハ十八日ニ廣島ヘ歸テ復命致シマシタ

然ル處其以前ヨリ我ガ條約ノ條件ハチラホラ各國ヘモ分テ、或ハ能ク分テ居ツタ國モアルカ
知ランガ、丁度廿日ノ日ニ至テ初メテ獨逸ノ東京駐在公使ガ外務省ヘ參リ、外務大臣ニ面會ヲ
申入レタ。當時外務大臣ハ廣島ニ居リマシタガ病氣デ居リマシタ故ニ外務次官ヨリ外務大臣ハ
廣島ニ病氣デ居ルカラ何カ必要ナ話シガアルナラバ取次ゴト申シタラ、其日ハ翌日來ルト申
シテ歸ラレタ。翌日來ルカト思テ居タラ來ナカツタ。廿二日ニ參テ本國ノ訓令ニ接シテ日本ノ
政府ヲ代表シテ確答ノ出來ル國務大臣ニ面會シタイ、即チ總理大臣カ外務大臣ニ面會シタイ、
元ヨリ之ニ付テハ他ノ公使モ同意シテ居ルコトデアルト云ヒマシタ。ソウシテ其日ハ歸テ廿三

日ニ至リ初メテ三國公使ガ參リマシタ。參リマシタガ一緒ニハ參リマセン。各々別々ニ參リマシテ露西亞公使ノ差出シマシタル所ノ覺書ハ此通りデアリマス。(此レハ東京ニ居リマシタル林外務次官ヨリ外務大臣ニ送リマシタルモノデアリマス)(覺書略)佛蘭西ノ公使ガ差出シマシタルモ同様デ其譯文ハ(覺書略)夫レカラ獨乙公使ハ覺書ヲ日本文ニ認メテ之ヲ朗讀致シマシタ(覺書略)斯ウ云フ風ニ三國カラ申シテ參リマシタ。夫レカラ四月十一日ニ露京發ノ西公使カラノ電報ニ(電報略)之レガ西公使ノ電報デアリマス。其次ニ四月十二日露京發ノ電報ニ(電報略)夫レカラ十三日ニ青木カラ(電報略)其次ニ四月十七日ニ又青木カラ(電報略)夫レカラ四月廿日ニ矢張獨乙カラ『貴大臣ノ電信ヲ受取リタル後チニ云々』(此レハ調印濟ミマシタト云フコトヲ報シタ電信デアリマス)

併シナガラ此レハ皆嘘ダ。此事ハ後トデ御話シ致シマス。夫レカラ四月廿二日ニ又在露西公使ヨリ申來ツタ(電報略)斯ウ云テ來タガ此レモ嘘ダ。尤モ中々向フモ表ハサンデスカラ容易ニハ知レンノデアアル。夫レカラ四月廿四日ニ在英加藤公使ノ來電ニ(電報略)夫レカラ四月廿四日ニ佛蘭西駐在ノ公使カラモ(電報略)申シテ參リマシタ。四月廿五日西公使ヨリノ電報ニ(電報略)先ヅ斯ウ云フ事情デアリマシタ故ニ、私モチト歐羅巴諸國ノ意嚮ヲ知ルト云フコト

ガ必要ダカラ英吉利伊太利ヲ少シ動カシテ見タ。夫レデ此方カラ英吉利駐在公使ヘ訓令ヲ下シマシタ(三國政府提出ノ四ヶ條ニ對スル日本政府ノ辯明)斯ウ云フコトヲ申シタ。ソウスルト英吉利ノ方カラ斯ウ云フ返答ガ來タ(四月廿六日付貴電ニ從ヒ云々)夫レデ又廿七日ニ伊太利ノ高平カラ(獨乙ノ勸誘ハ英國之ヲ拒絕セリ云々)

茲ニ至テ初メテ分ツタ。獨乙ガ抑モ今度ドウ云フ譯デ三ヶ國ノ中ヘ飛ビ込ンデ一朝ニシテ議論ヲヒツクリカヘシテ、日本ニ贊成シテ居ツタガ此度青木ノ云フニハ獨乙ハ以前歐羅巴諸國ノ干涉ガアツタ時ニ、即チ英吉利ガ初メ日本ニ戰ヲ止メサセント云フコトヲ企テテ露佛獨ナドヘ涉ツタノデアリマス。其時ハ露西亞ナドハ別ニ夫レニ付テ干涉ヲシヨウトハ云ハンガ拒絕モセナカツタ。トコロガ獨乙ハ不承知ヲ云フタニ違ヒナイ。併シナガラ夫レガ爲メニ全ク協調ナドノ事ガ破レテ仕舞ツタト云フ譯デモナシニグヅ／＼ニナツテ居リマシタ。ソコヲ獨乙ハ恩ニキセテ何ニカ仕ヨウトシタガ、日本ガ貿易ノ利益ヲ得タ所デ最惠國條款ニ依テ其利益ヲ得サセル位ヨリ外仕方ガナイ。マサカ日本ガ獨乙ノ代言ヲシテ土地ヲ取テ差上ゲルト云フ譯ニハイカラダト云フガ全クハ歐羅巴大陸ノ關係ニ基ヅイテ居ル。夫レハドウ云フ譯デ基クカト云フニ、近來露佛ノ同盟ガ鞏固ニナツテ居ル爲メニ、獨乙ハ非常ナ困難ヲ引キ受ケナケレバナラン。ト

コロガ丁度今度露西亞ノ意向ハドコ迄モ極東ノ方面ニ向テ疆土ヲ開クト云フ考ヘガアリ、日本ガ土地ヲ廣ゲルト云フコトハ尤モ好マナイト云フコトヲ知り、露佛ノ同盟ヲ鞏固ナラシメマイト思テ、ソコデ此度ノ干涉ヲ始メタト云フコトガ伊太利ノ外務大臣ノ話シデ初メテ分ツタノデアリマス。夫レカラ四月廿七日ニ又西公使ヨリノ電報ニ（四月廿五日貴電ニ基キ本使ハ力ヲ盡シテ云々）ト云フテ來タ。

此レハ丁度私ハ三國ノ干涉ガ廿三日ニ表ハル、ヤ、廣島ニ於テ御前會議ヲ開テ、ソウシテ既ニ此三國干涉ノ來由ヲ見ルコト實ニ容易ナランコトデアルト私ハ見、卒然トキタノデナクジリノ來タノデアルカラ大分申合ガ出來テ居ナケレバナラナイ。夫レガ爲メニ艦隊ヲ既ニ殖ヤシテ來テ居ル結果ダカラ、私ハ御前會議ニ於テ三條ヲ掲ゲテ評決ヲ望ンダ。三國ガ果シテ兵力ヲ用ヒテ干涉スルニ至ラバ、我ハ之ト戰フ迄ノ決心ヲスルヤ否ヤ、然ルニ當時帝國ハ支那ト戰フノミヲ以テ目的トシテ居ツタモノデスカラ、殆ンド我が全軍ヲ舉ゲテ金州半島ノ地方ニ持テ行ツテ居ル、日本ニハ甚ダ充分ナル備ヘハナイ、加之艦隊ハドウデアるかト云フニ、其時ニハ常備艦隊ハ重ニ澎湖島ニ行テ居ツテ殆ド二千哩ノ距離ガアル。艦隊ハ金州半島ノ近傍ニ居ル、而シテ此干涉ガ手強ク起テ來ル日ニナツタ時ハドウスルかト云フコトハ先ヅ考ヘ付ケナケレバ

ナラナイ。併シ兵力ハ今ノ如キ有様デアル。ソウシテ此陸兵ヲ日本ニ移シテ此レニ應ズルト云フナラバ、ドレ丈ケノ時間ガ掛ルカト云フコトモ考ヘナケレバナラナイ。此兵略ノ手段ハ第二トシテ置イタ所ガ一年ノ間戰ヲシタ上ニ、又此ノ國ニ抵抗シ戰端ヲ開ク丈ノ見込ミガ付クカドウカト云フ御評議ヲ乞フタ。所ガ到底今日ノ所デハ出來ナイ。其譯合ハ彼レノ艦隊ハ十二萬噸、此方ノ艦ハ分捕船迄入レテ八萬噸、然ルニ噸數斗リデハナイ我艦ハ一年ノ間海上ヲアルカセ詰メデ大分怪我ヲシテ居ル。加之彼レノ艦ハ装甲鐵艦ヲ四艘持テ居ル。此レデ出先キデ兵糧ヲ斷タレルカスレバ迎モ戰ハ出來ナイト斯ウ云フコトニ陸海軍大臣モ御出デニナツタ所デ決シタ。然ラバ其結局ハドウスル、今ノ處ハ戰ヲセズニ處置ヲ付ケナケレバナラナイ。ソウスレバ寧ソノコト金州半島ヲ支那ニ返スハ恩惠的ニ此レガ一番立派ダ。戰ヲセズニ結局ヲ付ケ様ト云ヘバ其手段方法ハ、一方ノ極點ガ戰ヲスルカ一方ノ極點ガ取ツタ土地ヲ投ゲルカト云フガ兩極點デアルガ、其中間ヲ取ルヨリ仕方ガナイト云フコトニ御前會議ニ於テ決シタ。其中間ノ手段ニ至ツテハ種々アリマスルガ之ヲ會議ニ附スルハドウ云フモノデアるかト云フニ、歐羅巴ナドヘ今之ヲ提出スルモ歐羅巴ノ大國ガ迎モ承知スルコトデハナイ、其會議ナルモノハ却テ甚ダ危険デアルト云フコトヲ段々私ハ發見致シマシタ。故ニ此事ハ到底面倒ニ立チ至ル（聞取レズ）海軍大臣ノ内御遣シニナツテシナケレバナラナイ。（聞取レズ）

ソコデ私ハ直グニ廿四日ノ晩ニ夜汽車ニ乗テ舞子ニ參リマシタ。外務大臣ハ病ヲ養フテ此所ニ居リ又歐羅巴諸國ヘ電信ヲ往復スルニハ外務大臣ノ居ル所デナケレバ仕方ガナイ。ソウシテ段々評議ヲ盡シマシテ先ヅ手強ク之ヲ拒絶シヨウカト云フ話シモアリマシタガ、手強クシテ止マラン時ニハ中々容易ナコトデハナイ、戰ヲスルヨリ仕方ガアリマセン。ソコデ先ヅ露國政府ヘ再考ヲ求メマシタ、露國ノ御勸告ハ承ツタガ今日日本ニ於テ御勸告ヲ容ル、コトハ至難ダカラ再考ヲ願ヒタイト云フコトニ對スルモノデアル。如何ニモ西ガ辯論ヲ甘クヤツタト見エテ、露國外務大臣ハ叡慮ヲ伺フト公使ガ云ハル、所ハ勸告ヲ翻スニ充分ノ理由ガナイト見ユルカラ再考ハ出來ヌト云フ決答ヲ與ヘタ。夫レカラ廿八日ニ至テ又露西亞カラノ電報デ(電文略)ト申シテ參リマシタ。此上ニ東京外務省ノ三ヶ國公使トノ話シガアルガ、要スルニ東京ニ居ル公使ハ本國ノ事情ニ暗イ、此方ガ金ヲ掛ケテ電信ヲ往復シナケレバ分ラン。故ニ東京ノ方ハ私ハ直打ヲ置カンノデアル。ソウスルト英國ハ先刻モ申ス通り總理大臣ト相談シテ答ヘルト云ツタガ其返答ハ(廿九日ニ英國外務大臣ハ左ノ通り確答セリ云々)ト云ツテ來タ。

迎モ夫レデハ三國ガ承知シナイト云フコトヲ英國外務大臣ガ申シテ居リマス。此レヨリ前ニ伊太利カラ英吉利ガ共同スルナラバ私モ艦隊ヲ出シマシヨウト云ツタ。併シナガラ英吉利ハ伊

太利一國ノカラ以テ三國ヲ動スニ足ラント信ジテ居ル。又伊太利ハ亞米利加ヘモ德意シタ。日本ノ意向ヲ助ケヨウデハナイカト云フコトヲ華盛頓駐劄ノ全權大使ニ訓令シタケレドモ、私ノ方デハ友情ハ頗ル懷テ居ルガ迎モ兵力ヲ以テ助ルコトハ出來ント云フコトヲ答ヘテ居ル。夫レカラ前ニハ西ガ云ツテ居ツタガ、段々探テ見ルト朝鮮ノ國境ニ接續スル所ヲ投ゲタナラバ、金州半島ノ占領ハ或ハ露國ハ承知スルカモ知レナイト云テ居ツタガ、茲ニ至ツテ西モ到底行カザルコトヲ發見シタト見エテ、此レハ廿九日ニ向フヲ發シタ電信デアリマス(電文略ス)

此レデ露國ノ意向ガ分ツタ。ソウスルト不思議ニモ亦英吉利ニ駐在シテ居ル獨乙ノ全權大使ガ書記官ヲ遣シテ加藤公使ヨリ電報シテ參リマシタ。(英國駐在ノ獨乙大使ハ其書記官ヲ遣ハシ本使ニ面會ヲ求メタルニ云々)

此レデ獨乙大使自カラ東洋ノ政略ト云フヨリハ多ク已レノ國ノ歐羅巴ノ政略カラ此仲間ニ這イツタト云フコトヲ證明シタ。ソコデ此方カラ今度ハ又再考ヲ求メテモ承知シナイカラ斯ウ云フ訓令ヲ與ヘマシタ。(覺書電文)

此レハ下ノ關係約デ取ツタノハ金州復州鳳凰城等ノ七ヶ所ノ内、金州丈ヲ殘シテ後トヲカヘソウト云フノデアリマス。ソウスルト又五月一日ニナツテ伯林發ノ返事ニ(電文略)

又西カラ來タ返答ガ（本使ハ本月一日我覺書ヲ露國政府ヘ差出シ力ヲ極メテ云々）

ソコデ又青木カラ斯ウ云フ電信ガ來タ（今ノハ三國同様ニ來テ居ルノデス、而シテ表向キ云フ所ハ少シモ變ラナイ）五月四日午後四時伯林發デス、夫レカラ又五日ノ日ニ英吉利ニ居ル獨逸ノ大使ハ加藤ニ逢テ告ゲテ申シマスルニハ（本使ハ獨逸大使ノ請求ニヨリ獨逸大使ニ面會シタリ云々）

マーヌウ云フ様ナモノデス。ソコデ政府ノ考ヘル所デハ條約批准ノ期限ハ五月八日デアアルノニ、此事ニグヅ／＼シテ居ツテ五月八日ニ批准交換ヲシナカッタラ條約ハ水ノ中ニオツコチテシマウ。如何トナレバ條約ノ一部ガ破ルレバ全部ガ破ル、カラデアアル。ソコデ獨リ金州半島占領ノ事ヲ爭テ居テ、折角結ンダ條約ヲ更ニ二億萬兩ヲ出スカ出サンカト云フコトヲヤリ替ヘナケレバナラス。其上ニ或ハ之ヲヤツタラバ償金等モ取レルカ取レヌカ保證ハ出來ナイ。先ヅ英吉利ノ如キハ露西亞ト互ニ反對ノ利益ニ居ル國デアリナガラ、早ク日本デ決斷ヲシテ仕舞ハニヤアブナイト云フコトヲ勸告スル位ナコトデアアル。夫レカラ浦鹽斯德ハ臨戰地ト布告サレ、黒龍江邊ハ戰鬪準備ヲナシ、浦鹽斯德在留ノ日本人ハ凡ソ日本ノ里數一里半ノ處マデ立退ケ、ソウシテ何時立退ヲ命ズルヤモ知レヌト云フコトヲ公然ニ橋ヨリ電報デ言テ來テ居ル。ソレカラ此方ヘ出テ居ル艦隊杯モ果シテドレ丈ケノ兵ヲ出シテ居ルカハ慥ニ分リマセンガ（不明）町ノ手

代迄モ皆借リ舉ゲテ居ルト云フ有様デアアル。故ニ目今ノ形勢ハ何處マデモ戰ヲスルト云フ以上ハ兎ニ角愚圖々々言ツテ居ルト條約ハ批准交換ノ時機ヲ誤ツテ水ノ中ヘヲツコトシ、ソウシテ竟ニ再ビ戰端ヲ開カンナラント云フ場合ニ差迫ツタナラバ何ウスルトイフコトニ就テハ速ニ決斷ヲセナケレバナランコトニナリマシタニ依テ、コチラデ評議ヲ極メ御裁可ヲ請ヒマシテ金州半島ノ占領ハ之ヲ永久ニセナイト云フコトヲ先方ニ返答シテ仕舞ツタ。ソレデ斯ウ云フ訓令ヲ與ヘマシタ。（日本帝國政府ハ露佛獨三國政府ノ友誼アル忠告ニ依リ云々）

ソレデ此返答ヲヤリマシタノハ本月五日デ、三國カラハ皆満足シマスト云フ返答ガ參ツテ居リマス。右ニ付西公使カラノ返答ハ（五月五日貴電ノ趣ニ從ヒ本使ハ同日露國政府ヘ其覺書ヲ提出セリ云々）

此第二項ノコトトハ第一項ノコトト同ジ事デ、償金ノ抵當トシテ拋棄シタル土地ヲ一時占領スルノ權利ハ無論有ル、然レドモ拋棄シタル土地ノ代リニ償金ヲ餘計ニ出サスルト支那ハ金ヲ拂ハレンカラ、ツマリ永久占領ト同ジコトニナルト云フデアリマス。先ヅ大體ソウ云フ譯デアリマス。ソレデ私ノ考ヘタ所ハ隨分三國政府ニ向テ此ノ奉天半島ノ永久所領權ヲ抛ツニ就テハ、支那カラ金ヲ取り度イカラオ前周旋シテ吳レロト云フコトハ言ヘル、向フモ亦シタガツテ居ルケレドモ、私ハ一切御頼ミシナイト云フ方針ヲ執ツタ。何故ナレバ彼等ニソクナ周旋ヲサ

セルト彼等三國ノ協同ハ何時マデモ繼續スル。揚句ノ果テニ支那ガ是丈ハ金ヲ拂フコトハ出來マセン、何ウシテ吳レ斯ウシテ吳レト云フコトニナルト、今度ハ直接ニ談判スルコトハ出來ズ一々彼等ノ口ヲ假ラナケレバナラス。此處デ何ウシテモ干涉ノ道ヲ掃フト云フコトニシナケレバナラナイ。又若シモ歐羅巴ガ(不明)會議的ノコトヲシナケレバナラナイコトハ、他日ハ或ハ防グベカラザルコトカ知レマセンガ、成ルベク今日ニ於テ避ケナケレバナリマセン。何トナレバ歐羅巴諸國ノ會議ニシテ一ト度開カレマスルト、其ノ會議ニ於テハ獨リ現在ノ事柄ヲ極メル計リデナク、將來ノ事ヲ必ズ極メル。ソウスルト日本ト支那ノ上ニ歐羅巴會議ノ主權ヲ一ツ作クル様ニナル。竟ニハ何事モ歐羅巴會議ノ承諾ヲ經ナケレバ行ハレント云フコトニナルカラ、會議干涉ハ一刻モ早く避ケナケレバナリマセヌ。故ニ此レハ日本ト支那ノコトデアルカラト云ツテ彼等ニ周旋ヲ依頼セズニ、ポント斷ツテ仕舞ツテ成ル丈ケ其ノ方針ヲ執ツテ三國ノ共同力ヲ此ノ日清兩國ノコトニ用キサセン様ニシテ居ル。

先ヅ大體ニ就テハ唯今御咄シ申シタル丈ケデアリマスルガ、ソコデ以テ將來ノ考ヲシテ置カンケリヤアナラント思ヒマス。露西亞ハ最早日本ノ政略ニ反對スル方針ヲ執ル。コレハ何ンデ見タカト云フニ、金州半島ノ占領ハ一方ニハ支那ヲ取ル虞レガアリ、又一方ニハ地面ヲ取ラルルト己ノ衝イテ出ル上ニ不都合デアリ、是レカラ前途ニ於テハ着々關係ヲ持テ來ルノデアル。

ソレデ英國ノ政略トハ些トモ反對シマスマイ。既ニ英吉利ノ全權大使ハ暫ク臺灣ニ根據ヲ占メテ時機ノ來ルヲ待テト云フ位ノコトヲ言ツテ居ル。先ヅ今日臺灣ヲ取ルニ於テハ別ニ何處カラモ故障ヲ言フテ來ソウナ處ハマダ見ヘテハ居リマセン。早クヤツタ旨ク結了スルダロウ。併シナガラ色々ノ事情ノ爲メニドシナ故障ガ出來ルカ保證ハ出來マセンガ、今日ハ先ヅ幸ニソウ云フ形勢ハ見ヘマセン。佛蘭西モ何モ言ツテ來ズ、獨逸デモ何モ言ツテ參リマセン。ソコデ先ヅ今日ノ廟議ニ於テハ臺灣ノ澎湖島ヲ取ツテ、ソウシテ金州半島ノ事ニ付テハ一ツ大本營ト相談ヲシテ見ナケレバナラナイト思フ。彼ノ地ハ隨分金ノ掛カル所デ、暫ク占領スルト云フコトニナレバ日本ノ國庫ハ餘程困難デアル。併シナガラ軍略上ニ於テハ取ツテアレバ無論宜シイノデアリマシヨウガ、アレヲ持ツテ居レバドンナコトニモ二師團ハ置カナケレバナラス。一師團(不明)圓掛カル。ソレカラ先ヅ道路ヲ掃ヘナケレバナラス。而シテ其歲入ハ何程アルト云フニ大藏大臣ノ鳥渡御調ベニナツテ居ル所ヲ見ルト(私ハ未ダ本統ニ調ベテハナイノデアリマス)ドツチニシテモエライモノデハ無イ。故ニ之ヲ五年ナリ八年ナリ占領スルトシテモ非常ナ入費ガ掛リハシナイカト思フ。コレハモウ一通リ取調ベテ見ナケレバ分リマセンガ、若シ入費ガ掛カレバ旅順大連港ノ様ナ處ヲ取ツテ、後トハ支那ヘ返ヘシタ方ガ宜シイカト思ヒマス。

三國政府ニ向テ遼東半島撤去ニ付清國ニ 對シ要求セントスル賠償金額ヲ告グルノ 主旨書一通

遼東半島撤去ノ爲メ日本政府ヨリ清國ニ對シ要求セントスル賠償金額ヲ定ムルニ付テハ、清國經濟上ノ困難ナル情況ヲ考察シ、右半島拋棄ニ恰當スル金額ト看認ムルモノヲ要求スルモ、到底清國政府ノ負擔償還スル能ハザルコト明瞭ナルヲ以テ、削減ヲ加ヘ五千萬兩ノ額ヲ以テ定度トスベシ。但日本政府ハ日清兩國ガ平和ニ復シタル今日ニ於テハ、成ルベク將來爭論ノ種子ヲ除去センコトヲカムルヲ以テ主要トス。若清國政府ニ於テ馬關條約ニ規定スル軍費賠償金及半島拋棄ニ對スル前記金額ヲ償還スルニ於テハ、其時機ヲ以テ期限トシテ半島ヲ撤去スベシ。

遼東半島撤去ノ爲メ日本政府ヨリ清國ニ對シ償金ノ要求ヲ提出スルニ付テハ、清國ノ經濟上ノ困難ナル情況ヲ考察シ、適當ナル金額ト看認ムルモノヨリ減少シテ五千萬兩ノ額ヲ以テ定度トスベシ。但日本政府ハ日清兩國平和ニ復シタル上ハ、將來ニ於テ成ルベク爭論ノ種子ヲ除去センコトヲ欲スルヲ以テ、清政府ニ於テ馬關條約ニ規定セル軍費賠償金及半島撤去ニ對スル償金ノ金額ヲ完納スルニ於テハ、其時機ヲ最長ノ期限トシテ半島ヲ撤去スベシ。

前文ノ主旨ヲ以テ三國ニ回答シ、尙ホ三國ニ於テ半島撤去ニ對スル償金高ノ過重ナルヲ難ズルカ或ハ償金完納ヲ時機トスレバ長期ニ過グルノ議論ヲ提起スル場合ニ於テハ、軍費賠償金ノ大部分ヲ一時ニ繰揚ゲ拂ハシムル手段ヲ取り、之ト交換的ニ撤去ノ期限ヲ短縮スルモ可ナラン。要スルニ我ニ在テハ今日ノ情勢三國同盟ヲ繼續セシメ、絶エズ干涉ノ餘地ヲ存セシムルノ不得策ナルヲ認メ、成ルベク迅速ニ結了スルノ政略ヲ執ルベシ。

西園寺臨時外務大臣書簡一通

拜啓 魯公使ヨリ求面會候ニ付明朝可引受旨返答致置候、過日三國ニ返答之件ニハ不關候趣ニ有之候

閣下ニモ御面會可相願趣ニ有之候處、勿論申迄モ無之儀ニ候得共、職權ト差支無之様御話振リ

御注意願置候。總理大臣へ直訴之端ヲ啓候テハ他日御面働ニ存候。

青木公使へ可申遣返答草稿御内閣願上候、右ニ關シテハ拜眉委細可相述候 右草々頓首

七月二十四日

公望

總理大臣閣下

拜啓 三國政府へ返答新案貴稿ニ依リ英文ニ爲書取即出來候ニ付別紙呈電覽候右文中少々貴稿ト相違點有之候。

- 一 序文ニ類スルモノヲ冒頭ニ冠スルコト
- 二 撤兵ハ馬關條約履行ヲ以テ期限トスルコト
- 三 臺灣自由航行宣言ニ付文字ノ貴稿ト相違ヒ候コト
- 四 末文ヲ加へ彼ノ返答ニ對シ反說シ置クコト

此別金高ヲ五千萬トスルコトハ、デニンソン本野共ニ反對ニテ實際ハ何程少額迄減スルモ掛引上一億トナスコト得策ナラン、一億ト答フルモ五千萬ト答フルモ三國ハ同様彼是ト云ナラン。此

事ニ付テ是非小官ヨリ閣下ノ御再考ヲ仰ギ吳レヨト也。又貴命ニハ臺灣自由航行ノコトハ格別ニ宣言ス可ト有之候得共、矢張り一緒ニ之ヲ爲ス方宜布カラント兩人意見ニ有之候。小官ハ全額ノ事ヲ除ク外ハ兩人ト同意ニ有之、委細拜眉可相伺候。先ハ英文御一閱ヲ乞。草々頓首

七月十三日

公望

總理大臣閣下

三國ノ葛藤ヲ解除スルハ今日ノ急務タルヲ以テ清國ニ對スル談判結了ヲ促ガス訓

令 附在露西公使電報

西園寺臨時外務大臣ヨリ在清林公使宛

媾和條約第二條ニ規定ノ奉天省南部ノ地ヲ清國へ返還スルコトニ關シ露獨佛三國政府ト交渉ノ次第ニ付テハ已ニ前信ヲ以テ申進置候通、帝國政府ヨリノ質問ニ對スル右三國政府ノ回答振タルヤ、帝國ガ清國ニ對スル要求諸件ニ付萬事打明ケ其ノ助力ヲ假ルベシト最初ノ手段ヲ實行スルノ途ナカラシメタルノミナラズ、會々夫ノ露國ニテ周旋ノ清國外債募集ノ件モ露清兩國間ニ約定整ヒタリトノコトモ相聞へ、又前信ニテモ申進ゼシガ如ク、在露西公使ヨリモ別紙ノ通來電有之、其他近東見聞ニ觸ル、所ノ形勢ハ一日モ早ク本件ヲ了結スルニ如カザルコトヲ證シ、又清國ノ財政ニ困難ナルコトハ能ク相知レ居候事實ナレバ、今回露國ノ周旋ニテ借入タル金圓ヲ假リニ或ル目的ニ供セントスル本意ナリトスルモ、時日ヲ經過スル内ニハ或ハ目前ノ急ニ遂ハレテ目的外ノ費途ニ流用消費スルガ如キコト可有之ハ該國ニシテ勢免レ難キ所ナレバ、斯ル

場合アルニ先ダチ可成帝國へ支拂フベキ報償金ニ充テシメ候様ニ仕掛候コト得策ト認メタルヲ以テ、直チニ清國政府ニ向テ開談シテ之ヲ整理完結スルコトニ廟議一決シ、一方ニハ前信ニテ送附セシ如キ回答ヲ三國政府ニ與へ、一方ニハ別紙條約案ヲ以テ清國政府ト談判スルコトヲ閣下ニ御委任相成候間、右談判全權御委任狀及御送附候御領收相成度候。

然ルニ何事ニ限ラズ清國政府ト談判スルニ當リテ常ニ優游緩漫トシテ之ニ應ジ、殆ド對手ヲシテ厭倦ヲ覺ヘシムルニ至ルハ同政府從來ノ慣手段ニ有之候ノミナラズ、今回ノ談判タルヤ一方ニハ媾和談判ノ時ニ於ケルガ如ク、左手ニ干戈ヲ擁シテ右手ニ折衝シ、言聽カサレバ又戰アルノミトイフ形勢ニハ無之、又一方ニハ今回帝國ガ右奉天省南部ノ地ヲ彼ニ返還スルノ舉ニ出デシハ、三國干涉ノ結果ニシテ日本ハ如何ナル場合ニテモ之ヲ返還セザルヲ得ザル地位ニ在リトノコトハ清國政府ノ念頭ニ畫ケル所ノ形象ニ可有之、且ツ三國干涉ノ件ニ付帝國政府ト三國政府ト往復交渉ノ顛末ハ、裏面ニテ清國政府ノ聞悉シ居ル所タルハ殆ンド疑ヲ容レズ。故ニ彼ハ常ニ負隅ノ勢ヲ示シ、之ニ加フルニ例ノ慣手段ヲ弄シテ容易ニ我が要求ニ應ゼザルベク、隨テ談判上數層ノ困難ヲ感ゼラルベキコトハ本大臣ノ十分豫想シ居ル所ニ有之候。就テハ談判御着手ノ後ニ至リ、彼ノ模様ニ依リ何等御申出有之候節ハ、可成貴意ニ應ジ候様可致、又場合ニ依リ電訓ヲ請ハル、カ又ハ之ヲ待タル、ノ暇無之、所謂間髪ヲ容レズトイフガ如キ事機ニ遭遇セラ

ル、コトアルニ於テハ、臨機應變御見込通り御決行相成候テモ不苦候。其實帝國政府ガ重キヲ措ク所ハ報償金開港ノ二點ニ有之候得共、實際談判上ノ模様ニ依リ其金額ヲ減少シ、開港ノ數ヲ減スルガ如キニ至テモ其形勢ニ應ジ之ヲ決行セザルノ時機モ可有之候間、其御含ニテ充分御折衝相成度、尤開港ノ點ニ付テハ是迄曾テ三國政府ニ向テ明言セシコト無之次第ナレバ、帝國政府ガ實際重キヲ措ク所ノ點タルニ拘ハラズ、之ヲ己ニ三國政府ニ向テ明言セシ報償金ノ點ニ於ケルガ如ク一ノ必須條件トシテ、之ガ爲メニハ全問題ノ成否ヲ賭シテ争フガ如キコトアリテハ、三國政府ニ於テ日本ハ三國ニ對シテハ未ダ曾テ開港ノコトニ言及セシコトナキニ拘ハラズ清國ニ向テハ之ヲ缺クベカラザル一事件トナスハ三國政府ニ向テ實ヲ吐カザリシモノナリトノ非難モ起ルベシ。因テ此點ニ付テハ閣下ハ清國政府ニ向ヒ今若シ清國ニテ右開港ヲ開クトキハ、一ニハ因テ以テ歳入ヲ増加スルノ一助トモ可相成、又二ニハ一旦港ヲ開テ外國貿易ヲ許ストキハ商業モ漸次旺盛ニ赴クノミナラズ、外國ニテモ其他ニ對シ利害ノ關係ヲ生ズルニ至ルベク、而シテ一旦斯ル關係ヲ有スルノ地トナルトキハ、他國ニテモ容易ニ之ヲ侵略スルコト能ハザルニ至ルベク、此等將來ノ利害得失ヲ説ヒテ是非我請求ニ應ジ候様諄々御勸告相成度、將又報償金ニ關スル談判ノ模様ニ依テハ撤兵ノ順序ニ變更ヲ加フルコトヲ得計トスル場合モ可相成、其邊モ御含置相成度免モ角一日モ速ニ本件ノ結局ヲ見ルニ至ル様御盡力有之度候。

抑々本件ノ談判ハ追テ清國政府ヨリ公使ヲ派遣シタル上、此地ニテ着手可致初志ニ有之候處、近來夫ノ三國聯合モ種々ノ事情ニ依リ漸々寬髮ニ赴キ去ルノ傾向相見エ、而シテ之ヲシテ其聯合ヲ解カシムルコトハ明ラカニ帝國ニ取リテ利益ナルニ拘ハラズ、若シ我ニ於テ何時迄モ本問題ヲ未結ニ附シ置クトキハ、最初ヨリノ行懸リ勢常ニ三國ヲ合セテ我が相手トセザルヲ得ザルベク、左スルトキハ三國ノ名ニ於テモ同様、其各自内心ノ冷熱如何ニ關ハラズ、我ニ對シテ丈ハ依然互ニ相提携シテ以テ當ルコト、可相成ハ彼等ニ於テモ騎虎ノ勢今更他ニ致様モ可無之次第ニ付、我ニ於テ清國ト直接談判ヲ開キテ本件ヲ速結スルコトヲ得ベク、又第二ニハ彼等ヲシテ疏鬆ニ赴キ居ル所ノ聯合ノ羈絆ヲ脱シテ各自ノ行爲ヲ自由ナラシムルノ機會ヲ與フルコト、モ可相成候。要之帝國ガ三國トノ葛藤ヲ解除スルコト今日ノ急務タルハ論ヲ待タズ。而シテ之ヲ速成セントセバ清國ニ對スル今回ノ談判ヲ速ニ結了スルノ外他策無之ニ付、閣下ニ於テモ前述ノ意ヲ體シ充分御盡力有之度候。

右及訓令候 敬具

西園寺外務大臣代理

在清 林特命全權公使

西公使來電譯文

露國駐劄佛國大使ノ告グル所ニ據レバ、露國ノ擔保ニ係ル清國ノ公債ハ殆ド整ヒ二三日中ニ取極メ了ルベシト、其報酬ノ條件ハ毫モ分カラズ、且ツ其條件アルコトハ露國官吏ニ於テ全ク之ヲ否メリ。露國外務大臣ハ遼東半島ノ件ニ付キ頻リニ貴大臣ノ返答ヲ待詫ビ居リ再ビ其質問ヲ申入ルベキ意ナリト告ゲタリ。

本使ニ於テハ本件ニ付貴大臣ガ可成速ニ清國ト取極ヲ付ケ、三國公使ニ向テハ將來我が政略ニ利アル返答ヲ與ヘラレ、以テ差向キ露國政府ノ意ヲ慰サメラレンコトヲ勸告ス。

露獨佛三國干涉ニ付伊國外務大臣ノ内話

四月二十五日

聯合干涉ノ事ニ付テハ初メ我同盟者タル獨逸皇帝ヨリ奧國皇帝及普國皇帝ニ協議アリシガ、其本來ノ趣意ハ歐洲ノ政治上ニ關スル露佛ノ聯合ヲ分離シ、結局佛ヲ孤立ノ地位ニ陷レントスルノ策ニ出デタルナリ。是ヲ以テ今般ノ干涉ニ關スル聯合ハ始メ獨露ノ間ニ成立シ、然ル後佛ヲモ引入レタルナリ。然レドモ伊政府ニ於テハ如此趣意ヲ以テ日清間ノ和議ニ干涉スルヲ欲セザル而已ナラズ、貴國ノ文明的事業ニ付テハ從來深ク感歎スル所ナルヲ以テ、本大臣ハビュロ一氏（在羅馬大使）ニ向テ明白ニ其旨ヲ確言シ、斷然聯合ノ提議ヲ拒絕セリ。而シテ其時獨大使モ亦深ク伊佛政府ノ加入ヲ求ムルニ及バザリシガ、是レ抑々故アルコトニシテ即チ前述ノ如ク獨ニテハ露佛ノ交情ヲ離間スルヲ以テ必要トスレドモ、其同時ニ露ノ強大ニ赴クコトヲ欲セザルニ由ルナリ。故ニ伊政府ニ於テ若シ英米兩國ト合シ貴國ヲ助ケテ本件ヲ或ル一區域間ニ收局セシムルヲ得バ、一方ニ方テハ獨ハ露ト合シタルガ爲メニ佛ヲ離間スルノ基ヲ得、他ノ一方ニ於テハ英米伊ノ聯合反對ニ由テ露ノ欲望ヲ妨拂スルヲ得ル爲メ、獨ニ於テハ一舉兩得ノ利ヲ占ムルナリ。如此事情ナルヲ以テ獨ハ露佛ト合シ、伊ハ英米ト合シ、東西相分シテ反對ノ地位ニ立ツト雖モ、獨伊ノ三國同盟ニ於ケル關係ハ依然トシテ存立シ、毫モ之ガ爲メニ損傷スルコトナシ。現ニ伯林ニ於テハ今本大臣ガ貴公使ト此事ヲ内話シツツアルコトヲ承知スルヤ疑ナシ。

又英ノ現内閣ハ怯弱ニシテ一定ノ成見ナク、始終動搖シテ或ハ露ト親ムガ如ク、或ハ獨ト結
 ブガ如ク、又或ハ佛ト合スルガ如ク、其方向曾テ定マラザルヲ以テ、獨ハ平生之ヲ悦バズ。故
 ニ今般ノ一舉モ一部ハ斷然露ト聯合スルノ狀ヲ表シテ英ヲ警戒スルノ意ニ出デズト曰フヲ得
 ズ。本大臣ガ曾テサリスベリ一内閣ノ獨立不羈ニシテ、貴國ノ平和條件等ニ關シ一層有力ノ贊
 成者タルベキコトヲ明言セシモ、其所處實ニ此ニ在ルナリ。要之本件ハ頗ル戀爭 (love quarrel)
 ニ類スル所アリ。英佛ハ如キ富強ノ大國ニ於テハ今日甲國ニ親ミ明日乙國ニ結ブモ或ハ妨ナカ
 ルベシト雖トモ、我伊太利ノ如ク左程強大ノ勢力ヲ有セザル國ニ於テハ、戀爭ノ如キ舉動ヲ以
 テ國威ヲ威持スルヲ得ズ。唯我國是ヲ一定シ極力之ヲ守リ直前進行スルノ一方アルノミ。而シ
 テ勢力ナルモノモ亦自ラ其中ニ存スルナリ。是ヲ以テ我國ノ貴國ニ於ケルモ從來其ノ文明的進
 歩的ノ大業ニ對シ深ク同感ヲ表スルヲ以テ、今般同盟者ノ提議ニ關シテモ妄リニ之ニ應ゼズ反
 テ貴國ノ依頼アラバ英米ト相合シテ貴國ノ爲メニ運動セント欲スルナリ、然レドモ我國ハ他國
 ノ如ク強大ノ勢力ヲ有セザルヲ以テ自ラ率先シテ米ヲ誘導スルヲ得ズ。其事ノ順序ヨリ論ズル
 モ本件ハ先ヅ貴國ノ請求ニ基カザルヲ得ズ。故ニ貴國ヨリ此三國ニ對シ聯合助力ノ請求ヲ提議
 セラルレバ我國ハ其時ニ至リ始メテ他ノ二國ニ協議シテ其聯合ヲ謀ルヲ得ベシ。而シテ必要ノ
 場合ニ於テハ海軍ヲ東洋ニ出遣シ、貴國ノ聲援ヲ爲スモ敢テ辭セザルナリ。唯英政府ハ前述ノ

如ク怯弱ニシテ難題ヲ以テ容易ニ其方向ヲ一決セシムル能ハザルベシ。然ル時ハ獨ノ眞意ヲ内
 告シテ一面ニハ之ヲ安慰シ、一面ニハ之ヲ奮勵セシムルコト必要ナルベキヲ以テ、伊政府ハ其
 役目ニ當ルヲ辭セザレドモ、本件ノ結案ニ付テハ貴國ノ意向ヲ聞知スルコト亦肝腎ナリ。露ハ
 「ラザレフ」港ヲ占領セントスルノ底意アル趣ナレドモ貴國ニ於テハ同意セラるベキヤ。
 是ニ於テ拙官ハ露ハ從來朝鮮ノ獨立ヲ主張シ乍ラ「ラザレフ」港ニ垂涎スルノ非理ヲ痛論
 シ、外務大臣ハ彼ハ野蠻ナリトテ微笑セリ。

本大臣ガ此ノ如ク胸襟ヲ洞開シテ貴公使ニ吐露スルニ付、更ニ貴公使ヲシテ我真意ヲ知ラシ
 メザルベカラズ。本大臣ハ如此機密ヲ以テ故ナク (if not called for) 陳言スルモノニ非ズ。貴
 公使ノ懇言ニ應ジ默止スル能ハズシテ發言セルモノナルコトヲ了知セラルベシ、然レドモ我從
 來政治上ニ於テ執ル所ノ主義ヲ明言セザレバ尙ホ分明ナラザルモノアラン。故ニ本大臣ハ常ニ
 歐洲ノ政治上ニ關シ漁夫の政略 (バクシン。ポリシートカ云ヘリ。能ク其洋語ヲ記憶セズ、交
 戰國間ノ問題ニ關シ第三者ヨリ容喙シテ土地ヲ掠奪スルノ類ナリ) へ反對者タルコトヲモ明言
 セザルベカラズ。則チ交戰國間ノ問題ハ第三者ノ容喙ヲ許スベカラザルハ當然ナリト雖モ、歐洲
 諸國ニ於テハ此政略常ニ行ハレ、現ニ今般露國等ノ舉動モ亦之ニ外ナラズ是レ實ニ謂レナキノ
 所爲ナリ。殊ニ日清兩國間ノ事ハ、一ハ文明ノ大義ヲ代表シ、一ハ野蠻ノ陋習ヲ固守スルモノ

ナレバ、何レノ國ト雖モ道理上ニ於テ貴國ニ贊助スベキ筈ナルニ、反テ其妨害ヲナサントスルハ遂ニ了解スベカラザルコトナリ。況ヤ貴國戰勝ノ結果タルヤ清國ヲシテ緊要ノ商業的讓與ヲ爲サシメ、宇内各國共ニ其利澤ニ沾フヲ得ルニ於テヲヤ。故ニ本大臣ハ斷然貴國ヲ贊助スルノ方向ヲ確執シ毫モ躊躇スル所ナキナリ。

清國公債募集ニ付遼東還附并報酬ノ 義駐清英國公使談話

機密第四號信

一昨日英國公使來館申述候ニハ、露政府ハ其保證ヲ以テ清國ノ爲メニ歐洲ノ金融市場ニ於テ公債ヲ起スベキ旨申入候處、堂々タル獨立ノ帝國ガ他國ノ保證ヲ以テ公債ヲ起スコトハ大ニ體面ヲ損シ、且ツ世上未ダ曾テ類例アラザル旨ヲ以テ斷リ候（後ニ承レバ是ハ或ル西洋人ノ助言

ニ出タル論ノ由）然シ日本政府ガ遼東ノ事件ヲ永ク未定ニ附シ置ク時ハ、他國ノ容喙ヲ誘致スルノ機會益々多キガ故ニ、貴公使ガ此度ノ就任コソ幸ナレ、今日ニ於テハ日本政府ノ求ムル處ハ清廷ハ何事ヲモ承諾スベク、時日ヲ經過スレバ、彼復々漸ク抗抵心ヲ益スベキニ付、貴公使ハ速カニ北京ニ於テ遼東ノ事ヲ取纏メ、露獨佛ノ干涉ヲ容サザル事緊要ナルベシト云ヒ候ニ付、本使ハ彼ニ答ヘ遼東ノ事ト言ハルルハ漠然ナレド、如何ノ事ヲ如何ニ取纏メル事ヲ意味セラルルヤト問ヒシ處、英公使曰ク、歐洲ニ名ヲ知ラレタル理財家（ロスチャイルド乎）ノ言ニ、清國ガ露國ノ保證ニテ公債ヲ起ス時ハ今回ハ縱シ所望ノ金額ヲ得ベキモ次回ノ募集ニハ應ズルモノナルカルベシト云ヘリ。故ニ貴公使ハ清廷ニ向テ此言ヲ引證シ、清廷果シテ露國ノ保證ニテ公債ヲ起サルレバ日本政府ハ後日ノ事ヲ懸念スル故ニ相當ノ擔保ヲ要スベシト云ハン。清廷ハ之ヲ憚リテ露國ノ申入レニ應ゼザルベシト申候ニ付、本使ハ之ニ答ヘテ前ニ貴公使ノ言ハルル處ニテハ、清廷更ニ日本政府ヨリ之ニ故障ヲ唱フル必要ハ有之間敷ト申候處、彼曰ク否清廷ハ「露國ノ保證ニテ」云々ノ文字ヲ契約ニ掲載スル事ヲ拒ミタルモ、其代リニ「清國若シ此公債ヲ償還スル事能ハザル時ハ露國ハ之ニ代テ償還スベシ」云々ノ句ヲ挿入スル事ニシタリ。又日本政府ハ遼東還附ノ代リニ報酬ヲ要求セラル、積ナレバ廣東省ノ「ウーチャウ」府ヲ開キ、西江ノ航路ヲ開カルル方最モ日本初メ各國ノ貿易上ニ利益多カルベシ。全體此事ハ日本ガ初メ提

出ノ要求ニハ記載シアリシモ、其後何故ニ削除セラレシカ了解セズ云々ト申候間、本使ハ遼東ノ事ヲ處理スル事ニ付テハ清廷ニテ言フコトアレバ之ヲ聞キ本國ニ通知スベシト云フノ外ニ何事モ訓令ヲ受ケ居ラズ。本使ノ考フル處ニテハ日本政府ハ清國ガ其公使ヲ東京ニ派遣次第、彼地ニ於テ商議スルコトヲ欲スルト思フガ故ニ、清廷ハ成丈ケ早ク東京駐劄ノ公使ヲ撰任スルコト双方ノ爲便宜ナラント存候、貴公使モ好機アレバ速カニ公使ヲ派遣スル様清廷ニ勸告セラレシ事ハ專ラ佛政府ノ計策ニ出デタル如ク英公使ハ考居候様ニ相見ヘ候。右報告候。敬具

明治廿八年六月廿八日

清國北京ニ於テ

特命全權公使 林 董

外務大臣臨時代理侯爵 西園寺公望殿

日清媾和條件ニ付獨逸ノ感情并獨佛
資本案清國公債調達一件

親展送第六九號

日清媾和條件ニ關スル三國干涉ノ顛末並ニ清國々債募集ニ付キ佛獨露資本案運動ノ景況ニ關シ五月二十七日附ヲ以テ在獨國青木公使ヨリ別紙ノ通り報告有之候間御參考ノ爲メ右寫ニ通一併差進候也

明治二十八年七月八日

外務大臣臨時代理

文部大臣侯爵 西園寺公望印

內閣總理大臣伯爵 伊藤博文殿

機密第五號

日清媾和條件ニ對シ獨露佛三國干涉一件

我國夙ニ深ク東洋ノ事局ニ意ヲ注ギ機變ニ乘ジテ東亞ノ霸權ヲ握リ、由是一方ニハ東亞細亞ノ運命ヲ左右シ、他ノ一方ニハ宇内大國ノ班列ニ加リテ世界ノ事務ニ對シ協贊權ヲ得ンコトヲ期シタリ。我素志既ニ此ニ存スル以上ハ、須ク先ヅ歐洲諸大國中我ト最モ利害ノ關係ヲ同フスルモノト特ニ友交ノ情義ヲ厚フシ、以テ一朝事アルノ日ニ備ヘザルベカラズ。若シ夫レ歐洲列國ニ對スル外交政略ノ方針確乎不拔ノ性質ヲ缺キ、某國等ト特ニ親密ナル友誼ヲ培養スルコトナカラシム。我レ既ニ孤立ノ地位ニ立テリ。故ニ偶々東亞ニ事アリ我陸海軍ノ戰捷如何ニ隆盛ヲ極ムト雖ドモ、交戰ノ秋獲ヲ收ムルノ時ニ臨ミ、其終ヲ完スルコト難キハ理ノ暗易キ所ナラズヤ。之ヲ以テ一昨冬本官英國ニ出張シ始テ我條約改正案ヲ英政府ニ提出シ、其官吏ト云々

意見ヲ交換スルニ方リ頗ル所感アリタルニ由リ、特ニ閣下ニ電報ヲ呈シテ建議スル所アリタリ。爾來東洋ノ事局頓ニ一變シ我レ遂ニ清國ニ對シテ戰ヲ宜スルニ至レリ。

今ヤ竊カニ開戰以前ヨリ媾和條約調印ノ日ニ至ルマデ、我政府ガ歐洲諸大國ニ對シ保持シタル交際上ノ關係ヲ考查スルニ、其様頗ル冷淡ニシテ歐洲列國政府ヲシテ我ニ左袒セシムルノ準備ヲ缺キタルニ似タリ。是レ我國交戰ノ利ヲ完フスルコトヲ得ザリシ一因タラズンバアラズ。然レドモ獨國ガ露佛兩國ニ與シテ三國一致ノ抗議ヲ我政府ニ提出スルニ至リタル眞個ノ原因ハ、歐洲列國間ニ綢繆スル政略上ノ權謀ニ起因スルコト蓋シ又疑フベキニ非ズ。

今歐洲列國ノ大勢ヲ考察スルニ、歐洲一般特ニ獨國ノ焦慮スル所ハ露佛ノ關係ニ在リ。抑モ佛國ヲ視テ以テ二十五年來ノ仇敵トナシ其讐ヲ報ゼントスルノ一念ハ到底之ヲ放棄シ能ハザル所ナリ。之ヲ以テ獨ハ先年澳伊ト相結ンデ三國同盟ヲ組織シ、佛國ニ對シ備フル所アリ。茲ニ於テ乎、佛ハ露ト或ハ露ハ佛ト結ンデ歐洲中央ノ同盟者ニ對立スルノ外他ニ復タ其生存自立ヲ安全ナラシムルノ途ナキニ因リ、致々トシテ交互ニ歡心ヲ迎フルコトヲ努メ、而シテ眸ヲ轉ジテ更ニ東半球ノ事情ヲ察スレバ、日本ト露國トハ互ニ利害ヲ異ニシ彼ノ利トスル所我之ヲ不利トナシ、我ノ利トスル所彼亦之ヲ不利トナシ、到底氷炭相容レズ、早晚衝突ヲ免レザルノ勢アリ。然ルニ昨年以降日清交戰ノ功果ハ始終日本ノ干戈ニ利アリタルヲ以テ、我ハ遂ニ奉天省ノ

媾和條件ト獨逸ノ感情

南部ヲ割テ帝國ノ版圖ニ編入セントスルニ當リ、露國ハ手段ヲ盡シテ之ニ對抗セント欲シタルヤ論ナシ。然レドモ歐洲一般ノ輿論ハ腐敗セル清國ノ敗衄ヲ至當トナシ、併セテ日本人ノ從來企圖シタル開明事業ニ由テ蓋世ノ功績ヲ收ムルヲ嘉賞シテ止ザルニ由リ、己ヲ得ズ其非望ヲ表彰スルニ躊躇シタル瞬間ニ際シ、獨逸政府ハ此機會ニ乘ジ陽ニハ露國ニ與フルニ有力ナル應援ヲ以テ其東亞ニ於ケル將來ノ希望ヲ保持セシメ、陰ニハ之ニ依テ露佛間ニ成立セントスル同盟ノ企圖ヲ震盪セシメタルモノナリ。但佛國若シ獨逸ニ先チテ着鞭シ、露國ニ假スニ有力ナル聲援ヲ以テセシナランニハ露佛ノ同盟之ニ依テ忽チ成就セシヤ知ルベシ。果シテ然ランニハ獨逸ハ東西強敵ノ間ニ介立スルガ故ニ、其危急素ヨリ論ヲ俟タズ。故ニ露佛未ダ相提携シテ日清媾和條件ニ抗議ヲ試ミザルニ先チ、獨逸ハ自カラ率先シテ誘導者ノ地位ニ立チ、露佛兩政府ニ交渉シ遂ニ三國一致ノ抗議ヲ我政府ニ提出スルニ至リタルモノトス。是レ獨逸ガ日清開戦以來我ニ對シ保持シタル友誼ノ方針ヲ豹變シ、營ニ露ノミナラズ加之二十五年來己レヲ敵視セル佛國ニ對シ、今回ノ事件ニ限リテハ一致協力シタル原因ナリトス。然レドモ獨逸政府斯カル卑劣ノ手段ヲ執リ露佛ニ對シ離間策ヲ施シタルノ一事ハ獨逸人民ノ竊カニ慚愧ニ堪ヘザル所タルヲ以テ、獨立不羈ノ獨逸新聞紙及「ビスマルク」公ノ機關新聞ハ勿論、凡判斷力ヲ所有スル獨逸人ハ事ノ眞情ヲ口外スルモノナシ。左レバ獨逸政府ハ始メ露佛ト一致シテ日本ニ抗議ヲ提出セントスル

ニ當リ、先ヅ其口實ヲ設ケ半官紙ヲ以テ之ヲ發表シテ曰ク、日清媾和條約ノ載セタル通商及製造其他經濟事項ニ關スル條件ハ、實ニ日本ヲシテ清國ニ於ケル通商ノ利ヲ壟斷セシムルニ足ルモノナリ。此條約果シテ成立セン乎。獨逸ハ清國ニ於テ遂ニ通商ノ利ヲ收ムルコト能ハザルニ至ラン。獨逸政府豈ニ此危害ヲ逆視シテ默許ニ付スベケンヤ云々、茲ニ於テ本官ハ竊ニ獨逸自由黨ニ屬スル新聞記者數名ニ説キ自由黨諸新聞紙ヲシテ虛構説ニ反對セル證左ヲ擧ゲ痛論セシムルニ、日清媾和條約ハ毫モ清國ニ於ケル獨逸ノ通商ヲ害スルモノニ非ザル所以ヲ以テシタリ。之ガ爲メ獨逸政府ハ遂ニ其口實ノ甚淺薄ニシテ輿論ヲ満足セシムルニ足ラザルコトヲ悟リ、一朝口實ヲ改メ更ニ半官紙ヲ以テ之ヲ發表シテ曰ク、日本國ノ旅順口ヲ占領スルハ北京ニ對シ直接恐喝ヲ加フルモノニシテ其様恰モ人ノ胸邊ニ拳銃ヲ差向ケテテ威嚇スルト敢テ異ナルコトナシ。故ニ清國ハ怨ヲ報ジ辱ヲ雪ガントスルノ念ヲ忘ル、コト能ハズシテ、東洋ノ平和ハ遂ニ鞏固ノ基礎ニ就クコトヲ得ザルベシ。果シテ然ラバ雷ニ東洋ノ貿易振興セザルノミナラズ、東亞ノ事變ハ延テ歐洲列國ノ平和ニ影響ヲ及ボスノ虞尠シトセズ。是レ實ニ獨逸ガ諸國ト聯合シテ日清媾和條件ニ干渉セザルヲ得ザル所以ナリ云々。是レ獨逸政府ガ自國人民及諸外國ニ對シテ干渉ノ理由ヲ明ニスル爲メ其機關新聞紙ヲシテ報導セシメタルモノナリト雖モ、抑モ歐洲人ガ東亞細亞ニ對シ抱有スル思想ニ懲シテ之ヲ考察スレバ、獨逸政府ガ竊カニ露佛政府ト

謀リ抗議提出ノ事ヲ議スルニ當リテハ他ニ復タ重要ナル理由ヲ擧ゲテ三國聯合ノ協意ヲ促シタルヤ必セリ。何トナレバ歐洲人ノ一部ハ日本人ヲ看テ未ダ泰西ノ文化ニ歸向スル民ト認メズ、今回日清ノ交戦ニ於テ我陸海軍ハ連戦連勝古今未曾有ノ偉功ヲ奏シタルニモ拘ハラズ、保守若クハ守舊主義ヲ取テ自負セル歐洲人ハ公然又竊ニ之ヲ冷笑シ謂ヘラク、日本人ハ夫レ唯柔弱不斷ノ清國人ニ對シ勝ヲ制シタルノミ、豈此故ヲ以テ日本ノ軍制及戰術ノ十分發達セルヲ證シ且之ヲ賞賛スルニ足ランヤ。又彼等ハ謂ヘラク、日本人ハ清國人ニ比スレバ聊カ文明ノ程度ニ於テ優劣ノ差異ナキニ非ズト雖モ要スルニ共ニ均シク邪教ヲ信ズル半開人民タルノミ、之ヲ以テ日本人ハ外面上歐洲文明ヲ假裝スト雖モ現ニ其内心ニ於テ歐洲人ヲ嫌惡スルコト寧ロ清國人ニ優レリ。故ニ日本人若シ勢力ヲ擴張シテ清人ヲ支配スルニ至ランカ、所謂亞細亞ハ亞細亞人ニ屬スベシトノ主義ヲ以テ清人ヲ籠絡シ之ト結托シテ終ニハ泰西諸國ニ敵對スルモノナリ云々。是眞ニ守舊黨者流ノ妄想ニ過ズ。依テ半官紙ハ敢テ此意味ヲ公言セザレドモ某部分歐洲人ノ日本人ニ對スル感情夫レ斯ノ如キモノアリ、故ニ獨露佛三國ノ密議ニ於テ聯合運動ヲ必要トナセシ基本的理由ノ口實中ニハ、日本人ノ勢力擴張ヲ制スト云フコトモ必ラズ存在セシコト蓋シ疑ヲ容ルベキニ非ザルナリ。

歐洲列國政府ハ嘗ニ今回ノミナラズ、將來日本ノ國力益々振興シ我勢力ヲ擴張スル區域愈々

廣大ナラントスルニ當リテハ必ズ我ヲ箝制スルコトヲ努ムベキナリ。而シテ其我ニ反對ヲ試ムルニ方リ假初ニモ我ニ多少ノ瑕瑾アルヲ發見センニハ必ラズヤ口實ヲ設ケテ云ハン。日本人ハ未ダ耶蘇教ニ感化セザル半開ノ國民ナリ、其勢力ノ擴張ハ泰西文化ノ進運ト背馳スルモノナリ云々ト故ニ我ハ平素深ク此點ニ注意セザルベカラズ。

獨國ガ露佛ト相携提シテ日本ニ對抗シタル眞ノ原因ハ上來述ブルガ如シト雖モ、其突然方針ヲ豹變シテ我ニ反對スルニ至リタル直接ノ近因ハ、元北京駐劄獨逸公使「フォン、ブランド」氏ノ陰謀與リテ力アリタルコト證蹟極メテ顯然タルモノアリ。

「フォン、ブランド」ハ從前何等ノ原因アリテ歟伊藤井上大隈ノ三伯並ニ本官ニ對シ深ク敬意ヲ狹ミ、隨テ日本ヲ忌ミ清國ヲ愛スルノ聞アル人ナリ。而シテ今其獨逸政府ニ對スル職務上ノ關係ハ一個ノ非職外交官タルニ過ズト雖モ、巧ミニ頑固ナル保守論ヲ主張シ竊カニ要路ノ人ニ說クニ日本ノ開明事業ヲ皮相ノ眞似仕事トナシ、邦人ノ攘夷考ヲ脱却セザルヲ證明シ、到底獨逸ト日本ハ決シテ利害ヲ共ニスルコトヲ得ベキモノニ非ズトノ事ヲ以テシ、又或ハ新聞ニ或ハ著書ニ其持論ヲ述ベ、昨年開戦以來獨逸ノ輿論ヲシテ常ニ日本ニ反對セシメンコトヲ謀レリ。現ニ本年四月十七日獨逸外務大臣ガ本官ト會談ノ際陳述セシ事項中「日本ハ地理上清國ニ隣接スルヲ以テ貨物ノ運搬等ニ關シ頗ル利益ヲ得ルニ由リ、所謂均占權ハ獨及歐洲各國ノ損害ヲ

賠償スルニ足ラズ」云々ノ愚説ヲ吐キタル如キハ確カニ「フオン、ブランド」ノ持論タルヲ認メタリ。且又獨逸政府ハ我現内閣ニ對シ既ニ明治二十五年間貴聞ニ達シ置キタル如ク、決シテ友好ノ感情ヲ抱クモノニアラザルナリ。是レ恰モ「フオン、ブランド」並ニ其政友タル某ガ巧ミニ北京政府ヲ籠絡シテ其必需セル軍艦及武器等ヲ獨國ニ於テ購求セシメタルニモ係ラズ、我政府ハ類似ノ品物ヲ英若クハ佛國ニ於テ購求スルヲ快シトセザルニ原因セズンバアラズ。

又獨皇ハ本官赴任以後謁見ノ每輒チ日本ニ對シ深く友情ヲ抱ク旨公言セラレ、又昨年十月中ハ我政府ノ爲メ好意ヲ表示セラレタリ。然ルニ我政府ハ曩ニ菊花章頸飾御贈進ノ事ヲ取計リタル外同陛下ニ對シ頗ル冷淡ナル特態ヲ示シタリト領シタルニ似タリ。

當時既ニ報告シタル如ク客年十月二十九日獨皇竊カニ本官ヲ引見シテ曰ク、日本ヲシテ戰功ヲ空スルコトナカラシメンガ爲メ、強ク武裝干涉ノ議ニ反對シ遂ニ其策ヲシテ畫餅ニ屬セシメタルモノハ即チ朕ナリト、依テ本官ハ十一月五日第二十七號電報ヲ以テ其旨ヲ閣下ニ報告シタル。獨皇ノ此内諭タル素ヨリ本官一己ニ向テ宣ヘラレタルモノニハアラズ、其事實ハ右報告書中ニアリ。然ルニ閣下ヨリハ右獨皇ノ好意ニ對シ何等謝詞ヲ陳述スベシトノ訓令モ到達セザリキ。又菊花章頸飾御贈進ノ御答禮トシテ、我陛下へ急速黑鷲勳章ノ頸飾ヲ贈進セラレタルハ

獨皇ガ我陛下ニ對シ厚キ友誼ヲ保持セラルルノ證左タルニ由リ、閣下ニ於テハ東京駐劄獨逸公使ヨリ該頸飾到達ノ通知ヲ受クルニ際シ直チニ其旨ヲ上奏セラレ、時宜ニ由リテハ廣島ニ於テ同公使ニ内謁見ヲ仰付ラル、様取計ヒ、以テ獨皇ノ友誼ニ重ヲ置レシナランニハ甚ズ好都合タリ。勿論當時軍國ノ事務多端ナリシノミナラズ行在所ノ御都合モアリタルニ由リ事茲ニ出ヅ之ガ爲メ勳章捧持ノ期遷延ニ流レ遂ニ獨皇ヲシテ不快ノ感ヲ抱カシムルニ至リタルハ甚ダ遺憾ナル出來事ナリ。又前顯菊花章頸飾ノ御贈進並ニ「メツケル」少將叙勳ノ事ニ關シ當時東京某新聞ノ云々セシ事實ハ、貴地獨公使ヨリ報告シタルニ由リ、獨皇及其政府ハ此事ニ關シテモ亦不快ノ感情ヲ起シタルモノト察セラレタリ。

右等ノ關係ヨリ獨皇及其政府ハ我ニ對シ漸ク冷淡ナル色アルニ際シ「フオン、ブランド」及其政友某々ハ日本ハ友國トシテ信據スルニ足ラズトノ趣意並ニ將來英國ノ關涉ヲ壓シ清國ヲ三國ニ於テ分割スルニ利アリ云々ヲ以テ要路ニ遊説ヲ遂ゲタリ。故ニ獨逸政府ハ容易ニ其言ヲ信シ巧ミニ機變ヲ利用シ遂ニ歐洲列國ニ關スル政略ヲ施ス爲メ日本ノ利益ヲ顧ミズ、加之從前我彼ノ間ニ綢繆スル友誼ヲ犧牲トナスニ躊躇セザリシナリ。將又斯ル事情ニ起因スル三國ノ抗議ヲ擯斥シ、果然事ノ曲直ヲ干戈ニ訴フルハ甚ダ危險タルコト固ヨリ論ナシ。然レドモ奉天省南部ノ地域タル實ニ我將校兵員ノ膏血ヲ瀧キ互寒ニ敵抗シ所謂鎗先ニテ領略シタル土壤タルニ由

リ、少クモ旅順軍港若クハ朝鮮ニ接續スル一地域ナリトモ永ク我版圖ニ歸スル方然ルベキニ似タリ。故ニ本官ハ「シーボルト」男ヲ以テ窃カニ宰相「ホーエンロー」公ニ就テ獨政府ノ豹變ヲ責メ、其露國ニ左袒スルヲ非舉トナシ、今ニ迫ンデ其政略ノ方針ヲ改ムルニ利アルヲ説得セシメタル末、少ク宰相ノ動搖セルヲ認メタルニ因リ、又一方ニ於テハ獨皇モ其輕舉ヲ悔ヒ獨國ノ抗議ハ單ニ樽俎間ノ抗議ニ止ムベシト内命ヲ下サレタル旨窃ニ傳聞シタルニ由リ、五月二日發九十三號ノ電信ヲ以テ獨政府ヘ決答ノ仕方ト其時機ニ關シテハ之ヲ本官ニ一任アラシメテ建言シタリ。然ルニ貴方ニ於テハ定テ必須特別ノ事情アリテノ故歟、閣下ハ本官ノ建言ヲ容レズ、同月五日附ノ電訓ヲ達セラレタルニ由リ一件我ニ利スル所ナクシテ其局ヲ結ビタリ。

將來東亞ノ大勢ヲ革新スベキ偉業ヲ繼續スルニ當リテハ必ズ歐洲某々國ト特ニ親密ナル關係ヲ挽回シ、嘗ニ彼ヲシテ我進路ヲ妨害セシメザルノミナラズ、時宜ニ依テハ其聲援ヲ要求スルニアルヤ明カナリ。改メテ釋迦ノ前ニ說法スルノ必要ナケレドモ、國ノ交際ヲシテ親密ナラシムルノ途ハ個人ノ交際ニ於ケルト敢テ異ナルコトナク、我レ彼レニ信ヲ措キ我ヲ迎ヘテ信意ヲ表スルニ至リ交際始メテ親密ノ途ニ歸着スベシ。昨年十一月以來閣下ニシテ我等遣外外交官ニ内示スルニ媾和條件ニ關シ我志望ノ存スル所ヲ以テシ、且時機ニ乘ジ歐洲列國中特ニ我ニ友誼ヲ表スルモノト意見ヲ交換スベク訓達セラレタランニハ、歐洲列國中少クモ一二國ノ歡心ヲ博

シ得タルヤ疑ナシ。現ニ五月九日附第百號電信ヲ以テ貴國ニ達シタル如ク、當日當國外務大臣ハ甚ダ聞苦シキ申分ナレドモ本官ニ對シ「今回日本政府ノ失望ハ素トシテ大國中ノ一ニ對シ懇信的ノ協議ヲ缺タルニ基因ス」云々ト陳述シ暗ニ將來ヲ戒メタリ。且ツ我政府ハ國內ニ於テハ種々ナル特別ノ事情ヲ顧ミルニ忙ク、之ガ爲メ他國ノ希望ヲ充スニ餘暇ナカリシ事ト恐察スルノミ。右九日及其前ノ會合ニ於テ本官ハ痛ク獨政府ノ非舉ヲ擯斥シ頗ル激論ヲ以テ外務大臣ノ迂説ヲ反撃シタルニ由リ、又自由黨各新聞紙「ビスマルク」公機關新聞紙ハ尙ホ政府ヲ攻撃シテ止サルニ由リ、一件落着ノ後ハ皇帝ノ名ヲ假リテ諂諛ケ間敷善後策ヲ示談セリ。然レドモ本官ハ穩當ノ言ヲ以テ交際上ノ責ノミヲ塞ント勉ムルノミ。

將又本官今ニ迫ンデ閣下ノ訓達ニ抗辯スル念慮ヲ有セザレドモ、昨年十月九日附第十九號電信ニ對シ閣下ハ第十四號電報ヲ以テ本官ニ左ノ戒訓ヲ下サレタリ。

You will neither act nor express your opinions beyond instructions so as not to commit yourself. 是レ實ニ本官ノ了解ニ苦ミタル所ナリ。本官不能ト雖モ苟モ媾和條件ヲ和議シ我政府ヲ羈絆スベキ言ヲ吐露スベケンヤ。電信中訓令ノ寫アレドモ其實久シク訓令ニ接セズ。隨テ更ニ閣下ノ意嚮ヲ詳悉セザルニ由リ當時獨政府ニ於テ抱持セル意見ヲ探察シタル末、右十九號ノ電信ヲ以テ閣下ノ注意ヲ喚呼スル旁敢テ建言シタルニ過ギズ。事過去ニ屬シ今更喋々ヲ要セザ

レドモ當時獨政府ノ我ニ對シテ抱持シタル意見並ニ本官ノ底意ヲ追啓センノミ。
 之ヲ要スルニ我陸海軍ハ戰テ勝ザルナク攻メテ取ラザルナク、恰モ歷山大王ノ波耳斯亞ノ征
 伐ニ類似スル大業ヲ決行シ、之ニ由テ其榮名ヲ世界ニ轟シタリト雖ドモ、本官等外交官ノ機務
 其功ヲ奏セザリシ爲メ遂ニ獨露佛三國ノ干涉ニ遭遇シテ戰勝ノ利ヲ完スルコトヲ得ザリシハ甚
 ダ恐懼ニ堪ズ。茲ニ三國聯合運動ノ原因ヲ具シテ閣下ノ御參考ニ供スト云爾。
 右及報告候敬具

明治廿八年五月廿七日

獨國駐劄

特命全權公使子爵 青木周藏印

外務大臣子爵 陸奧宗光殿

機密第六號

獨佛ノ資本家相謀リ獨佛英露ニ於テ清國ノ國債ヲ
調達セントスル一件

獨佛ノ資本家ハ清國ノ國債ヲ募集スルヲ豫想シ竊カニ商議スル所アリ。其計畫ノ大要ハ獨佛
 ノ資本家ニ於テ本件ヲ主唱シ、及兩國ニ於テ其總額ノ大部分ヲ募集シ、露國ニ於テ一少部分ヲ
 擔當セシメ、而シテ經濟上ノ交義ヲ絶タザル爲メ英國ノ資本家ヲシテ仍ホ一層些少ナル一部ヲ
 分擔セシムルノ考案ニシテ、此國債ニ對スル擔保要件トシテハ清國關稅徵收ノ事務ヲ舉ゲテ獨
 佛露政府ノ若クハ指名選任スル聯合委員ノ所掌ニ屬セシメントスルモノナリ。之レ即チ獨佛露
 此機ニ乘ジ敢テ清國ノ財政ニ干涉シ、將來益々進ンデ各般ノ內政ニ干涉スルノ端緒ヲ開カント
 欲スルモノナリ。換言スレバ新同盟三國ハ將來日本ヲシテ清國ニ對シ其勢力ヲ逞スルコトヲ得
 ザラシメ、時機愈々熟スルニ及ンデ彼ノ渺茫タル腐敗帝國ノ運命ヲ左右セント欲スル計畫タル
 コト素ヨリ辯ヲ俟タザルナリ。故ニ本官ハ本月十七日第百二號電報ヲ發シテ特ニ閣下ノ注意ヲ
 喚起シタリ。

始メ佛國資本家ノ間ニ於テ此計畫起ルヤ、彼等ハ同國外務大臣ニ就テ其意見ヲ叩キタルニ同
 大臣竊カニ資本家ニ告諭シテ曰ク、清國ノ國債事件ニ關シテハ獨國資本家ト協議スルヲ可トナ
 ス云々。佛人 Benoit ト申ス資本家仲買人ヨリ竊カニ承知シタリ。

今獨佛露ノ資本家が清國ノ國債ニ關シ計畫スル所夫レ斯クノ如ク遠大ノ政略ニ基因ス。然レ
 ドモ右仲買人ノ口氣ニ由テ察スルニ、英人ヲシテ前顯聯合委員ニ列セシムルコトハ獨佛露政府

獨佛資本ト清國國債

ノ喜バザル所タルヲ以テ、佛獨資本家ハ其真意ヲ語ラズ、單ニ普通ノ金融事業トシテ英國ノ資本家ニ協議ヲ開キタルニ似タリ。又露國ノ資本家ハ獨佛ノ資本家ト相携提シテ斯ル事業ヲ擔任スルノ權力アルモノニ非ズト雖ドモ、若シ露國ヲシテ此計略ニ參與セシメザルニ於テハ三國協同ノ運動ヲ執リタル主義ニ背馳スルガ故ニ、總額ノ一小部分ヲ割テ露國ノ資本家ニ擔任セシメントスルモノトス。

頃日當地 Disconto gesellschaft 銀行ノ頭取 von Hansemann ナル者（同人ハ本官ト豫メ交際アル人ナリ）態ト本官ヲ訪ヒ語テ曰ク、我銀行ハ清國ヨリ日本ヘ仕拂フベキ償金及清國々債ニ係ル事業ヲ取扱フ結果トシテ一支店ヲ日本ノ某市ニ開カント欲ス。希クハ此營業ニ關シ參考トナルベキ事件並ニ閣下ノ所見ヲ垂示セラレヨ云々、本官ハ同氏ノ問ニ答フルニ先チ清國々債募集ニ關スル規約及利子等ノ事項ヲ枚擧シテ推問ヲ試ミタルニ彼其細縷ヲ答ヘズ、單ニ獨逸ニ於テハ Disconto gesellschaft 専ラ主唱者トナリテ募集ヲ計畫ス。而シテ清國ノ必需スル負債ノ全額ハ概ネ三千乃至五千萬磅ナリト雖モ、別ニ軍艦製造及其他軍備ノ爲メ巨額ノ臨時費ヲ要スベキニ付總計七千萬磅ヲ募集セントス云々ト告タリ。

本官ノ察スル所ニテハ此國債額ハ清國ガ現ニ必要トスル費額ヲ遙カニ超越スルモノナリ。故ニ募集ノ金額ニ就テノミ考察ヲ下スモ、歐洲資本家ノ計畫ハ頗ル怪訝スベキ所アリ。即チ清國

ヲシテ緊急ノ必要以外ニ超越シタル多額ノ國債ヲ起サシメ、之ニ由テ益々其財政ヲ困難ノ途ニ導カントスルモノナリ。故ニ本官ハ試ミニ Von Hansemann 氏ニ對シ獨國ノ資本家カ清國々債募集ノ事ニ奔走スルハ既ニ清國政府ヨリノ依頼ヲ領シタルニ因ル乎、抑又貴君等ノ好意ニ出タル歟トノ問ヲ起シタルニ彼ノ答辯甚ダ曖昧模糊タリ。曰ク未ダ清國政府ヨリ直接ノ依頼ヲ受ケタルニアラズ。唯間接ニ依頼ヲ領セシノミト。茲ニ於テ本官ハ彼レガ銀行支店ヲ日本ニ開設スルノ可否得失ニ關シ漠然答テ曰ク、日本ニハ英人ノ開業スル銀行ノ外更ニ橫濱正金銀行ナルモノアリテ多年諸外國ヲ通ジ手廣ク爲替ノ業務ニ従事ス。故ニ苟モ獨逸ノ銀行ニシテ日本ニ支店ヲ置キ東洋ノ爲替事業ニ従事セントスル以上ハ烈シク橫濱正金銀行ト競争スルノ覺悟ナカルベカラズ云々。

其後獨國駐劄英國大使來訪シ竊カニ本官ニ語テ曰ク、歐洲大陸ノ資本家ハ各其政府ノ内意ヲ含ミ清國ノ爲メ外債ヲ調達セントスル所ヲ垂示セリ。抑モ英大使ハ曩ニ本官英國駐劄公使タリシ關係アルノミナラズ、先年來ノ相識タルヲ以テ特ニ本官ト内談ヲ試ムルノ趣意ニテ來訪セシモノナリ。依テ本官ハ彼レニ告ゲテ曰ク、本官亦事ノ細縷ヲ知ラザレドモ獨佛加之露國ノ資本家主唱者トナリテ清國ノ國債ヲ調達セントスル計畫ハ新三同盟國ガ將來清國ヲ其聯合干渉若クハ監督ノ下ニ置カントスルノ計略ニ外ナラズ。此計略果シテ其功ヲ奏スルニ至ラバ東亞ノ事端

ハ遂ニ絶ユルコトナク、清國ハ又タ救フ可カラザルノ境遇ニ陥ランノミ。之レ實ニ英國政府ガ力ヲ盡シテ列國ノ政策ヲ未發ニ防止スベキノ時ナリ。希クハ貴君云々ヲ貴政府ニ稟議シ、清國ヲシテ其國債全部ヲ英國並ニ和蘭ニ於テ募集セシムルコトヲ努メヨ。從來ノ慣例ニ依レバ清國政府ハ常ニ財政事務殊ニ國債ノ募集ニ關シテハ總稅務司 Sir Robert Hart ノ意見ヲ諮詢シ、且氏ヲシテ其事務ヲ擔任セシメタルニ似タリ。然ルニ近來北京政府ハ同氏ノ建議ヲ採用セズ寧ロ獨國ノ猶太社會ニ籠絡セラル、ニ似タリ。英國大使之ヲ聞キ首肯シテ大ニ喜ビ速カニ本國政府ニ稟議スベキ旨ヲ約シテ立歸レリ。本件ニ就キ閣下ニ於テハ北京政府ニ對シ既ニ相當ノ措置ヲ施サレタルヤ如何。要スルニ清國若シ獨佛露ノ資本家ヲ賴ンデ國債ヲ募集スルニ至レバ、新同盟列國ハ遂ニ清國ノ内政ニ干涉シ之ヲ東亞細亞ノ新土耳其ニ擬スルヤ必セリ。茲ニ清國々債募集ニ關スル計略ノ真相ヲ探求シテ閣下ノ御參考ニ呈ス。右及報告候敬具

明治廿八年五月二十七日

獨國駐劄

特命全權公使子爵

青木周藏

外務大臣子爵

陸奧宗光殿

公債募集ニ關シ露英兩公使答書并ニ遼東還付ニ關シ李鴻章談話

親展送第八六號

清國ノ公債募集ニ關シ露英兩公使ノ答書并ニ遼東還付ニ對シ李鴻章ト談話ノ件ニ關シ在清林公使ヨリ別紙ノ通報告有之候ニ付右寫差進候也

明治二十八年七月十九日

外務大臣臨時代理

文部大臣侯爵

西園寺公望

內閣總理大臣伯爵

伊藤博文殿

機密第七號信

公債募集ニ關シ露英公使ノ答言並ニ遼東還附ニ關シ 李鴻章談話ノ件

露國ノ保證ヲ以テ清廷ヲシテ巴里府ニ於テ公債ヲ起サレタル事ハ露佛公使ヨリ切リニ總理衙門ヘ相迫リ、英公使ハ種々ノ手段ヲ以テ之ヲ妨ゲント試ミ居候様子ニ候。一昨夜露公使ニ面會ノ節直接ニ其成行ヲ相尋候處、最早近日ノ中相片付可申ト答候、今日英公使ニ面會ノ節露公使ノ答ノ趣ヲ申テ様子相尋候處、英公使ノ答ニハ露公使ハ一月以前ヨリ常ニ近々片付クベキ旨申居候得共今ニ片付カズ、頃日清廷ニ於テハ露國ノ保證ヲ相談候ニ付、露公使ハ更ニ趣向ヲ更ヘ佛國ノ銀行ガ清廷ヲ保證シ、露國政府ハ復々佛國ノ銀行ヲ保證スル事ニ致候由承候、然シ是モ清廷ニテ承諾致候哉否相分ラズト申候。本使尋候ニ或ル確ナル筋ノ人ニ承リ候ニ、清國ガ日本ニ償金ヲ拂込ムベキ期限ヲ十年ニ延期致事出來候ヘバ、清國ハ公債ヲ起サズシテ日本ニ拂フベキ償金ヲ完済シ得ベシト申居候。果シテ然ラバ露國ガ公債ノ保證ヲ致候ヘ共、之ガ返済ノ目途ハ明カニ立居候筈故前ニ恐ル、事ハ有之間敷ト存候ト申候處、英公使ハ否此保證ノ事ニ付テハ露國ハ其契約書中ニ種々ノ條款ヲ載セテ利己ヲ之レ計リ申ベク、從テ他國ノ不利ト可相成候。

第一ノ得策ハ貴公使ガ此處ニテ直チニ遼東還附ノ事ヲ措辦セラル、ニ在ルベクト申候間、本使答ヘテ此事ハ清廷ニテ一日モ早ク在日本ノ公使ヲ任命シ、東京ニテ稟議スル様致候方可然、本使ノ察スル處ニテモ日本政府ノ意モ此ニ在ルベシト存ズ、本使ハ先日恭親王ニ對シ速カニ公使任命ノ事ヲ申勸メ置タリ、其内再タビ面會之節ハ復々々々申シ勸ムベシト申候處、英公使曰ク成丈ケ強硬ニ御勸メアリタシ、但シ清廷ハ日本ガ眞ニ遼東ヲ還附スルノ意無キ事ヲ疑懼スル故ニ、自己ノ迷惑ヲ承知シナガラ露國ニ依頼シテ此還附ヲ完了セント欲スル故ニ新タニ撰任スル公使ヲシテ直接ニ稟議セシムルノ意ニアラザルベク、因テ此事久シク決了セザレバ露國ハ始終清廷ノ疑懼スル所ニ付ケ込ミ日本政府ヲシテ約束ヲ履行セシムル事ヲ恩ト爲シテ種々自己ヲ利スル計策ヲ施スベク、從テ日清ハ勿論他國ノ不利益トナルコト最モ多カルベキニ付、此件ハ一日モ早ク片付ク方全體ノ利益ナリト申居候。清廷ガ日本政府ノ意ヲ疑フト云フ事ハ今ニシテ思ヒ當リ候事有之候。夫ハ天津ニテ李鴻章ニ面會ノ節、鴻章曰ク總理衙門ヨリ電報アリ海城又ハ鳳凰城ニ日本ヨリ援兵送ルト此事實ナリヤ否ト相尋候間、本使答ヘテ之ハ定メテ新舊ノ守備兵交代ノ爲ニ舊隊未ダ去ラザル前ニ新隊來ルニ付テ増兵ノ如ク見ユルナルベシ。遼東ニ在陣ノ我軍隊ハ近々本國ニ引去ルガ故ニ、全體ニ於テ増兵ヲ援送スル筈ナシト申候處、鴻章曰ク必ズ左様ナルベシ、總理衙門ノ連中ハ疑心暗鬼ヲ生ズル也、遼東ヲ還附ノ事ニ付テハ伊藤伯ノ電報ア

リヨモ錯了スル事ハアルマジ。本使曰ク伊藤伯ノ電報ニ云フ處ニ間違無キ事ハ本使ノ請合フ處ナリト相答候處、李モ大ニ同意ヲ表シ候。李ノ此時ノ言ニ由リ想像致候ヘバ總理衙門ハ固ヨリ李鴻章モ今ニ疑心ヲ抱キ居候間ト存候。右昨今承及候様及報告候也。敬具

明治二十八年七月二日

特命全權公使 林 董

外務大臣臨時代理侯爵 西園寺公望殿

露佛獨三國干涉ニ付英國外務大臣及在英
獨逸大使談話
伊國外務大臣談話

加藤公使報告

高平公使報告

親展送第六一號

露、佛、獨、三國干涉事件ニ關シ英國外務大臣及ビ在倫敦獨逸國大使ト談話ノ件ニ付在英加藤公使ヨリノ報告并ニ同伴ニ關シ伊國外務大臣ト談話ノ件ニ付在伊高平公使ヨリノ報告寫爲御參考差進候也

明治二十八年六月十九日

外務大臣臨時代理

文部大臣侯爵 西園寺公望印

內閣總理大臣伯爵 伊藤博文殿

機密第十號

去四月二十六日舞子發貴電ヲ接受候處、遼東半島永久占有ノ義ニ關シ露佛獨三國故障ノ次第ヲ斟酌セラレ、朝鮮ノ獨立ヲ確然各國ニ約シ、且ツ營口及遼東半島上ニ於ケル他ノ一港ヲ自由港ト爲シ、歐洲諸國ノ商利ヲ進捗セシムベシトノ讓合ヲ以テ三國ノ勸告ニ答ヘラルベキ御內意ノ趣ニテ、右答案ニ關シ英國ハ果シテ何程ノ贊助ヲ我ニ與フベキ哉、其意向ヲ慥メ可及具報旨御訓令拜承、仍テ同月二十七日外務省ニ出頭キンバレー伯爵ニ面會ヲ遂ゲ其旨申入レタリ。其節對談ノ要旨左ノ如シ。

本官曰昨日日本國外務大臣ノ電信ニ接シタルニ、帝國政府ハ露佛獨三國勸告ノ旨ヲ斟酌シ事務局ノ圓滿ヲ期セン爲メ出來得ル丈ケノ讓歩ヲ爲シ、此書取ノ趣旨ヲ以テ彼等政府ニ答ヘントスル內意アル趣ナリ。仍テ一應貴覽ニ供ス。(此時右書取ヲ外務大臣ニ示ス)

大臣ハ右書取ヲ一覽シタル後曰。貴國政府答辯ノ要旨ヲ內示セラレ多謝ノ至ナリ。本官曰、此際貴國ノ一舉一動ハ大ニ本案ノ終局如何ニ關スルコト論ヲ俟タズ、過日モ御話アリタル如ク、貴國ノ極東ニ於ケル商利ハ他國ト同日ノ論ニアラザルヲ以テ、一日モ速ニ東洋ノ平和ヲ回復セン爲メ貴國ニシテ若シ一臂ノ力ヲ我國ニ借サルルコトアラバ獨リ我國ノ幸ノミナラザルベシ。就テハ貴國政府ニ於テ帝國政府ガ此際爲シ得ル限りノ讓與ヲ三國ニ與へ、併セテ歐洲各國商利ノ進捗ヲ謀ラントスル微意ヲ斟酌セラレ、三國ヲシテ強テ當初ノ故障ヲ主張セシメザル様適當ノ斡旋ヲ爲シ、以テ我國ニ助力ヲ與ヘラレンコトヲ希望ス。

大臣曰我政府ハ今般ノ事件ニ就テハ一切干涉ヲ爲サルベシト決シ居レリ。然ルニ今貴國政府ノ申分ヲ貫カシメン爲メ斡旋ヲ爲シ若クハ貴國ニ助力ヲ與フルコトアラバ、是レ取モ直サズ一種ノ干涉ヲ爲スモノニシテ、我政府ガ兼テ決シタル趣旨ト齟齬スルニ至ルベシ。仍テ只今即答ヲ爲スコト能ハズ。何レローズベリ伯爵ト協議ノ上何分ノ確答ニ及ブベシ。但シ自分一己ノ說ヲ述ブレバ、本日內示セラレタル貴案ノ讓歩ハ關係政府ヲシテ之ヲ甘受セシムルノ望多カラザル如シ。從テ我政府ガ貴國政府ノ御依頼ニ應ジ有效ノ助力ヲ與ヘ得ンコト甚ダ覺悟ナキヤニ思考ス。

申迄モナク我國ハ幸ニ貴國ト甚ダ親密ナル關係ヲ有スルモ、目下貴國ノ相手方タル三國トモ亦同様良好ナル交際ヲ爲シ居ルコトナレバ、我方針ヲ定ムルニ當テハ獨リ東洋ニ於ケル利害ノミヲ見ルコト能ハズ。諸般ノ關係ヲ總合計量セザルベカラズ、且ツ苟モ我國ガ手出シヲ爲ス場合ニハ、終局ノ決心モナク徒ラニ試驗的ノ仕事ヲ爲スコト能ハズ、必ズヤ一旦手出シヲ爲ス上ハ十分ノ決心ト責任トヲ以テ其目的ヲ貫カンコトヲ期セザルベカラズ、是レヲ以テ其進退頗ル大切ナルコトハ克ク御了知アリタシ。

本官曰他國ノ近況ニ付聞キ及バル、事ナキヤ。大臣曰近頃一向ニ承リタル事ナシ。從テ何レノ點マデ進ム積ナルヤモ知ラザレ共、諸種ノ徵候ハ頗ル重視スルニ足ルモノ、如シ。從テ貴國ガ其方針ヲ決セラル、ニ就テハ總テノ事變ヲ計量セラル、事必要ナルベシ。申迄モナク英國ハ專ラ平和ヲ希望スルモノナルニヨリ、貴國ガ再ビ清國ニ向テ戰鬥ヲ開カル、事ヲ好マズ、況ンヤ歐洲ノ諸國ト開戦セラルル等ノ事ヲ見ルハ最モ其欲セザル處ナルニヨリ、苟モ事務局ヲシテ圓滿ナラシムルノ好機會アラバ其勞ヲ吝マザルベシ、但シ夫ニ就テモ英國進退ノ苟モスベカラザルハ前ニ申述ベタル通ナリ。本官曰貴意ノアル處能ク了解セリ、何卒相當御評議ノ上可成速ニ御答ヲ煩シタシ、而シテ何日頃御答ヲ承ルコトヲ得ベキ哉。大臣曰多分明後廿九日ニハ何分ノ御確答ヲ爲スコトヲ得ベシ、何

レ此方ヨリ御通知ニ及ブベシ。

是ヨリ雜話ニ入り大臣曰。

貴國ノ如キ國ニ向ヒ忠告 (advice) モ或ル意味ニテハ干涉ノ一種ナルガ故ニ此際決シテ之ヲ爲サズ。仍テ是レハ貴官ニ向ヒ全ク一己ノ私見ヲ申述ブルニ過ギザル事ナルガ、遼東半島ヲ貴國ニ於テ占有スル永遠ノ利害ハ果シテ如何ナルベキヤ、頗ル疑ナキ能ハザルガ如シ。我國ト貴國トハ其地勢大ニ相類似シ共ニ島國ニシテ大陸ニ面シ外敵襲來ノ恐れ甚ダ少ナク、實ニ堅固ナル地位ニ在ルモノナリ。然ルニ今後貴國ニ於テ大陸ノ一部ヲ領有セラルルニ至ラバ大ニ危險ノ虞ヲ加フルコトアラザルヤ。尤モ貴國ノ本國ヲ侵サシムコトハ何レノ國ニ取テモ大困難ノ事業ナレバ、之ヲ企ツルモノ殆ド絶無ナルベシト雖モ、優勢ナル海軍力ヲ有スルモノアラバ本國ト遼東半島領地トノ連絡ヲ斷絶センコトハ左迄ノ困難ナクシテ之ヲ爲シ得ベシ。果シテ右様ノ場合アラバ遼東ノ貴國領地ハ其本國トノ氣脈ヲ斷タレ、大ニ危險ノ地位ニ陥ルハ勿論ナリ。是レ貴國ノ爲メ一ノ弱點ヲ作ルモノニアラザルカ。大陸ニ領地ヲ有スルノ不利ナル一例ヲ申サバ、我國ハ印度ヲ領スル爲メ常ニ露國ノ侵略ヲ恐れ、日夜邊境ノ防備ニ汲々タリ。尤モ私見ニヨレバ印度ニ對スル露國侵略ノ事ハ我國一般人民ノ危懼稍過大ニシテ實際左程ノ事モアルマジキカナレド

モ、兎モ角英國ノ爲メ幾分カ弱點タルニハ相違ナシ。貴國ガ遼東半島ヲ所有スル趣旨ハ朝鮮ノ獨立ヲ鞏固ニスル爲メナルベキガ、其必要モ實際ハ左程ナラザルヤモ計リガタシ。其故ハ清國ハ今度ノ大失敗ニヨリ少クモ當分ハ朝鮮ニ對シ再舉ヲ謀ル等ノ餘勇アルベカラズ。仍テ此方面ヨリ朝鮮ガ其獨立ヲ侵害セラル、コトハ先ヅ以テ之レナカルベシト云フモ敢テ過言ニアラサルベシ。然ラバ露國ノ侵入ハ如何ト云ニ、貴國ガ該國ニ對シ朝鮮ノ獨立ヲ維持セントスルニハ貴國ノ本國ヨリ容易ニ之ヲ爲シ得ベク、遼東半島ヲ有シタレバトテ格別ノ便利ヲ受クルコト之レナキガ如シ。果シテ然ラバ遼東ノ占有ハ貴國ノ爲メ寧ロ害アルモ著シキ利益アラザルモノ、如ク思考セラル、ナリ。

本官曰貴說一應御尤モナリ、本官モ遼東半島ノ占有ハ我國ノ爲メ或ル場合ニ於テ弱點トナルコトナキヲ保セズ、但シ我政府ハ其利害講究ノ未之ヲ領スルコト必要ト認メ、清國ヲシテ之ヲ讓與スルコトヲ諾セシメタル場合ナレバ、今日ニ於テ其利害得失ヲ論ズルハ既ニ晚キニ屬スルガ如ク、若シ馬關談判結了前ニ他國ノ抗議ニ遇ヒタラバ或ハ再考ノ餘地アリタルヤモ計ラレザレトモ、何分調印濟ノ今日ニ在リテハ此讓與ヲ棄テント我國ニ取り大難事タリ、其邊深ク御洞察アラントヲ希望ス。大臣曰御尤至極ナリ、尤モ以上ハ私見ヲ申述べタルニ過ギズ。我政府ノ決答ハ何レ改メテ申上ルコトトスベシ。

翌廿八日ハ日曜休日ニシテ其翌廿九日午前外務大臣ヨリ手書到來、當日午後面會スベキ旨申來候ニ付即チ出頭面談ノ趣旨左ノ如シ。

大臣曰一昨日御内話ノ趣早速ローズベリイ伯ト協議ヲ遂ゲタル處、我政府ハ今般ノ事局ニ關シ一切中立ヲ守ルコトニ決シタルコトナレバ、今後モ其方針ヲ執ラントス。然ルニ貴國ノ御依頼ニ從ヒ、直接間接ノ助力ヲ與フルハ此主義ニ相反スルコト、ナルベキニヨリ、遺憾ナガラ何等ノ御助ケヲモ爲スコトヲ得ズ。貴國ニ對シテハ十分ノ友情ヲ有スルニ拘ハラズ自國ノ利害ハ此際何等ノ手出シヲ許サズ、右宜敷御了承相成タシ。ローズベリイ伯モ貴國ノ御内議ニ係ル讓歩ノ個條ハ關係政府ヲ満足セシムルニ足ラザルベク、又他ノ二國ハ兎マレ角マレ露國丈ケハ眞面目ナルヤニ思考セリ。此二點共總テ本大臣ノ意見ト符合セリ。

本官曰貴答了承セリ、早速我政府ヘ之ヲ電報スベシ。我政府ハ此報ニ接セバ定メテ失望スベシト雖モ、貴政府ノ御趣意ヲ一々拜承スレバ誠ニ餘儀ナキ次第ナリ。

在羅馬同僚ヨリノ内報ニ依レバ、伊國政府ハ本案ニ關シ貴國ト同ジク我國ニ同情ヲ表シ爲メニ斡旋スル處アラントスル趣ナルガ、是ニ就キ該政府ヨリ貴國政府ニ對シ何カ打合ニ及ビタルコトナキヤ。

大臣曰同國政府ヨリ我政府ノ意向ヲ問ハレタルコトハアルモ、別ニ打合ト申程ノコトナシ。尤モ同政府ト同ジク貴國ニ對シ友好ノ感情ヲ抱キ居ルハ本大臣ノ曾テ承及ビ居ル處ナリ。尤モ東洋ニハ殆ド利害ヲ有セザル國柄ナルユヘ、格別ノ進退ヲナスコトハナカルベシ。

御承知ニモ之レアルベケレドモ「サンステファ」ノ先例ハ此際貴國ノ參考トセラルルニ足ランカ、目下貴國ニ對シ抗議ヲ試ミ居ル國ノ一ハ、當時恰モ貴國今日ノ地位ニ立テリ、貴國ガ彼等ニ一步ヲ讓ラル、モ敢テ貴國ノ恥辱トスルニ足ラザルベキカ。

本官曰貴答ノ趣速ニ我政府ヘ電報スベシ。本日ハ獨逸大使ヨリ面會ヲ求メラレタルニヨリ、是ヨリ同大使館ニ赴ク積ナルガ、獨逸政府ガ我要求ニ反對ヲ唱フル理由ハ千思萬考スルモ其要領ヲ得ズ貴說アラバ承リタシ。

大臣曰、拙者ニ於テモ更ニ之ヲ了解セズ、過日來度々獨逸大使ニ面會シタルガ獨逸政府ハ貴國ガ要求セラレタル通商上ノ讓與ニ關シ多少ノ故障アル趣申居タレドモ其要領ヲ得ズ。尤モ獨逸人ハ一般ニ商工業ノ上ニ付甚シク貴國人ノ競争ヲ恐ル、モノ、如シ、尤モ此恐レハ當ニ獨逸人ニ止マラズ我國人中ニモ此事ニ付近來大ニ恐怖ノ念ヲ抱クモノアリ。貴國人ノ敏捷銳意ナルガ上、低廉ノ賃銀ニ甘ンジ得ルヲ以テ之ヲ看レバ此恐レモ大

ニ根據アルコトナレドモ、左リトテ是レハ外交談判ノ問題ト爲シ得ベキ事柄ニアラザルハ勿論ナリ其事ハ獨逸大使ニモ申述べタルコトナリ。

本官曰近來歐洲人ガ我國人ヲ大ニ恐ル、模様アルハ本官ニ於テ却テ赧顏ノ至ナリ。成程我國人ハ隨分敏捷ニシテ他國人ノ爲ス事ハ何事ニテモ爲シ能フ丈ノ技倆ヲ備ヘ居ルニハ相違ナケレドモ、將來ハイザ知ラズ目下ノ處ニテハ遺憾ナガラ未ダ以テ歐洲人ガ勁敵トシテ恐ル、程ノ場合ニ進歩シ居ラズ。加フルニ此戰爭開始前ニハ一般ノ歐洲人ハ我國ヲ旅行シタル歐米人ノ著書ナドニ誤ラレ、日本人ハ誠ニ氣樂ナル人民ニテ愉快トカ安樂トカ云事ノミヲ求メ、眞面目ナル性質ニハ乏シク、一口ニ申サバ成長シタル小兒ノ様ナルモノナリトノ感想ヲ抱キ、我國ニ相當ノ價值ヲ置カザル傾向アリシヲ以テ、日本人ハ常ニ甚ダ之ヲ遺憾トセシニ、今日ニ至リテハ我國人ヲ見ルコト頓ニ一變シ、敢爲冒險何事ヲモ爲シ能ハザルナク、甚シキハ清國ハ勿論他ノ亞細亞人種ト連合ヲ爲シ、將來印度ヲ席卷シ其局歐土ニ侵入シテ白人ノ運命ヲ危クスルニ至ルベシナド極端ノ說ヲ爲スモノアルニ至レリ。申迄モナク日本人ハ右様大ナル技倆モナク又途方モナキ空想ヲ抱クモノニアラザルモ、今般露國其他ノ反對モ幾分カ日本人ヲ過重視シタル結果ナルヤモ知ルベカラズ。前日小兒視セラレタルニ惡人ナルカノ如キ世評ヲ受クルハ甚ダ迷惑ト謂ハザル

ベカラズ。世評ノ極端ニ奔リ勝ナルハ真ニ驚クノ外ナシ。

大臣曰、大ニ其氣味アリ、但シ貴國人ノ將來大ニ發達スベキハ毫モ疑ヲ容レザル處ナリ。

右兩日問答ノ要旨ハ一々電稟致置候得共、右ニ洩レタル廉モ有之候ニ付更ニ此段及内申候。

敬具

明治廿八年五月十一日

在 英

特命全權公使 加藤高明印

外務大臣子爵 陸奥宗光殿

機密第十一號

去四月二十九日在倫敦獨逸大使ハ其書記官ヲ本館ニ送り、當日本官ニ面會致度趣申來候處、

一面識アルニ過ギザル該大使ガ態々面會ヲ求ムルハ必定目下我國ト獨逸其他二國トノ間ニ於ケル懸案ニ關シ談話ヲ試ムル爲メナラント存候ニ付、早速來意ヲ諾シ同日午後此方ヨリ彼ノ大使館ニ罷越シ面談シタル大畧左ノ如シ。

大使曰、貴國ニテハ獨逸ガ急ニ其方針ヲ轉ジタル様ニ考フル人モアル由ナルガ、夫ハ甚シキ誤ニシテ、獨逸ハ終始一貫、同一ノ方針ヲ履ミ來リタルモノニシテ決シテ之ヲ變ジタルコトナク、今日ト雖ドモ貴國ニ對シ好意ヲ抱キ居ルハ更ニ前日ト異ナラザルナリ。其證據ハ去ル三月六日在日本ノ獨逸公使ハ本國政府ノ訓令ニ基キ貴國政府ノ外務大臣代理タル外務次官ニ向テ、一日モ速ニ平和回復ノ必要ナルコト及ビ清國ニ對スル貴國ノ要求或ハ限度ヲ超過スルニ於テハ、必ズ他國ト紛議ヲ醸スノ場合到來スベキニヨリ、豫メ其要求ヲ適和ノ度合ニ止メ、第三者トノ交渉ヲ未然ニ防ガル、コトノ急務タルベキコトヲ勸告シタルニ、貴國外務次官ハ其政府ヲ代表シテ獨逸政府ノ好意ニ出デタル勸告ニ對シ謝意ヲ述べラレタル由ナリ。然ルニ不幸ニモ貴國ハ我政府ノ勸告ヲ容レラレズシテ清國大陸ノ一部ヲ要求セラレタルニヨリ、此度ノ問題ヲ惹起シタルモノナリ。獨逸ハ豫メ今日ノ現象ヲ知り居リタレバコン前記ノ勸告ヲ試ミタルナレ、獨逸ガ貴國ニ對シ其方針ヲ變ジタルニアラザルハ此事實ヲ以テ之ヲ證スルニ餘リアラン。

本官曰、在東京ノ貴國公使ガ貴話ニ係ル勸告ヲ我政府ニ與ヘ、我政府ガ其好意ヲ謝シタルコトハ本官ノ初メテ聞ク所ナレドモ、或ハ其事實アリシナラン。然リ而シテ我國今般ノ要求ガ適和ノ度合ヲ超ユルモノナリトノ貴説ニ至テハ、趣ク本官ノ首肯シ能ハザル處ナリ。我國連戰連勝ノ結果何ヲ求メテモ殆ド之ヲ得ザルコトナカルベキ場合ニ於テ、其要求彼レガ如クナリシハ畢竟我政府ガ戰勝ノ勢ニ乘ジテ敢テ不當ノ條件ヲ強迫セザル明證ニシテ、歐洲ニ於テモ一般ノ輿論ハ日本ノ要求ヲ極メテ穩當公平ナルヲ承認スルモノ、如シ。是レ或ハ我政府ニ於テ貴國政府ノ好意ニ出デタル勸告ニ從ヒタル結果ナルヤモ知ルベカラズ。仍テ我政府ガ貴國ノ好意ヲ斟酌セザリシトノ一點ニ於テハ遺憾ナガラ本官ノ認ムル能ハザル處ナリ。將來又貴國ハ數年來常ニ我國ニ好意ヲ表セラレタルニヨリ、我ニ於テモ無二ノ良友トシテ常ニ貴國ニ依頼シタリ。而シテ貴國ガ三月六日ニ於テ我政府ニ勸告ヲ試ミラレタル一事ハ、必定好意ニ出デタルモノナルコト貴説ノ如クナラン。然ルニヨシヤ我政府ノ要求ニシテ多少貴國ノ意ニ滿タザル處アリトスルモ、今日露國ヲ助ケテ我ニ反對ナル地位ニ立タントセラル、ヲ以テ之ヲ看レバ、前日好意ノ方針ハ爰ニ一變シタルモノト見ルモ敢テ不當ノ事ト云フベカラズ。腹藏ナク申サバ貴説ノ謂ユル我國人ノ貴國ニ對スル不審ノ感情ハ本官ニ於テモ幾分カ之ヲ分タザルヲ得ザルナリ。

大使曰、否獨逸ノ貴國ニ對スル好意ハ決シテ變更シタルニアラズ。現ニ獨逸ガ三國ノ仲間ニ加ハリタレバコソ、彼等ノ要求遼東占領放棄ノ一點ニ止マレリ。若シ我國ニシテ之ニ加ハラザリシナラバ其要求ハ敢テ右ノ一事ニ止マラズシテ或ハ臺灣澎湖兩島ノ占有マデニモ及ビタルヤモ知ルベカラズ。然ルニ獨逸之ニ加ハリタル爲メ過當ノ要求ヲ押ヘ、遼東ノ一處ニ止ムルコトヲ得タリ。即チ獨逸加入ノ一事ハ列國ノ要求ヲ溫和ナラシムルコトヲ得タルモノナリ。仍テ貴國ハ獨逸ノ舉動ニ就キ利益ヲ得ラレタルナリ、決シテ不平ヲ唱ヘラルル理由アルベカラス。

本官曰、或ハ左ル事モアリシナラン。然レドモ反對ニ考フレバ獨逸ニシテ前日ノ如ク申立ノ主義ヲ守ラル、ニ於テハ或ハ他ノ二國ニ於テモ異議ヲ申立ツルマデニ至ラザリシナラン。獨逸ノ之ニ加盟セラレタルハ如何ニモ遺憾ニシテ且ツ甚ダ不審ナリ。抑々其真意如何、幸ニ拜承スルコトヲ得バ幸甚ナリ。

大使曰、我國ニ於テハ貴國ガ要求セラレタル通商上ノ讓與ニ付大分不平アルガ如シ。本官曰、夫ハ甚ダ其意ヲ得ザルコトナリ。我國通商上ノ要求ハ第一ニ歐洲各國ト同等ナル權利即チ最惠國ノ待遇ヲ受ケ、第二若干ノ新讓與ヲ得テ列國ト共ニ其利ヲ分タントスルニ過ギズ。而シテ其新讓與ノ多分ハ列國ガ從來清國政府ニ請求シタルニ拘ハラズ、

今日マデ其目的ヲ達セザリシモノニ係ルコトナレバ、平和條約中通商ニ關スル事項ハ列國ノ同情ヲコソ期シタレ、此點ニ就キ獨逸ガ多少反對センコトハ眞ニ豫想外ニシテ復タ更ニ其理由ヲ解スル能ハザル處ナリ。

大使曰、實ハ通商上ノ利害如何ヲ熟知セズ、何分貴國政府ガ平和條件ヲ公示セラレザルヨリ若干ノ疑念モ起リタルナラン。

本官曰、我國政府ハ列國政府ニ於テ平和條件ノ内示ヲ求メラルレバ喜シデ其乞ニ應ズベシ。但批准交換前ノ今日之ヲ公示スベキ場合ニアラザルハ申迄モナシ。獨逸政府ノ故障他ニ之レアラバ内承センコトヲ望ム。

大使ハ爰ニ於テ暫ク躊躇ノ後突然曰、貴官ハ長ク歐洲ニ在任セラレタルヤ。

本官曰、御承知ノ如ク本官ノ歐洲在任ハ僅々數月ニ過ギズ。

大使曰、若シ長ク歐洲ニ在任セラレタル後ハ列國運動ノ實際ニ通曉セラルベシ。歐洲ノ外交政治ハ仲々込ミ入りタルモノナリ。

本官曰、貴意ノアル處粗ボ了知セリ。本官ハ日清ノ事件ガ偶然ニモ歐洲列國間外交機略ノ口實トナリタルヲ大遺憾トス。

大使曰、前述ノ如キ事情ナルニヨリ、佛國ハヨシヤ其内ニ於テ貴國ニ對シ強迫ヲ試ム

ルコトヲ欲セザルモ、今更手ヲ引キテハ露國ノ歡心ヲ失ヒ彼レノ熱心セル露佛ノ Intention 爰ニ破裂センコトヲ恐ル。仍テ貴國ガ佛國ノ遂ニハ同盟ヨリ脱去センコトヲ希圖セラル、モ、佛國ハ其欲スルト否ラストニ論ナク、露國ト終始其運動ヲ共ニスベキハ誠ニ明瞭ナリ。而シテ露國ノ近況ハ如何ト云ニ貴國ノ遼東占有ニ反對スル感情ハ日々高マリ來ル實況ナリ。是レ貴國ノ深ク注意ヲ要スル點ナリ。仍テ貴國ノ爲メニ謀ルニ暫ラク列國ノ云フ所ニ從ヒ永久占有ノ事ヲ止メ、一時ノ占領ヲ以テ満足セラル、ルヲ得策トス。何ンゾ知ラン數年ノ後ニハ今日ノ三國同盟モ其跡ヲ絶チ、形勢ノ一變スルコトアラザルヲ。若シ今三國ノ希望ニ從ヒ假リニ永久占有ノ要求ヲ捨テ一時ノ占領トセラル、モ、他日之ヲ永久ノ占有ニ變スルノ機會ハ隨分出テ來ラザルニ限ラズ、暹羅ニ於ケル佛國ノ運動ナドハ貴國ノ爲メ參考ノ一材料トナスニ足ルモノナラズヤ。將又折角清國ト談判ノ末占領セラレタル權利ヲ空シク拋棄スルハ不名譽ナルニ付承諾スル能ハズトノ義ナレバ、償金ノ増額ヲ爲スナリ、又ハ他ノ方法ヲ求ムルナリ、何トカ補償ヲ得ルノ方法モ之レナキニハアラザルベシ。若シ其邊ニ付何か貴案アラバ内示セラレタシ。然ラバ自分ヨリ獨逸政府ヘ申立テ應分ノ盡力ヲ爲サシムルコトヲ勤ムベシ。

本官ノ聞ク所ニヨレハ清國皇帝ハ條約ヲ批准スベキ模様ナリ。然リ而シテ假令ヒ批准

濟トナルモ夫ガ爲メ三國ノ故障ハ止ムモノニアラズ、否ナ寧ロ批准濟ノ上ハ貴國ガ多少ノ讓歩ヲ爲サントスルモ其國民ニ對シ辯解ニ苦シムノ境遇ニ陥リ、一方ニハ三國ノ舉動ハ益々手強キ性質ヲ帶ビ來リ、從テ補償ヲ得ル相談等ハ之ヲ爲スノ期ニ後レテ結局空敷、遼東ヲ棄テザルベカラザルハ勿論、尙ホ場合ニヨリテハ其他ノ讓與ニモ影響ヲ及ボシ、究竟貴國ガ大勝利ニ依テ得タル收得ノ大半ヲ失フコトニ立至ルモ計リガタシ。是レ貴國ガ深ク注意セラルベキ點ナルベシ。

英國人ハ勘定高キモノナリ、今日ハ貴國ニ向ヒ好キ顔ヲ爲シラルモ内心ニテハ三國ノ勸告其效ヲ奏シ貴國ガ遼東ヲ棄テンコトヲ希望シ居ルナラン。此點モ貴國政府ノ注意スベキ點ナルベシ。

本官曰、一己ノ私見ニテハ我政府ハ俄ニ御忠告ニ從フ能ハザル理由ヲ有スベシ。且ツ假リニ友國ノ勸告ニ從ヒ多少讓歩ヲ爲スコトアリトスルモ、差掛リ居ル條約ノ批准ハ是非トモ先ヅ之ヲ濟マサルベカラズト思考ス。是レ本官ガ閣下ト其見ヲ異ニスル處ナリ。本官ト閣下トハ公務上何等ノ關係ヲ有セズ、全ク一私人ノ交際ニ止マル、仍テ本日ハ復藏ナク私見ヲ述ベタリ、從テ中ニハ無遠慮ノ事モアリタラン此處ハ宜敷御含ミアリタシ。

大使曰、素ヨリ然リ、拙者ニテモ全ク一私人ノ資格ニテ意見ヲ陳述シタルニ過ギズ。

本日ノ談話ハ何故ニ彼ヨリ之ヲ望ミタルヤ明瞭ナラズ。本官ガ過日來屢々當國ノ外務大臣ト會見スルコトヲ知り、英國ノ頼ムニ足ラザルヲ諷シテ本官ヲ動サン爲メナルカ、又ハ獨逸政府ガ其方針ヲ急變シタル爲メ彼ノ外務大臣ヨリ青木公使ヘ此ノ如キ内談ヲ試ムルコト仕惡キユヘ（是ハ青木公使ノ想像ナリ）本官ヲ經テ我政府ニ云ハシメント試ミタル譯カ。其真意料知スルニ由ナク候ヘ共、兎モ角本國政府ノ内訓ニ依リ面談ヲ求メタルモノナルベクト推察候ニ付、不取敢右談話ノ要領電稟致候處、本月二日京都發貴電ニテ獨逸大使ヘ我政府ノ三國政府ニ與ヘタル回答ヲ示シ、獨逸政府ヲシテ我回答ニ満足ヲ表セシムル様彼ヲシテ盡力セシムベキ旨御訓令相成候ニ付、即日再ビ該大使ニ面會ヲ求メ前意申入候處、當時彼ハ未ダ回答ノアリタルコトヲ知ラズ、從テ本國政府ノ意向ヲ知ラザリシモノト見エ、別段ノ談話ナクシテ相別レ候。然ルニ越ヘテ本月四日ニ至リ彼ヨリ面會ヲ求メ來候ニ付訪問候處、我政府ノ回答ハ到底三國政府ニ於テ之ヲ甘受シガタキニヨリ、旅順口ヲモ棄テ償金増額ノ補償ヲ以テ満足スベク、果シテ我政府ニ於テ右ノ讓合ヲ談ズルニ於テハ豫メ金額等ニ付キ我政府ト内議ヲ經タル末、三國政府ヨリ其交換ヲ我政府ニ申出デシメテモ可ナルニ付、談話ノ要領ヲ我政府ヘ電報シテ其再考ヲ促スベキ旨、或ハ好言ヲ以テシ或ハ強迫的言辭ヲ以テ頻リニ勸誘ヲ試ミ候處、其前青木公使ヨリ電報ニ

テ本月一日及二日ノ會見ニテ獨逸外務大臣ヨリ青木公使ニ對シ粗ボ同様ノ勸告アリタルトキ手強キ返答ヲナシ置キタル旨内報ヲ受居タルヲ以テ、多分青木公使ヲ説キ伏セ得ザルヨリ本官ヲ經テ我政府ヲ動サントスル趣向ナラント想像致候ニ付、本官ハ適當ノ挨拶ヲ爲シ結局我政府ハ此上讓歩スルコト能ハズト思考スルヲ以テ、電報ヲ發スルモ其效ナカルベシ。殊ニ今日ノ場合獨逸政府ヨリ帝國政府ニ云フ事アラバ青木公使ノ手ヲ經ルコソ至當ナルベシト相答ヘ勉メテ青木公使ノ舉動ト相反セザル様取計置候。

右及具報候敬具

明治廿八年五月十一日

在 英

特命全權公使 加藤高明印

外務大臣子爵 陸奧宗光殿

獨露佛聯合干涉ノ件

伊國外務大臣談話

高平駐伊公使報告

獨逸政府ニ於テ日清間和約ノ商業的條件ニ關シ謬見ヲ懷抱シ、我國ニ反對シテ歐洲諸國ヲ聯合シ外交的運動ヲ計畫セントスルノ舉動有之候ニ付、伊國政府ノ姿勢ヲ偵察シテ及電稟候様去月廿四月到達ノ電信ヲ以テ御訓示相成候ニ付、拙官ハ翌廿五日ヲ以テ外務大臣ヲ訪問致候處、同大臣ハ未ダ出省相成居不申候ニ付次官ニ面晤シ、先ヅ彼ノ和議條件ニ關シ歐洲諸國新聞ノ喧傳論難スル日清間攻守同盟ノ件及從價稅ヲ以テ定額稅ニ更換ノ件ヨリ說起シ、其全然無根ノ次第ヲ陳辯シ、右等ノ誤解ヨリ歐洲ノ諸友邦ヲシテ反對的ノ意思ヲ憾發セシムルハ甚ダ遺憾ニ有之候ニ付、其反對ノ趣意ハ實際商業的ナルヤ又或ハ別ニ政治的ノ原因アルヤ之ヲ確知スルコト緊要ニ有之旨申述候處、次官曰ク、本件ニ付テハ此程モ外務大臣ト談話セシガ獨逸ノ反對モ其

實商業的ニアラズシテ遼東半島ノ割讓ニアルガ如シ。拙官曰ク、或ハ然ラン若商業的ノ理由ニ依テ反對スルモノトスレバ本使ハ實ニ其根據ナキヲ論駁セザルベカラズ、從價稅ヲ以テ定額稅ニ更換スト云フノ一説ハ若シ果シテ事實ナリセバ、假令歐洲諸國ニ於テ最惠國條款ノ保障アルモ我國品ト同様ノ便利ヲ以テ其產品ヲ清國ニ輸入スル能ハザルノ虞ナキニ非ザレドモ（從價稅ヲ以テ定額稅ニ更換ノ浮説ニ付テハ閣下ヨリ四月廿一日ヲ以テ本件ハ若シ萬一事實ナリトスルモ歐洲諸國ハ最惠國條款ニ依リ之ニ均霑スルヲ得ル爲メ其商利ヲ損害スベカラザル旨御電報有之候得共、日本ニ於テ歐洲ニ反抗シテ支那ノ商權ヲ掌握セントスルトキハ商品ノ原價ニ應ジテ賦課スル所ノ從價稅ハ其數量ニ從フ所ノ定額稅ヨリ一層日本ノ爲ニ有利ナリトノ説ハ其實際ヲ得タルモノニ似タリ。故ニ清國ニ於テ從價稅施行ノ場合ニハ歐洲ノ貿易ハ日本ニ對シ不利ノ位置ニ陥ラザルヲ得ザルナリ）我國ニ於テハ毫モ各國ノ利益ニ反對シテ清國ノ商業ヲ獨占スルノ意思ヲ有セザルヲ以テ、如此條約ヲ締結セザルナリ。然ルニ歐洲ノ諸新聞中ニハ獨リ右様ノ謬説ヲ流布スルノミナラズ、甚シキニ至リテハ我國ニ於テ清國ノ新港ヲ開クモ歐洲諸國ニ於テハ到底日本人ト競争シテ其利益ヲ受クル能ハザル旨ヲ論ジ、以テ今般ノ和約ヲ非難スルモノアリ。是レ實ニ謂ハレナキノ事ナリ。元來我國ノ清國ニ於テ商業的ノ便利ヲ有スルハ第一ニ土壤近接ニシテ商品ノ運賃低小ナルコト、第二ニハ人民ノ生計少費ニシテ賃銀低廉ナルコト、第三ニハ銀貨

制度ノ爲メ商品安價ナルコト等ニシテ、到底歐洲商工業者ノ競争ヲ得ベカラザルハ勿論ナリト雖モ、是レ地理的及經濟的ノ議論ニシテ事物ノ自然ニ由來スル所ノ結果ナリ。然ルニ是レガ歐洲諸國ヨリ政治的ノ反抗ヲ受クルトキハ我日本人種ハ天地間ニ於テ棲息スル所ナキニ至ルベシ。然レドモ他國ノ反抗ハ今深ク論ズルヲ要セズ、本使ノ願フ所ハ英國ニ於テ今日モ尙ホ交戰中ノ如ク我國ニ對シテ友愛的姿勢 (benevolent attitude) ヲ維持セラル、コトヲ本國政府ニ電稟スルヲ得ントスルニ在ルナリ。次官曰ク、目下我國ノ姿勢ニ於テ毫モ變更ノ理由ヲ見ザレドモ將來若シ他國ノ協議ヲ受クルニ至リ我政府ハ何等ノ方向ヲ取ルベキヤハ本官ノ言フ能ハザル所ナレバ、本日大臣ノ出省ヲ俟テ直ニ其意見ヲ問フベキニ付午後四時ヲ以テ再ビ來訪ヲ希望ス云々。依テ拙官ハ同日同刻再ビ出省致候處、次官出來リ此度ハ大臣自ラ面會可相成旨申聞候ニ付前文陳述ノ趣意ヲ以テ更ニ面陳致候上、先便內信ヲ以テ不取敢具報致置候通、今般獨佛露聯合成立ノ內情及伊政府ノ姿勢等ニ付大臣ヨリ縷々懇話有之候ニ付、歸館ノ上第四十九號及第五十號ノ電信ヲ以テ其概要ヲ具報致置候處、右內信付屬書中縷述致候通、伊政府ニ於テハ我依頼次第ニ依リテハ英米兩國ト共同シテ帝國政府ノ利益ノ爲ニ運動セントスルノ底意有之上ハ、假令閣下ノ御回訓ヲ得ザルモ時機切迫ノ折柄伊政府ヲシテ龍動及華盛頓駐劄ノ伊國大使ニ發電シテ其取ル所ノ姿勢如何ヲ通示セシメ、尙ホ英米兩政府ニモ之ヲ通牒セシムルコト必要ノ手段ト

相心得候ニ付、翌廿六日午前外務省ニ出頭致候得共、大臣未ダ出省相成居不申候ニ付次官ニ面會シテ右ノ趣依頼致置候處、歸館ノ後間モナク次官ヨリ左ノ通申來候。

We have telegraphed to London, to Washington and to Tokio; and our Minister in Tokio is authorized to concert with his colleagues of England and of the United States for employing conciliating.

依テ拙官ハ直ニ第五十二號ノ電信ヲ以テ之ヲ閣下ニ具報シ、英米駐劄帝國公使ニモ電報致置候。其後去月廿八日ニ至リ第五十號ノ拙電ニ對シ御回電有之、當國外務大臣ニ面會之上伊政府ヲシテ英政府ヲ懲慚シ我爲メニ助力スルノ決斷ヲ取ラシメ候様依頼可致旨御訓旨有之候ニ付、早速外務大臣ヲ訪問シテ懇談致候處、同大臣ノ意思ニ於テハ毫モ前日ト變更セルノ狀無之候得共、米政府ニ於テハ兵力ヲ以テ外國ノ事ニ干涉スルコトハ古來因襲ノ政略(tradition)ニ反對致候旨國務卿ヨリ伊國大使ニ談話相成候趣ニテ、同大臣モ稍失望ノ有様ニ有之、徐々ニ說出シテ曰ク、敢テ貴政府ノ依頼ヲ謝絶スルノ意ニアラザレドモ、今日ニ於テハ英政府モ歐洲諸大國間ノ政治的運動ノ實況ヲ熟案スルコト不容疑、然ルニ同政府自身ニテ任意的ノ決斷ヲ以テ貴國ニ助力セザルニ當リ、伊政府ノ懲慚ニ應ジテ其運動ノ方針ヲ一決スルハ到底彼ノ怯弱ニシテ決斷的ナルローズベリー内閣ニ希望シ難キニ付、其次第ハ貴政府ニ於テ宜シク酌量相成度、且伊

政府ノ方向モ貴公使ヲシテ誤解ナカラシムル爲メ明白ニ一言セザルベカラズ。即チ本件ニ關シ此程當政府ヨリ英政府ニ向テ平和ヲ恢復スル爲ニハ英政府ト同一ノ針路ヲ取テ運動スベキ旨ヲ通牒セルノ一時ニ在リ云々。且右ノ外同大臣ハ重ネテ露國ノ永興灣ニ垂涎ノ趣ヲ談シ、到底互讓手段ノ不得已コトヲ寓意相成、若シ我國ニテ露ヲシテ首肯セシムルヲ得バ、獨ハ自然ニ緘黙スベキ旨ヲモ懇話有之、去廿五日同大臣ヨリ内話ノ趣トハ其意氣ニ於テハ殆ンド主動的ト受動的トノ差異有之候得共、伊政府ニ於テモ此兩三日間龍動及華盛頓ヲ經由シ英米兩政府ト意見ヲ交換セルコト相違無之、其上ニテ同大臣ハ米政府ノ武裝的干涉ヲ承諾セザルコト、及英政府ノ意氣活潑ナラザルコトヲ確知相成候事ト存候間、拙官モ伊政府ニ對シテ此上有効ノ助力ヲ強求難致、遂ニ程能ク話頭ヲ纏メテ歸館ノ上第五十三號ノ電信ヲ發シ、當日大臣ト會晤ノ概況ヲ具報致候次第ニ有之候。右ノ外英政府ノ意向ヲ探知スルハ拙官ノ職分ニハ無之候得共、當府駐劄フオールド氏ハ平生親交ノ間柄ニ有之候ニ付、去廿八日外務大臣ニ面會ノ前同大使ヲ訪問シ獨逸政府ノ舉動ニ談及致候處、先般亞歷山三世帝崩御ノ節英太子露ニ至リ遂ニ今帝ト熟議シ、パミル事件ノ條約ヲ締結セル爲メ、獨政府ニテ英露ノ交情稍親密ニ赴クヲ見テ不快ノ念ヲ發シタルモ、今般獨露ノ聯合ヲ成立セシメタル一原因ニシテ、詰リ獨ノ真意ハ英ヲ疎外セントスルモノニ可有之旨内話相成候ニ付、拙官ハ話頭更ニ一步ヲ進メ獨露佛聯合シテ日清間ノ和議ニ干

渉スルニ當リ、貴國ノミ獨リ超然トシテ傍觀相成其干涉ヲ抑制セラレザルハ果シテ貴國ノ利益ニ可有之哉ト相尋候處、余ハ英人ナリ (I am English man) 故ニ其眞面目ヲ語ルベシト、同大使ハ英國外交官組織ノ完備ナルコトヲ話出シ各地ノ事情ハ其地駐劄ノ大使公使ヨリ細大報告シ、外務大臣ハ之ニ由テ其政略ノ方針ヲ決定スルヲ以テ獨逸ニ關スルコトハ柏林ノ大使ヨリ精密ニ報告スルコト疑ナケレバ、余ヨリ此事ヲ論出スルノ必要ナキノミナラズ、若シ之ヲ論出スルトキハ却テ事ヲ誤ルノ憂アル旨等縷々懇話有之、英政府ハ獨ノ陰謀ヲ看破スルモ直ニ之ニ反抗シテ英露ノ關係ヲ破ランコト無覺束被存候間、翌廿九日第五十四號電信ニテ右ノ趣ヲモ御參考ノ爲メ具報致候次第ニ有之候。

之ヲ要スルニ本件ニ付テハ已ニ帝國政府ニ於テ獨露佛聯合干涉ノ提議ニ御回答相成候趣御電報有之、且日清間和約モ清帝ノ批准ヲ經タル旨御電達相成候ニ付テハ、最早過去ノ事ニ付縷陳スルノ必要無之候得共、伊政府ニ於テ其姿勢上前後多少ノ差異アルニ拘ハラズ、斷然意ヲ決シテ三國同盟ノ盟主タル獨逸皇帝ノ提議ニ係ル聯合干涉ヲ謝絶シ、爲メニ露國ノ感情ヲ損傷シタルヲ以テ目下當府ノ主立タル新聞紙ハ露國新聞ノ攻撃ニ對シテ孜孜辨疏スルノ有様ニ有之、佛國トノ交際モ近來稍回復ノ狀アリシニ拘ハラズ、今般ノ事件ノ爲メ多少後退ノ結果ヲ表シ候儀ト存候間、伊政府ニ於テ是等ノ不利ヲ顧ミズ始終我國ニ對シ好意ヲ一貫シ巍然動かザルノ事實

ハ我帝國政府ニ於テ宜シク御記憶ノ上御承認相成可然儀ト存候。
右具報候敬具

明治廿八年五月五日

在 伊

特命全權公使 高平小五郎印

外務大臣子爵 陸奧宗光殿

遼東一件ニ付露國政府ノ故障

英國政府へ通知

機密第二十五號

遼東一件ニ付帝國政府ノ申出ニ對シ露國政府故障ニ關スル在露帝國公使具申ノ主要、本官ノ見込ヲ以テ當國政府へ通知スベキ旨本月三日露國經由貴電接受候ニ付、昨七日外務省ニ出頭候處當日ハ外務大臣差支有之外務次官補ベルチー氏ニ面會大要相話申候處同次官補云ヘラク、右ニ付貴國政府ニハ英國政府ノ助言ヲ得ラレ度御趣意ニ候哉ト相尋候ニ付、其議ハ別段訓令無之ニ付敢テ本官ヨリ請求ハ不致候ヘ共、若シ外務大臣ニ於テ何等御意見モ有之候ハ、本官喜ンデ承ハリ吾政府ニ通知スベキ旨相答候處、同次官補ハ委細承知候トテ當日ハ引取候此段申進

候。敬具

明治二十八年八月八日

在 英

特命全權公使 加藤 高明

外務大臣臨時代理侯爵 西園寺公望殿

追而本文談話中外務次官ハ露國政府ガ斯ク種々ノ難題ヲ貴政府へ申込ムハ畢竟貴政府ヲ苦メテ朝鮮ノ始末ニ付露國ト「アルダルスタンヂング」ヲ付クルノ已ムヲ得ザルヲ感ゼシムル策ニ外ナラズ、貴國政府ニ於テハ此奸策ニ罹ラレザランコトヲ希望スナリト申居候右申添候也。

遼東問題ニ關シ伍廷芳并英公使ノ談話 并電信行違ノ儀申進ノ件

機密第四十二號信

九月九日附機密第四十一號信中ニ言及ノ通ニ、李鴻章着京後伍廷芳ガ本使ノ病氣見舞ノ爲メ數回當館ニ來リ長時間致談話候モ、其實ハ李鴻章ノ意ヲ受ケテ陰ニ李ノ所望ヲ本使ノ思想中ニ注入スル爲メニ來リタルハ瞭然タル事ニテ、其主旨ハ遼東ノ處分ニ付多額ノ金員ヲ拂フコトハ能ハザルモ外ニ何ニカ報酬トシテ出ス事ハ差支ナシ、開港場ヲ増セバ増ス程清國ノ利益トナリ、日本人ニ鐵道敷設ヲ許スモ亦タ然ルガ故ニ是等ノ事ニテ何ニカ金額ニ代ユベキ事ノ考案アレバ兩便ノ利益ナリ。假令ヘ北京ヲ開クニ至ルモ清國ノ爲メニ毫モ害ナクシテ清廷ノ頑夢ヲ醒ス爲メハ却テ甚ダ捷徑ト爲ルナリト迄申出デ、能ク其内意ヲ通ジ得タリト見タル後ニ、李鴻章

ヨリ遼東問題ヲ直接ニ決定センコトヲ伊藤侯ニ通ゼン事ヲ依頼シタルハ先日第四十五號電報ニテ申進ジタル如クニ候。伍氏ハ本使ニ向テハ清廷ニ拂ヒ得ベキ金額ノ事ハ何トモ申サズ候ヘ共、英公使ニ向テハ一千五百萬乃至二千萬兩ハ拂フテモ宜シト考ヘシムル様ニ談話シタリト思ハレ候。何トナレバ英公使ガ本使ヲ訪ヒ遼東問題ヲ早ク決スルノ得策ナルヲ説キ、三國ヨリ三千萬兩ノ賠償ヲ申込ミ清國ガ之ヲ拒絶シタル事ヲ告ゲタル時、清國ハ一千五百萬乃至二千萬兩ノ賠償ヲ爲ス事ハ別ニ確實ナル根據ハナケレド、予ハ必ズ清國ノ承諾スルコトヲ信ズト申述候。其翌日伍廷芳復タ本館ニ來訪シタル故、本使ハ彼レニ向ヒ本使ハ英國公使ヨリ如斯ノ風説ヲ「コンフィデンシャル」ニ聞キタルガ、足下ハ之ヲ聞キタル事アルカト突然ト尋ネ出タルニ、伍氏ハ驚キタル顔色ニテ英公使ハ最早(already)ソレヲ閣下ニ告ゲタル事ト申候、様子音聲並ニ伍氏ガ英公使ヲ訪問シタル時日等ヲ推シ、必ラズ伍氏ガソレトナク英公使ヲシテ本使ニ傳ヘシメ、以テ伍氏ガ自カラ本使ニ談ジタル事件ノ足ラザル所ノ補充ニ供シタル事ハ十中八九疑ヒナク思ハレ候。果シテ然ラバ如斯キ重大ノ事ヲ彼自身ノ責任ヲ以テ云フ筈ナク、必ラズ李氏ノ内命ニ由リタル事亦タコレ疑ヒ無之候。儲清廷若シ一偏ニ露佛ニ依頼スルモノナラバ強テ直接ノ談判ヲ急ギ候譯ハ無之、露佛ガ爲スニ任セテ其結果ヲ待テ居候テ可ナルヲ却テ直接ノ談判ヲ頻リニ差急ギ候譯ハ、露國ノ周旋ニ報ズル爲メニ公債募集ノ要求ニ應ズレバ彼ハ却テ之ヲ報酬ト

遼東問題ニ付伍廷芳及英公使ノ談話

五二五

見做ス低利ノ金ヲ貸シタル事ヲ恩ニ着セテ、又更ニ求ムル所アラントスル等報酬却テ新義務ヲ生ズル如キ後來ノ甚ダ恐ルベキ事ヲ覺リ、成丈ケ彼等ノ手ヲ離レテ事ノ局ヲ結バントスルノ意ニ外ナラズト考候。李ガ朝鮮ヲ各國共同保護ノ下ニ置カンコトヲ申出候モ、日本ガ彼國ヲ取ル事ヲ恐ルルヨリモ寧ロ露國ガ之ヲ取り、從テ滿洲地方形勢ノ益々危キニ臨ムヲ恐ル、ニ由リ候事ハ彼ガ説ク所ニテ現然タル事ニ候。伍廷芳ノ談ズル所英公使ノ話スル所、彼等ミナ深ク「コムミット」スルコトヲ恐レテ唯本使ノ意見ヲ造成スルノ材料ト成ル様ニ談話致候故コレヲ以テ直チニ李鴻章ノ意見ナリト確言スル事難ク候得共、首尾顛末ヲ相照シテ大要ヲ舉グレバ過日四十二號ノ電報ニテ申進シタル如クニ候右申進候敬具。

明治廿八年九月十四日

特命全權公使 林

董

外務大臣臨時代理侯爵 西園寺公望殿

遼東問題ニ關シ電信行違ノ儀申進之件

遼東還附ノ條約ニ就テハ内田書記官携帶ノ訓令有之候處、同官來着ノ兩日前本使李鴻章ト談話致候件々モ有之、又々李氏ノ内命ヲ受ケタリト覺シキ伍廷芳ガ數回來談ノ義モ有之候間、去ル十一日長文ノ電報ヲ以テ意見具申候。然ルニ十二日附電報ニテ御通告ノ旨有之候處、送電上ノ錯誤ノ爲メニ暗號文字明白ナラズ on receipt of the 云々ノ文字ヲ大ヒニ反對ノ意味ナル in spite of ト致開讀候。之ニ由レバ三千萬兩ノ償金ヲ索ムルハ日本政府ノ隨意ナレドモ、通商條約決定並ニ遼東還附ノ期ヲ以テ其條件ト爲スヲ得ズト云フ主旨ニ歸スル者ニテ、其前三國ヨリ清廷ニ勸告スルニ此額ノ償金ヲ拂フ事ヲ以テシ、清廷ニテ之ヲ拒否シタリト云フ風説ト合セ考フレバ、彼レ只前後ノ言辭ヲ同一ニスル爲メニ今復々我ニ對シ此額ヲ申出デタルノミニテ、其意ハ我兵ノ遼東撤去ヲ促スニ過ギズ、頗ル我ヲ蔑視シタル申込ナリト勘考致居候處、十四日ニ至リ遼東還附ノ條件ニ付三國ニ熟談ヲ遂グルガ故ニ、之ヲ清廷ニ露洩スル勿レト云フ貴訓ニ接シ更ニ疑惑ヲ生ジ候モ、遼東ヲ以テ永久ノ所領ト爲サル事ハ三國ニ對シ約束スル所ナレドモ、撤兵ヲ以テ報酬償金ノ條件ト爲ス事ハ我ガ權内ニ在ル事ニテ、三國ニ關スル所ニ無

之、コレヲ以テ條件ト爲セバ清廷ト直接ニ談判スルトモ、我が所望ハ達スル事ヲ得ベキニ何故ニ右ノ如キ御詮議ニ相成候事歟ト存ジ、第五十號電報ニテ意見上申致候義ニ有之候。然ルニ十六日附ヲ以テ詳細ナル貴電ニ接シ前電報ノ暗號ヲ正實ニ開讀シ得ルト共ニ、事件ノ顛末明瞭ニ相成候。但シ現ニ清廷ハ日本ト直接ノ開談ヲ望ミ居リ、李鴻章ヨリハ既ニ本使ヲ經テ伊藤侯ヘ申込ミモ有之、其回答ヲ待チ居リ候事故、目今ノ所三國ノ勸告ニ同意スル事ハ有之間敷ト存候。電信上行違ノ事件ト併セテ此段及報告候右申進候敬具。

明治廿八年九月十八日

特命全權公使 林 董

外務大臣臨時代理侯爵 西園寺公望殿

五月三十日露佛獨三國公使提案ニ對シ 彼此意見交換云々閣議

明治廿八年六月四日

內閣總理大臣

外務大臣○海軍大臣○文部大臣○遞信大臣○內務大臣○陸軍大臣○司法大臣○農商務大臣○黑田議長○

五月三十日露佛獨三國公使提案ノ件ニ對シテハ外務大臣提案ヲ基礎トシ、先ヅ露佛獨三國公使ト談判シ彼此意見ヲ交換シタル上、猶本提案ニ多少ノ修正ヲ爲スベシト閣議決定相成然ルベシ。

去月三十日露獨佛三國公使本大臣ニ面晤シ其各自ノ政府ヨリノ訓令ニ從ヒ左記ノ三ヶ條ヲ提陳セリ。

一、遼東半島拋棄ノ報償トシテ日本政府ハ何程ノ償金ヲ清國政府ヘ請求セラル、積ナルヤ。

二、目下遼東半島ニ駐留ノ兵ハ幾時頃迄ニ引揚ゲラル、見込ナルヤ。

三、三國政府ハ臺灣清國間海峽ノ航海ヲ自由ナラシムル事ニ付日本政府ヨリ保證ヲ得タシ。

(此條ニ付テハ彼此問答ノ末戰時平時ニ拘ハラズ、砲臺等ヲ築キテ該海峽航海ノ自由ヲ妨碍セザルコト、及臺灣澎湖島ヲ將來決シテ他國ニ讓與セザルコトノ保證ヲ得置度トノ意味ヲモ含蓄シ居ル旨彼ヨリ開陳セリ)

就テハ右三ヶ條ニ對シ別紙ノ通前記三國政府ニ宣言致度、尤實際右宣言ヲ爲スニ當リ談判ニ涉リテ多少取捨増減ヲ加フル場合モ可有之ニ付、右ニ關スル一切ノ全權ヲ豫メ本大臣ニ御委任相成被置候様致度。右乞閣議

明治二十八年六月四日

外務大臣子爵 陸 奧 宗 光 印

內閣總理大臣伯爵 伊藤博文殿

宣 言 案

今回ノ交戰ヨリ生ズルトコロノ種々ノ問題ヲ整理スルニ當リ、日本國ニ於テハ各般ノ權利及利害ヲ調和セント欲スル外更ラニ他意アルコトナシ。然リ而シテ日本國政府ハ露獨佛三國モ亦タ同一ナル寬厚ノ目的ヲ有スルモノト認メ、且ツ速ニ前記ノ問題ヲ處理シ之ヲ終了セシメント欲スルコトニ就キテハ、三國モ亦タ日本國ト其希望ヲ一ニシタルモノト信ズルガ故ニ、日本國政府ニ於テハ遼東半島ノ永久拋棄ノ件ニ付キ近日開カルベキ談判中、若シ不幸ニシテ清國ノ意嚮ガ該希望ヲ達スルノ障碍ト爲ルノ場合ニ臨マバ完全ナル折合ヲ來ス爲メ、右三國ノ友誼上ノ援助ニ依頼シ得ベキコトヲ望ム。因テ三國ニ於テ日本國ノ意ノアルトコロヲ確知シ得ンカ帝國政府ハ腹藏ナク左ノ宣言ヲ爲ス。

(一) 遼東半島ヲ永久ニ拋棄スル報酬トシテ清國ニ對シ要求スベキ償金ハ庫平銀一億兩ノ高ヲ超過セザルベシ。

(二) 日本國ノ遼東半島ノ一時占領ハ約定ノ償金ノ支拂ヲ了スル時、若クハ右支拂ノ爲メ清國ヨリ別ニ満足ナル財源アル擔保ヲ與フル時ニ於テ停止スベシ。

(三) 日本國ニ於テハ清國ト臺灣ノ間ニ在ル海峽ハ純然萬國航通ノ公路ト認ム。隨テ該海峽

ハ日本國ガ獨リ専用シ若クハ管轄スルノ限リニアラズ。因テ若シ三國ニ於テ之ヲ望メバ日本國ハ清國ニ向テ通商航海條約（下ノ關係約中該條約ヲ速ニ締結スルコトヲ規定セリ）中ヘ該海峽ノ自由航通ヲ各國ノ船艦ニ向テ擔保スルノ一項ヲ挿入スベキコトヲ提議シ、且ツ日本國ハ何時モ此宣言ヲ履行スルノ地位ニ立タンガ爲メニ、該海峽ニ接シテ清國ヨリ日本國ヘ割讓シタル土地ハ永久之ヲ他ニ讓與セザルベキコトヲ明言シ、以テ本宣言ヲ確固ナラシムルニ躊躇セザルナリ。

參 考

遼東半島ヲ拋棄スルノ報酬トシテ日本國ヨリ清國ニ向テ正當ニ要求スルヲ得ベキ償金額ノ件ニ關聯シテ勘考ニ付スベキ諸點中重要ノモノヲ列記スルコト左ノ如シ。

- (一) 償金支拂ノ期限及右支拂ノ抵當。
- (二) 旅順口及大連灣ノ砲壘ノ處分並ニ將來ノ爲メ本件ニ關スル規定。
- (三) 拋棄シタル邦土ニ於テ外國人ノ居住通商製造及工業ノ爲メ開放スベキ地域ヲ定ムル件。
- (四) 拋棄地ノ何レノ港口ヲ外國通商ノ爲メニ開カシムベキヤノ問題。

(五) 遼東半島ニ於テ已ニ定業ヲ營ムトコロノ日本國臣民ノ保護ノ爲メ約款ヲ設クルコト。

(六) 拋棄地ニ於ケル日本國人ノ墓地ニ對シ汚辱ヲ加ヘシムルコトナカラシムベキ爲メノ擔保。

(七) 數多ノ清國人ニシテ或ハ寧ロ日本國管轄ノ下ニ立タント欲スル旨ヲ公言シ、或ハ衣服ヲ改メ辨髮ヲ斷テ以テ日本國ヘ歸化ヲ求ムルノ意ヲ表シタル者ノ保護。

外乙三三三

明治廿八年六月廿六日

- 内閣總理大臣(花押)
- 内閣書記官(多田)(柴田)
- 内閣書記官長(花押)
- 外務大臣(花押)
- 大藏大臣(花押)
- 海軍大臣(花押)
- 文部大臣(花押)
- 遞信大臣(花押)
- 内務大臣(花押)
- 陸軍大臣
- 司法大臣(花押)
- 農商務大臣(印)
- 黒田議長(花押)

外務大臣進達、在露西公使ヨリ露佛獨三國勸告ノ理由ニ付、露國外務省ノ機關新聞へ掲載ノ論說ニ關スル報告。
右回覽ニ供ス。

送第九一號

露佛獨三國勸告ノ理由ニ付、露國外務省ノ機關新聞へ掲載ノ論說、別紙ノ通在露西公使ヨリ報告有之候間、爲御參考右寫差進候也。

明治二十八年六月二十五日

外務大臣臨時代理

文部大臣侯爵 西園寺公望印

内閣總理大臣伯爵 伊藤博文殿

露國外務省機關新聞ノ件

露國外務省ノ機關新聞ナル「ジュールナル、サン、ペテルブルグ」ハ、五月三日發行ノ紙上ニ於テ露佛獨三國勸告ノ理由ヲ左ノ如ク論載致候。

「日清交戦ノ最初ニ於テ、本新聞ハ絶東ニ於ケル露國ノ利益上、吾人ノ執ルベキ意向ヲ論ズルニ當リ、戦争ノ結果如何ヲ問ハズ、清國大陸ニ於ケル境地ノ現形ヲ保存スルハ、吾人ノ主張スベキ政略上ノ一要件タルコトヲ指定セリ。爾來日本軍事上ノ進歩ニ對スル清國ノ無勢力ト、日本ノ大捷及之ニ由リ生ジタルノ事迹ハ、馬關條約中ニ明瞭ナリ。

日本ハ滿洲ノ東南部ヲ併合シ、此新領地ト今後其專領ニ歸スベキ海面トノ間ニ朝鮮ヲ封鎖シ、同國ノ獨立ヲ皆無ニ變シ、單ニ之ヲシテ名義上ニ止マラシムルハ何人ト雖トモ之ヲ認メザルハナシ。日本ハ遼東灣上ノ主宰ト爲リ、北京平原ヲ統制スルニ足ルノ要衝ヲ占ムルヲ以テ、遠カラズ清國首都ノ鎖鑰ヲ其掌中ニ握ルニ至ルベシ。是ニ於テカ日本ノ名譽心ハ絶東諸國ノ均勢ヲ破ルノ危機ヲ醸スモノナリト斷言スルヲ得ベク、歐洲諸國モ亦タ各自ノ利益ヲ傍觀默過スルヲ得ザルナリ。

歐洲ト絶東諸國間ノ交通ハ遂日頻繁ニ赴キ、既ニ歐洲諸國ノ二三ハ同地方ニ於テ永久ノ施設ヲ有セリ。露國ニ取テハ太平洋ニ瀕スル領土ハ、日清争鬭ノ土地ニ近接シ、而シテ其近距離モ亦タ「シベリヤ」鐵道ノ布設ト共ニ、更ニ一層短縮スルニ至ルベシ。佛國ニ在テハ印度支那ニ於ケル屬地清國ト接壤スルヲ以テ、其境上ニ濃烈ナル變動及危險ヲ醸成スベキ禍根ハ、悉ク之ヲ芟除スルコト最モ必要ナルベク、獨國ニ於テモ近年同地方ニ於ケル貿易ノ擴張ヲ熱望シ、自國民ノ利益及施設ヲシテ安全ナラシムルニ急々タルヲ以テ、之ガ障碍トナルベキ變動ハ總テ之ヲ排除スルノ必要ヲ感ズベシ。然ルニ若シ日本人ガ戦捷ノ後、進略的精神ヲ携來シテ大陸ニ割據スルニ至ラバ、前記ノ如キ變動ヲ來スハ勿論、日本人ノ進略主義ハ現時ノ領主ナル清國人ヲシテ之ニ對シ益々憎惡ノ念ヲ深カラシムベシ。

今ヤ露佛獨三國ハ本問題ニ關スル意見ヲ日本政府ニ通牒シ、同政府ヲシテ其提議ニ尊敬ヲ加ヘシムルヲ得ベシト雖トモ、日本ヲシテ捷戦ノ結果ヲ失ハシムルノ意思ナキノミナラズ、同國ガ歐洲ノ文明ヲ採リ、如此キ短少ナル歲月間ニ、斯ク驚クベキ進歩ヲ爲シタルハ、歐洲諸國ノ共ニ愉快トスルコトコナリ。然レドモ日本ハ其進歩如何ニ著大ナリトスルモ、若シ歐洲列國ノ協和ヲ支持スルノ主義ヲ遵奉スルニ非ザレバ、如此進歩モ早

晩水泡ニ歸スルノ時アラン。抑モ此主義ノ要點ハ、列國各其固有ノ利益ヲ犠牲ニ供セズ、之ヲ保護スルノ權利義務ヲ維持スルト同時ニ、他國ノ利益ヲモ相當ノ區域迄折衷セザルベカラザルニ在リ。故ニ此主義ハ常ニ平和ノ擔保ト爲リ、勞力及智識ノ進歩ト共ニ、列國相互ノ利害益々關聯スルニ從ヒ、漸次發達シ來レルモノナリ。殊ニ露國ハ此主義ヲ實行シ、先帝ハ既ニ平和ノ維持者ナル尊稱ヲ得ラルルニ至レリ。如此ニシテ露國ハ此方針ニ基キ前進スルノ決意ヲ抱持スルガ故、他國ヲシテ自國ノ實行シタル中庸ノ模型ヲ遵守セシメ得ルモノト信ゼリ。

露國ハ此主義ニ基キ、意見ヲ同フスル佛獨兩國ト協同セシト雖トモ、毫末モ日本ノ正當利益ヲ損傷セントスルノ意思ナキ而已ナラズ、常ニ之ト隣好ヲ保持スルコトヲ勉メタリ。只ダ日本ガ頻リニ前進シ、早晚其國力ト將來ヲ損失スベキ危險ニ赴クノ途上ニ於テ、之ヲ遮斷シタル歐洲諸國ハ、同國ノ爲メ非常ノ効勞ヲ現ハシタルコトハ、日本ニ於テ戰爭ノ熱情冷却スルノ時ニ至リ、始メテ之ヲ認識スルナラン。況ンヤ此程同國皇帝ハ最近ノ勅詔中ニ、最モ賢明ナル言語ヲ發セラレタルニ於テオヤ

同新聞ハ引繼キ五月六日發行ノ號外ニ於テ、日本帝國政府ハ露佛獨三國ノ友誼上ノ勸告ニ從ヒ、フエンチエン半島ノ確定占領ヲ拋棄スルコトヲ約諾セシ旨ヲ掲ゲ、尙ホ翌七日發行ノ同

紙上ニ於テ左ノ如ク掲載候。

「昨日發行本新聞號外ノ冒頭ニ、絶東ノ情勢ニ關スル杞憂ヲ消却スル一記事ヲ掲載セリ。即チ日本ハ露佛獨三國ノ友誼上ニ基ク勸告ヲ容シ、「フエンチエン」半島ヲ併合スルノ念ヲ拋棄セリ。前記三國ノ勸告ニ關スル理由ハ、既ニ過日發行ノ本紙上ニ説明セルヲ以テ、茲ニ再言スルノ要ナシ。只ダ左ノ一事ヲ記述セズ。即チ今回日本ノ執リタル賢明ナル決意ハ、戰捷ニ由リ占有シタル地位ヲシテ益々鞏固ナラシメ、文明諸國ヲシテ日本ニ尊敬ヲ表セシムルニ至ル。今ヤ歐洲諸國ノ望ムトコロハ、日本ガ速カニ戰爭ニ由リ受ケタル瘡痍ヲ全治シ、内政ノ整理ト國力ノ發達ニ從事シ、以テ宇内一般ノ進歩ニ對シ、益々裨益ヲ與フルニ在リ」

右御參考迄抄譯差出候。尙ホ詳細ノ儀ハ別紙該新聞切抜ニテ御承悉相成度候。敬具

明治二十八年五月十日

在 露 特命全權公使 西 德二郎

外務大臣子爵 陸奥宗光殿 (別紙新聞切抜略ス)

外乙三四

明治廿八年六月廿六日

- 内閣總理大臣
- 内閣書記官(多田)(柴田)
- 内閣書記官長(花押)
- 外務大臣(花押) 大藏大臣(花押) 海軍大臣(花押) 文部大臣(花押)
- 遞信大臣(花押) 内務大臣(花押) 陸軍大臣 司法大臣(花押)
- 農商務大臣(印) 黒田議長(花押)

外務大臣進達在露西公使ヨリ馬關條約及露佛獨三國勸告ニ關シ露國諸新聞ノ意向ニ付キ報告
右回覽ニ供ス

送第九二號

馬關條約及露佛獨三國勸告ニ關シ、露國諸新聞ノ意向ニ付、別紙ノ通在露西公使ヨリ報告有
之候間、爲御參考右寫差進候也。

明治二十八年六月二十五日

外務大臣臨時代理

文部大臣侯爵 西園寺公望印

内閣總理大臣伯爵 伊藤博文殿

馬關條約及露佛獨三國ノ共同干涉ニ關スル 露國諸新聞ノ意向

當國諸新聞ハ客月中旬即チ馬關條約ノ調印近日ニ迫レリトノ電報到達セシ頃ヨリ、該條約ニ關スル種々ノ論評ヲ掲ゲ始メ、「ノウオスチ」新聞ハ四月十八日ノ紙上ニ於テ、獨國ノ意向上急遽ナル變化ヲ生ジタルハ、前清國駐劄獨公使ブランド氏大ニ與テ力アリト説起シ、同氏ヲ以テ絶東ノ事情ニ通曉スル大家ト稱揚シ、同氏ヨリ獨帝へ提出シタル報告及其著述中ニ説ケル、「歐洲ノ爲メ恐ルベキ絶東ノ邦國ハ寧ロ日本ニシテ、清國ニ非ラズ」トノ意見ヲ轉載利用シテ、我邦攻撃ノ材料ト爲シ、各國共同干涉ノ必要ヲ主張シ、併セテ其持論ナル清國分配問題ニ論及セリ。其後馬關條約ノ調印愈々結了セリトノ風評世間ニ播布スルヤ、「ノウオエヴレミヤ」新聞ハ四月十九日ノ紙上ニ於テ、條約ノ條件ヲ遂叙シ、遼東半島ノ讓與ニ關スルモノヲ除クノ外、總テ溫和ノ條件ノミナリト謂フコトヲ得ベシ。現ニ臺灣ノ讓與ハ最初ヨリ到底免ルベカラザルモノニシテ、戰債ノ金額モ亦割合ニ輕易ナリ。且ツ萬國貿易ノ爲メ、更ニ清國ヲシテ五港ヲ開カシ

メタルハ、歐洲諸國モ一般其利益ニ均霑スルコトナレバ、獨リ日本ガ特利ヲ專有スルノ理ナシ。只ダ遼東半島ノ讓與ニ關シテハ默止スベカラザルモノアリト雖モ、追テ確報ヲ得タルノ後ニ非ラザレバ意見ヲ吐露シ難シト説ケリ。續テ該條約調印ノ確報ヲ接收スルヤ、同新聞ハ四月二十日ノ社説ニ於テ、日本ニ遼東半島ヲ割與スル一事ハ、絶東ト關係ヲ有スル歐洲諸國ニ取リ、頗ル重大ナル一問題ニシテ、殊ニ露國ハ同地方ニ於ケル固有ノ利益上、到底之ヲ等閑視スルヲ得ズ。英佛モ亦之ト同一ノ感情ヲ抱クベク、獨國ニ至テモ近年絶東ト巨額ノ貿易ヲ爲スガ故、其利益上共同干涉ニ賛成ヲ表スベケレバ、必ラズヤ近日ノ内露國並其他ノ邦國ハ相當ノ手段ヲ執ルコト疑ナカルベシ云々ト論ジ。次ニ「ノウオスチ」新聞モ同日ノ紙上ニ、日本ガ一旦遼東半島ト堅固ナル旅順口ヲ占有スルニ至ラバ、自然朝鮮滿洲ハ勿論、北京ヲ控制シ得ル好位地ニ立ツモノト謂ハザルヲ得ズ。是レ即チ全清國ヲ舉ゲテ日本ノ願使ニ一任シタルト何ゾ擇バン。將來ノ情勢果シテ如此ナリトセンカ、歐洲諸國ハ其利益ヲ損傷セラル、コト莫大ナルヲ以テ、寸時モ之ヲ等閑ニ付スベカラズ、云々ト痛論シ、露國ハ勿論英佛獨モ亦タ共ニ不利不便ヲ感ズル所以ヲ縷述シ、末段ニ至リ本問題ハ露國ノ爲メ最モ緊急ナルヲ以テ、此際他國ノ應接ノミニ倚賴セズ、獨力抗議ヲ爲スノ決心ナカルベカラズト論結セリ。

佛獨兩國ハ露國ト協同シ日本へ異議ヲ申込タリトノ事實判然スルヤ、「ノウオエ・ウレミヤ」新

聞ハ四月廿二日ノ紙上ニ於テ 英國ガ各國ト協同セザルハ全ク首鼠兩端ノ行爲ニ外ナラズ云々ト頻ニ馭撃シ、獨國ガ突然其意向ヲ轉シ露佛ト提携シタルヲ以テ賢明ナル所置ナリト贊賞シ、日本ニ對シ抗議ヲ試ムルノ最モ必要ナル所以ヲ絶叫セリ。又「ノウオスチ」新聞ハ同日ノ紙上ニ、日清同盟ヲ論ジテ曰ク、日清同盟ニ關スル風評ハ全歐洲ヲシテ杞憂ヲ抱カシメタルノ觀アレドモ、是レ決シテ實際ニ於テ深ク憂フルニ足ルノ價値ナシ。假令ヘ日清ノ同盟成レリトスルモ之ヲ真正ノ同盟ト稱スルヲ得ズ。寧ロ日本ガ清國ヲ服從シタリト云ハ、却テ正當ナルベク、日清間ノ戰爭モ亦タ之ヲ真正ノ戰爭ト稱スルヲ得ズ、日本ノ軍兵ハ如何ニモ些少ナル抗抵ヲ受ケタル而已ニテ、到ル處風靡席捲ノ勢ヲ呈セリ。是レ寧ロ救援ナク且ツ軍備ナキ邦土中へ、武装セル軍兵ノ侵入シタルニ過ギザルベシト説キ、露國軍艦ノ統計ヲ巨細ニ指示シ、其戰鬥力ハ他國ヲシテ黙止セシムルニ充分ナルコトヲ説明シ、末段ニ於テ今日ノ事タル最早ヤ外交手段ニ依頼スルノ必要ナケレバ、速カニ兵力ヲ以テ干涉スルニ如カズ云々ト論ゼリ。

「ノウオエ・ウレミヤ」新聞ハ同月廿四日ノ紙上ニ於テ、露佛獨三國ノ共同干涉ハ最早事實ト爲リ、馬關條約ハ絶東ノ均勢ヲ破ルヲ以テ、飽マデ之ガ訂正ヲ要求スルコト最モ緊急ナリ。日本ハ三國ノ提議ニ對シ果シテ同意ヲ表スルヤ否ハ未ダ之ヲ知ルニ由ナシト雖ドモ、絶東ニ於ケル三國ノ海軍力ハ、充分ニ日本ヲシテ各國ノ提議ニ對シ尊敬ヲ表セシムルニ足ルガ故ニ、日本

ノ爲メニ謀ルニ速カニ之ヲ承諾シ、戰償金、臺灣ノ讓與及清國ノ開港ヲ以テ満足スルニ如カズ云々ト論ジ。其後モ同新聞ハ連日ノ紙上ニ於テ本問題ヲ再應論究シ、日本ハ暗ニ英國ノ應援ヲ望ムガ如ク見ユレドモ、英國ハ決シテ信用ヲ措クニ足ラズ、日本ハ三國ノ抗議ヲ受ケ、恰モ國家ノ威嚴ヲ毀損セラレタルモノ、如ク、東京ニ於テ物議囂然タル由ナレドモ、日本ノ爲メ此際一步ヲ讓ルコト最モ得策ニシテ、好シ此一條件ヲ讓リタリトスルモ、巨額ノ戰償金、臺灣及澎湖島ノ占有ハ捷戰ノ結果トシテ充分ナルベク、且ツ日本ガ今回ノ戰爭ニ由リ占有シタル一大海國タル名譽ノ地位ハ、勿論之ヲ永遠ニ保持スルヲ得ベシ云々ト説ケリ。

日本ガ三國ノ勸告ヲ容レ、遼東半島ヲ拋棄スルコトヲ約諾セリノ事實判然セシヤ、「ウラスチ」新聞ハ五月七日ノ紙上ニ於テ、日本ガ三國ノ抗議ニ從ヒ、遂ニ遼東半島ノ確定占領ヲ絶念シタルハ、全ク平和ノ手段ニ出デタルモノニシテ、日本ガ現時ノ情態ヲ了解シ、如此キ讓歩ヲ爲シタルヲ證スルニ足ルベシ。然レドモ實際日本ノ軍兵ガ同地ヲ退去セザル限りハ、充分ニ謹嚴ヲ加ヘザルベカラズ。日本ノ外交官ハ頗ル巧智ニ長ズルヲ以テ、諸國ノ反對ヲ避ケンガ爲メ、一時確定占領ヲ拋棄セリト雖ドモ、清國ノ領土ヲ無期限ニ占領スルヲ得ベク、英國ノ埃及ニ於ケル澳國ノ「ボースニ」「ヘルツオグニ」ニ於ケルガ如キ、其例證少シトセズ。若シ果シテ日本ハ時日ヲ遷延センガ爲メ、一時ヲ彌縫シ、以テ他國ノ同盟ヲ俟ツノ策ニ出デタリトセバ、

露國ハ未ダ安坐スベカラザルモノアリ云々ト論ジ、「ノウオエ、ウレミヤ」新聞モ亦タ之ト殆
ンド同一ナル意見ヲ吐露セリ。即チ五月九日ノ同紙上ニ、日本ハ既ニ三國ノ勸告ヲ容レ、大陸
ニ割據セントスルノ念ヲ絶チタリト雖ドモ、清國ガ未ダ戰償金ノ義務ヲ果サザル以上ハ、日本
ノ軍兵ハ依然同地方ヲ占領スルナルベシ。今回ノ事件ニ關シ、三國ハ外交上ノ勝利ヲ博シタル
モ、決シテ之ヲ以テ滿意安心スベキニ非ズ。將來益々日本ノ舉動ニ注意シ、終始警戒ヲ加ヘザ
ルベカラズ云々ト説ケリ。」前記ニ新聞ノ外本問題ノ發生已降最モ激烈ナル論説ヲ掲ゲタルハ
「モスコフスキヤ、ウエドモスチ」新聞ニシテ、其論旨ニ至リテハ大同小異ナレドモ、只ダ「清
國境土ハ寸塊ト雖ドモ之ヲ日本ニ讓與スルヲ許サズ」「日本ノ清國ニ對スル勢力ハ其影ダモ之
ヲ止メシムベカラズ」「鮮血ヲ流スニアラザレバ到底事局ヲ結了スルコト能ハザルベシ」云々
等ノ如キ頗ル過激ナル語調ハ其紙上ニ散見セラレタリ。「グラジダニン」新聞ハ之ニ比シ稍溫和
ノ傾向ヲ有シ、五月四日ノ同紙上ニ於テ、日露交戦ノ利害ヲ説キ、三國ノ共同干涉ニ論及シ、
末段ニ至リ愛國主義ニ二種ノ別アリ、一ヲ奮激ト自愛ノ情深ク、急遽ナル決斷ト浮躁ナル行爲ヲ
有シ、他ハ一問題ヲ決スルニ方リ、必ラズ沈思默考シ、未來ニ起ルベキ危機ト現在ニ於ケル政
略上ノ變動ヲ豫察シ、賢明ナル斷案ヲ下スニ在リ。第一種ノ愛國者ハ輕躁ニシテ激昂シ易ク、
「我ガ名譽ハ毀損セラレタリ」「我ニ軍艦二十二隻アリ」「開戦スベシ」杯ト只ダ絶叫スルコ
トノミヲ知り、若シ露國ノ準備完全ナラザルトキハ如何。若シ日本ガ露國ヨリ強カリシ場合ニ
如何ナラン等ノ疑問ニ至テハ恬トシテ之ヲ顧ミザルナリ。然レドモ第二種ノ愛國者ハ前後ノ利
害得失ヲ審査較量シ、前記ノ疑問ノ如キハ先ヅ最初ニ其結果如何ヲ豫見スルコトノ必要ヲ認
メ、今日露國ニ於テ未ダ充分ノ準備ナキモノトセバ、斯ル暴進ヲ爲スハ頗ル危険ナルヲ以テ、
若シ日本ガ三國ノ勸告ヲ拒絕シタランニハ、露國ハ先ヅ退イテ絶東ノ現領土ヲ保チ、其根據ヲ
充分ニ鞏固ナラシムルノ策ヲ執ルニ如カズトノ意見ヲ有ス。是レ寧ロ真正ノ憂國者ナルベシ云
々ト論結セリ。其他ノ大小諸新聞ニ至リテハ概ネ前記ノ諸新聞ト大同小異ノ記事論説ヲ掲ゲタ
レドモ、獨リ「ネデリヤ」新聞ノミハ全ク之ト意見ヲ異ニシ、四月廿八日ノ紙上ニ於テ、三國
ノ共同干涉ヨリ説起シ、露國諸新聞ノ激昂シタル情態ヲ叙述シ、世人ハ輕躁ニモ日本ト交戦ス
ベシ云々ト喧傳スレドモ、絶東ニ於ケル戦争ハ露國ニ取リ最モ謹戒ヲ要スル重要錯雜ナル一
大問題ナリ。抑モ今回ノ事タル、全ク露國ガ日本捷戦ノ結果ヲ見大ニ嫉妬ノ念ヲ生ジタルニ起
因スルコト實際疑ヲ容ルベカラズ。日本ハ勇敢ニモ清國ト戦闘シ、容易ニ勝利ヲ博シ、露人ガ
曾テ想像ニダモ畫カザリシ讓與ヲ得タレドモ、露國ハ何故歟今日迄成ルベク清國トノ戦争ヲ畏
避シ、「カシガル」ヲ返還シ、「クルジャ」ヲ讓與シタルノミナラズ、「バミール」ノ一部ヲモ拋棄
シ、氷結セザル港灣ヲ有セント欲スル宿望ヲモ絶念シ、遂ニ浦潮ニ根據ヲ固ムルノ己ムヲ得ザ

ルニ至レリ。故ニ今日ニ於テ我憂國者連ノ嫉妬ハ自然ノ情勢ニ出デ理由ナキニ非ズト雖ドモ、日本ノ新地位ハ未ダ露國ノ爲メ甚ダ危険ナリト斷定スルノ基礎ナシ。日本ガ近年驚クベキ長足ノ進歩ヲ爲シ、朝鮮及清國ニ對シ勢力ヲ有スルニ至リタルハ、是レ自然ノ結果ニシテ、之ヲ厭抑スルコト甚ダ難シ。況ンヤ絶東ニ於ケル露國陸海軍ノ勢力ハ、未ダ不充分ニシテ日本ト交戦シ必勝ヲ期スルノ成算ナキニ於テヲヤ。露國ハ地廣ク人多シ、内治未ダ整頓セズ。國內事業ノ振起ヲ計ルベキモノ枚擧ニ違アラズ。加ルニ馬關條約ハ隣境ノ敵手タル清國ノ勢力ヲ削減シタルモノニシテ、露國ノ爲メ或ハ却テ利益ナラン。故ニ今日ハ先ヅ日本ノ欲スルトコロニ一任シ、他日ニ至リ之ト提携シ、東洋ニ於テ大ニ經營センコトヲ望ムハ最モ策ノ得タルモノナリ云々ト論結セリ」右當國諸新聞ノ意向一斑摘譯之上御參考迄差進候 敬具

明治二十八年五月十三日

在 露

特命全權公使 西德二郎

外務大臣子爵 陸奥宗光殿

明治廿八年八月一日

内閣總理大臣

内閣書記官(多田) (柴田) (山本)
内閣書記官長(署名)

外務大臣 大藏大臣(花押) 海軍大臣(花押) 文部大臣(花押)
 遞信大臣(花押) 内務大臣(花押) 陸軍大臣(花押) 司法大臣
 農商務大臣(印) 黒田議長(花押)

外務大臣進達

- 一、絶東問題ニ干スル露國諸新聞ノ論說ニ付在露西公使ヨリ抄譯報告ノ件
 - 一、澳匈國皇帝ノ勅語及同國外務大臣ノ外交政略ニ關スル演說ノ大意、在澳大山代理公使ヨリ報告ノ件
- 右回覽ニ供ス

送第一一九號

絶東問題ニ關スル露國諸新聞ノ論說ニ付在露西公使ヨリ別紙ノ通り抄譯報告有之候ニ付右寫
供閱覽候也

明治二十八年八月一日

外務大臣臨時代理

文部大臣侯爵 西園寺公望印

内閣總理大臣伯爵 伊藤博文殿

送第三五號

絶東問題ニ關スル露國諸新聞ノ論說

日清媾和ノ後遼東半島ノ分割ニ關シ、露佛獨三國ガ提出シタル共同抗議ニ對スル日本ノ讓歩
ハ、東洋ノ平和ヲシテ愈々再興セシムルノ好果ヲ來タシ、從テ最初ハ飽迄囂々異口同音ニ日本
ニ反對シタル當國諸新聞モ、其後從前ノ筆鋒ヲ收メ、暫ク鎮靜ノ姿ニ相見候處、近頃日本ノ對
韓政略等ニ關シ、彼是論評ヲ爲スモノ往々有之、就中「ノウオエ、ウレミヤ」新聞ハ去ル五月
十二日ノ紙上ニ於テ朝鮮ノ現情ヲ論ジテ曰ク、

支那海上ニハ歐洲一般ニ關スルノ利益アリ、先キニ之ヲ保護スルノ必要アリシニ由リ、
露國ハ他ノ二大國ト提携シテ共同的運動ヲ爲シタリト雖ドモ、此海面ニハ獨リ歐洲ノ共
同利益ニ止マラズ、全ク之ト相異ナル露國固有ノ利益ノ存在スルアリ。然ルニ此ノ利益
ヲ徒ラニ歐洲ノ裁判ニ付シ、又ハ其監督ニ委ヌル如キハ、露國ニ取り不得策ノ甚シキモ
ノニシテ、却テ露國ノ威力ヲ減縮シ、將來ノ禍根ヲ醸スニ過ギザルナリ。曩年露國ガ歐

洲ノ爲メ屈從セシメラレタル「ボスホラス」問題ノ殷鑑遠カラズト雖ドモ、是レ全ク、「クリミヤ」戦争ノ失敗ニ由馴致シタルノ結果ニシテ、露國モ亦タ之ヲ如何トモスル能ハズ。獨リ朝鮮ニ於テ露國ガ首座ヲ占ムルノ權ハ、決シテ拋棄スベカラザル而已ナラズ益々之ヲ鞏固ニセザルベカラズ。況ンヤ今日ハ支那海上ニ於ケル歐洲一般ノ利益ハ、既ニ三國ノ共同抗議ニ對スル日本ノ決答ニ由リテ損傷ヲ免カレ、最早同盟諸國ハ退テ各其固有ノ利益ニ關シ、計畫ヲ爲スノ時ナルニ於テオヤ。元來三國各自ノ私利モ亦タ共同運動ノ方法ニ由リ之ヲ保護シ得ベキモ、露國ハ決シテ他國ノ應援ニ依頼シテ固有ノ利益ヲ保護スルノ念ヲ抱クベカラズ。自ラ進デ獨力經營ヲ爲スノ覺悟ナカルベカラズ。今ヤ日本ハ一時ノ好機ニ乗ジ、朝鮮ヲ全ク經濟的ニ服從シ、國王ヲ其手中ニ擒ニシ、鐵道及採礦ノ營業ヲ專領シ、而シテ尙ホ朝鮮ヲ獨立國ト公布スルモ、果シテ何ノ實力アラン。露國ガ今日迄朝鮮ヲ等閑視シタルハ一大失策ニシテ、同國ハ露西亞ノ對亞政略上及亞細亞領土ノ將來發達上、頗ル樞要ノ地位ヲ占ムルモノナリ。若シ露國ノ公正ナル妄想トシテ「シベリヤ」鐵道ヲ黃海々岸ニ貫連セシメンコトヲ豫期セバ、該鐵道ノ極點ヲシテ將サニ清兵ノ屯守スベキ旅順口ト日本ノ鎮臺、行政官及商估ガ蹂躪スル朝鮮トノ間ニ在ラシメザルヲ得ズ。是レ露國ノ爲メ頗ル悲ムベキノ一事ナリ。日本ハ新ニ占領シタル境十

内ニ於テ、平和的發達ヲ謀ルハ素ヨリ可ナリト雖モ、露國ガ互寒ナル「シベリヤ」ヨリ南方暖海へ突進セントスル門戸ヲ封鎖スル如キニ至テハ、到底之ヲ不問ニ付スベカラザルナリ。若シ事情果シテ前述ノ如キ場合ニ至テハ、露國ガ忽チ日本ノ外交ト衝突スルハ到底免カルベカラザルモノニシテ、朝鮮ノ現情ハ如此キ關係ヲ醸成スベキ傾向アリ。故ニ今日朝鮮ニ於ケル露國ノ外交ヲ容易ニシ、且ツ日本ニ前述ノ事情ヲ説明センガ爲メ、朝鮮海ニ露國ノ軍艦ヲ聚合シ同半島ニ於ケル露國ノ實力ヲ表示スルコト頗ル必要ナリ。今ヤ日本ハ三國ノ抗議ニ讓リ、事局既ニ平穩ニ歸シタルヲ以テ、露國ハ最早其艦隊ヲ日本及支那ニ配置スルノ必要ヲ有セザルガ故、悉ク之ヲ朝鮮海ニ集合スベシ。東洋ハ單ニ眼前ノ事實ニノミ信用ヲ置クノ地ナルヲ以テ、前述ノ如キ處置ハ通常一般ニ、外交文書ヲ以テスル懸合ニ勝ル勿論ナリ云

ト論ゼリ。次ニ「グラジタニン」新聞ハ六月一日ノ紙上ニ於テ、朝鮮ニ關スル「モスコーフスキ」ウエドモスチ」新聞ノ論說ヲ評シテ曰ク。

該新聞ハ今回臺灣ニ於テ共和國ノ設立ヲ公布セシニ由リ、其機ニ乗ジ朝鮮ヲ露國ノ保護國ト爲スノ持說ヲ再述セリ。即チ「若シ朝鮮ガ獨リ名分上ニ止マラズ、實際獨立ノ實ヲ表シ得ルモ、露國ハ將來ニ於テ何等危懼スルコトナク、露國ト朝鮮トノ間ニハ常ニ親睦

ノ關係ヲ保持スルコトヲ得ベシ。然レドモ若シ一朝朝鮮ヲシテ他邦殊ニ日本ニ從屬セシメントスルニ至ツテハ、是レ全ク問題ヲ異ニシ、露國ハ決シテ之ヲ許スヲ得ズ。又許ス能ハザルモノニシテ、將來絶東ノ事情果シテ如此キニ至ルモノナリトセバ、露國ハ朝鮮ヲシテ一日モ速カニ其保護國タラシムルコト最モ緊要ナリト論ジ、且ツ「日本人ガ臺灣ノ反逆者ヲ壓服スルハ、大陸ニ於テ清兵ト交戦シタルヨリ困難ナルベシ。如何トナレバ臺灣ノ住民ハ勇悍ニシテ黄色人種中ノ海賊ヨリ成立シ、且ツ共同一致ノ精神ニ涵養セラレタルヲ以テ、之ヲ服従スルハ決シテ容易ノ事業ニ非ラズ。日本モ爲メニ其國力ト時日ヲ徒費スルコト鮮少ナラザルベシ。故ニ今日ハ露國ノ爲メ朝鮮ノ問題ヲ決スルニ最モ適合スル好時機ナリ云々」

ト論ジタレドモ、惜イ哉該新聞ハ從前ノ論說ト均シク朝鮮ヲ露國ノ保護ニ屬セシムルノ問題ニ關シ、公平ナル同盟諸國ノ意見ヲ參考ニ供セザルヲ如何セン。現ニ佛獨兩國ハ本件ニ關シ、未ダ何等ノ意見ヲモ吐露セズ。況ンヤ英國ノ如キ徹頭徹尾露國ノ反對ニ立ツノ邦國アルニ於テヤ。

ト該新聞ヲ批評セリ。又「グラジタニシ」新聞ハ絶東ニ於ケル露獨佛三國ノ共和運動ニ關シ、五月二十一日ノ紙上ニ於テ、

「近頃佛國ノ新聞中「フヒガロ」「ゴロア」「ソルイユ」「オトリテ」等ハ頻リニ佛國ノ對亞政略ヲ論ジ、何レモ同國外務大臣ト露國ニ向テ駁撃ヲ加ヘ「アノツト」氏ハ全ク他國ノ爲メ盡惑セラレ、自國固有ノ利益ヲ忘却シ、佛國ガ露國ノ爲メニ盡シタル功績ヲ利用スルノ途ヲ知ラズ。露國ハ佛國ノ義侠の行爲ニ感ゼズシテ、獨國ト共ニ飽マデ私利ヲ營ムニ急々タリ。且ツ露國ハ佛國ガ參同スルヲ屑シトセザルノ「キール」ニ引招セリ。是ニ於テ實際上三國同盟ヲ造出セリト雖モ、佛國ハ獨リ嗤フベク且ツ悲ムベキノ地位ニ立テリ云々ト論ジ、獨リ露國ヲ罪スル而已ナラズ自國政府ノ處置ヲ非議セリト列舉シ「ノウオユ・ウレミヤ」新聞ノ如キハ、之ヲ一時ノ政略的現象ニ過ギズト臆斷スレドモ、如此キ重立タル新聞、殊ニ「フヒガロ」ノ如キ最モ有名ナル新紙ニシテ前述ノ論說ヲ掲載シタルハ、多少輿論ノ反響タラザルヲ得ズ。抑モ佛國ハ露國ノ最モ信憑ヲ措クトコロノ友邦ナルニ於テオヤ。露國ガ素ト他國ノ應援ニ倚賴スルハ大ナル誤謬ニシテ、露國ハ早晚絶東ニ於テ一時ノ勝利ヲ博シタルガ如ク思料スレドモ、是レ決シテ飽意スベキノ時ニ非ズ宜シク進デ從前孤立獨歩ノ政策ヲ保續シ、益々其根據ヲ鞏固ニセンコト實ニ目下ノ急務ナリ云々」

ト論結セリ。又外務省ノ機關ナル「ジユルナルデ・サン・ペテルブル」新聞ハ、絶東問題ニ關

シ容易ニ詳説ヲ掲ゲザルモ、去ル本月五日ノ紙上ニ左ノ如キ臺灣ニ關スル記事ヲ掲ゲ、其意向
上日本ニ同感ヲ表スルモノ、如シ。即チ、

「絶東ノ來電ニ依レバ日本人ガ臺灣島ヲ占領セル事狀ノ詳細ヲ知ルヲ得タリ。五月廿八
日、日本ノ艦隊ハ同島ノ鷄籠港ニ到着セシトキハ、多勢ノ臺灣人ハ同港ニ集合シテ其上
陸ヲ妨ゲン爲メ、一時抵抗ヲ試ミシモ、唯ダ人數ノ多キノミニテ其詮ナク、日本軍ノ爲
メ砲撃セラレ、斃死スルモノ多ク暫ニシテ潰走シタリ。右電報ニ由レバ此一戰ニ於テ殺
サレタル者三百餘人、日本軍ハ一兵卒ヲモ失ハズト云フ。此一撃ニ由リ臺灣共和政府ハ
自ラ顛覆スベシト雖モ、此騒亂ニ乗ジ暴兵ト無賴ノ徒ハ奪掠ヲ肆行シ、内地到ル處攘亂
ノ有様ヲ呈シ日本軍ハ鷄籠ヲ占領セシヨリ直ニ内地ニ向テ進軍シタリ」

右御參考迄抄譯差出候 敬具

明治廿八年六月十二日

在 露

特命全權公使 西 德 二 郎

外務大臣代理侯爵 西園寺公望殿

送第一二〇號

奧匈國皇帝ノ勅語及同國外務大臣ノ外交政略ニ關スル演説ノ大意、別紙ノ通り在奧大小代理
公使ヨリ報告有之候ニ付右寫差進候也。

明治二十八年八月一日

外務大臣臨時代理

文部大臣侯爵 西園寺公望印

內閣總理大臣伯爵 伊藤博文殿

在奧帝國公使館通常報告第五號

奧匈國皇帝ノ勅語及外務大臣ノ演説

奧匈國皇帝ノ勅語及外務大臣ノ演説

奧國及匈國々會ノ共同國務ニ關スル委員會ハ、本月六日維也納府ニ於テ開會シ、同八日奧匈國皇帝陛下ハ奧匈與國各議長ノ奏上ニ對シ、左ノ勅語ヲ賜ハリタリ。

朕ハ今卿等ノ奏詞ヲ聽キ、卿等ガ朕ニ忠順ナルノ確證ヲ得テ、朕甚ダ之ヲ嘉ミス。昨年委員會閉會以來、我國ト諸外國トノ交際ハ依然最モ良好ナルコトヲ茲ニ公言シ得ルハ朕ノ特ニ欣喜ニ堪ヘザル處ナリ。歐洲列國ト親密ナル交際ヲ維持スルニ適合シタル我外交政略ハ、安寧ノ觀念ヲ進涉セシメ、依テ以テ一般ノ平和ヲ鞏固ナラシメ、良好ノ成績ヲ得タリ。我政府ハ從來報告シ來リシ實着ノ主義ヲ固守シ、將來ニ於テモ我國及歐洲全體ノ利益ニ適合セル形勢ヲ創定スルコトヲ努ムベシ。

軍務省ノ經費ガ前年同様ノ増加ヲ見タルハ、陸海軍ノ行政ヲ整へ、陸海軍ノ武備ヲ張リ之ヲシテ其必要ノ程度ニ達セシムルノ止ムヲ得ザルニ出デタルモノニシテ、國民ガ國家ノ爲メ此負擔ヲ甘受スルハ朕ノ太ダ嘉ミスル處ナリ。固ヨリ同省ノ經費増額ハ經濟上財政上ノ情況ヲ參照シテ、然後定メタルモノナリ。

ボスニイン及フルツエコキイナ與州ニ於ケル經濟上及ビ其他諸般ノ情況ハ依然良好ナリ

一千八百九十六年ニ至ラバ右與州ニ於ケル經費ハ、其歲入ヲ以テ全然支辨スルヲ得ルニ至ル可シ。

朕ハ卿等ノ審議ニ付セラルベキ諸法案ヲ、卿等ノ有スル愛國ノ精神ト實着ナル思考トヲ以テ議定シ、良好ノ成跡ヲ收メンコトヲ希望シ。茲ニ卿等ノ來會ヲ嘉ミス。

又外務大臣ゴヲホウススキ伯ハ、去ル十二日匈國委員會ニ於テ新任ヲ披露シ、且ツ奧匈外交政略ノ方針ヲ述ベテ曰ク。

諸君。余ハ今回國帝及國王ナル我陛下ノ恩惠ニ依リ、外務大臣ノ職ニ就キシコトヲ謹デ諸君ニ披露ス。

殆ンド十四年間ノ久シキ、我國外交ノ衝ニ立チ、幸運ト敏腕トヲ以テ國家ノ利益ニ尤モ適當ナル政略ヲ採リ、之レガ基礎ヲ創立シテ大功アリシ政治家ノ後任ニ擢バレタルハ、余ノ尤モ光榮トスル處ナリ。余ハ前任者ノ政略ヲ全然是認スルモノナリ。之ヲ要スルニ前任者ノ政略ハ列國ニ對スル友情ヲ缺カシメザルノミナラズ、中央歐羅巴三大國ノ平和的同盟ニ依リテ創立セラレタル原則ヲ確守シ、列國ト良好親睦ノ交際ヲ維持スルニアリ吾人ガ目下享有スル和平ノ情態ハ、是レ曩ニ與國ガ獨逸及伊太利ト同盟シタル目的ニ叶モノニシテ、平和ヲ維持シ、且ツ之ヲ進歩セシムルハ元來此同盟ノ本務タリ。余ハ此ノ

本務ニ適合スル諸般ノ問題ヲ執行スルコトヲ少シモ躊躇セザル可シ。以上ノ余ノ述べタル處ニ依リテ、諸君ハ既ニ了解セラレタルナル可シ。今回外務大臣ハ更迭セリト雖モ、外交政略ノ主義方針ニ至リテハ些少ノ變換ヲ見ザル可キコトヲ。從來ノ政略ニ依リテ得タル成績ハ眞ニ良好ニシテ、一ツノ遺憾スル點ナキノミナラズ、能ク侵略的ノ傾向ニ遠カリ、列國ト良好親密ノ交際ヲ保持シ、外ニ對シテ我國ノ威嚴及大國タルノ地位ヲ高メ、豫期セシ如ク國民ノ福利ヲ増進シタリ。昨年委員會開會以來今日ニ至ル迄、政治界ノ有様ハ尤モ平穩ニシテ、懸念スルニ足ル可キ妖雲アルヲ見ズ。政界既ニ此ノ如ク安全ナリ。故ニ余ハ我商政略ヲ漸次發達セシメ、又商政略ノ密接ノ關係アル公使館及領事館制ノ一欸ヲモ適當ニ組織シ得ルノ餘裕アルヲ見ル。此等ニ關スル諸法案ハ次年ノ委員會ニ提出スルノ考ナリ。固ヨリ此等諸法案完成スルニ至ラバ、新タニ費用ヲ増加ス可シト雖モ、極東ニ於ケル最近ノ現象ニ依リテ變換シタル情況ハ之レヲ必要トスルノ止ムヲ得ザルニ至リタレバナリ云々。

外務大臣ハ又去ル六月十七日墺國委員會ニ於テ、新任披露ト共ニ外交政略ニ關スル一場ノ演說ヲナセリ。其主意前ノ演說ト略同様ナルヲ以テ之ヲ掲ゲズ。

前顯墺國皇帝ノ勅語及外務大臣ノ演說ハ、獨伊ハ勿論佛露等ニ於テモ傑ネ好評ヲ受ケタリ

特ニ同大臣ガ政界ニ懸念スルニ足ル可キ妖雲ナシト述べタルハ、歐洲諸國ニ鎮靜和平ノ感觸ヲ與ヘタルモノノ如シ。特ニ土國ニ於テハ「アルメニヤ」問題ニテ混雜中、墺外務大臣ノ口ヨリ前顯ノ陳述ヲ聽キ聊カ意ヲ安ジタリトノ說アリ。

墺國外務大臣ノ演說中、特ニ吾人ノ注意ス可キハ、商政略ナル點ナリトス。而シテ歐洲政治界ニ懸念スルニ足ル可キ妖雲ヲ見ズトノ言辭モ亦決シテ輕視ス可カラズ。蓋シ歐洲諸國ハ年々盛ンニ兵備ヲ整へ、切リニ防禦ニ力ヲ盡シタルガ故ニ、若シ一旦平和破ル、ニ至ラバ、人名財產ノ損失モ昔日ノ比ニアラザル可キヲ想案スルガ故ニ、可成歐洲ノ平和ヲ維持セント希望セザルモノナキニ由リ、歐洲ノ大勢ハ漸次平和ニ傾ケリ。此ノ如ク歐洲諸國ノ戰爭ノ不幸ヲ恐怖スルト同時ニ、眞正ノ文明ハ之レヲ治平ノ時ニ求ム可ク、國家ノ發達及國民ノ福利ハ之レヲ平和ノ際ニ於テノミ收メ得可キモノナリトノ念慮ハ、各國政治家ノ腦裡ニ漸々浸染シ來リタルガ如シ。三國同盟ハ侵略的ニアラズシテ、露佛ノ同盟ハ防禦的ナリトノ公言果シテ眞ナリヤ否ヤハ暫ク措キ、目前ノ形勢ヨリ推察スレバ、佛露兩國ガ北進南下夾ンデ三國同盟ヲ擊ツ可シトハ豫想スルヲ得ズ。而シテ三國同盟モ亦蹶然肩ヲ左右ニ張り、佛露ヲ挫カントスルノ模様アルヲ見ズ。列國艦隊ノ「キール」港參同及昨廿一日獨逸皇帝ガ「キール」ニ於ケル東海北海間ノ開溝式ニ臨幸中、市長ノ奏上ニ對シテ述べラレタル左ノ勅語ノ如キハ、平和的觀念ノ上ニ大ナル效

果ヲ奏シタルモノナリ。皇帝曰ク、

(前略) 世界ノ商業ハ單リ平和ノ際ニ於テノミ發達スルヲ得可ク、單ニ治安ノ時ニ於テノミ益々隆盛ニ至ルヲ得可シ(下略)

情々獨逸近時ニ於ケル政略ノ由リテ來ル處ヲ察スルニ、帝ノ言ハ眞ニ獨逸政略ノ大目的ヲ發表シタルモノ、如シ。同國ガ近年目ヲ世界ノ貿易ニ放チ、臂ヲ宇内ノ商界ニ張ラントシツ、アルコトハ世人ノ普ク知ル處ニシテ、此目的ヲ達スルニハ先ヅ歐洲内ノ平和ヲ圖ラザル可カラズト思惟シツツアルコトハ、識者疾クニ之レヲ知レリ。然リ而シテ同國ガ一ツノ憂慮ニ堪ヘザルモノハ、彼ノ佛國ニ於ケル敵愾心ナリ。「アルサス、ロートリンゲン」ノ兩洲ハ早晚佛國ノ版圖ニ回復セザル可カラザルモノナリトノ復讐心ナリ。此ヲ以テ獨逸皇帝ノ賢明ナル、其臣僚ノ敏捷ナル、意ヲ此佛國ノ復讐心ヲ輕易ナラシメントスルノ方向ニ向ケ、爾來利用シ得ラル可キノ機會ハ之レヲ利用シ、以テ佛人ノ造次顛沛モ忘ル可カラザル怨ヲ除去センコトヲ努メ、其奏功少ナカラザリシト謂フ可シ。今回佛國艦隊ノ「キール」ニ於ケル東海北海間開溝式ニ參列セシコトハ、一方ニハ獨國ノ勢力ニ引付ケラレシカノ疑ナキニアラザレドモ、又一方ニ於テハ佛國艦隊ハ露國ノ艦隊ト同時ニ「キール」ニ入港シ、佛露兩國ノ士官ハ互ニ特別ニ親睦ナルノ容子ヲ陽ハニ表顯シテ、以テ兩國ハ三國同盟ニ向ツテ對峙スルノ姿勢ヲ示シタリ。然レドモ今回ノ如

キ會合ハ獨佛兩國間ノ敵愾心ヲ増進セシヨリモ寧ロ平易ナラシメタルガ如シ。

之レヲ要スルニ獨逸國ハ東海北海間開溝式ノ機會ヲ利用シ、各國ノ艦隊ヲ招集シ、亦能ク巧ミニ佛國ノ艦隊ヲ引入レ、歐洲平和ノ基礎ヲ鞏固ナラシメントシ、開溝式ヲシテ歐洲平和ノ祝祭タルノ觀ヲ呈セシメタリ。蓋シ其素意ヲ達シタルモノナリ。今ヤ歐洲ハ殆ンド内ニ顧慮ス可キモノナキノ情況ニ到達シ、列國ノ人士ハ目ヲ極東ノ歐洲外ニ注ゲリ。伯林條約以來バルカン半島ハ久シク列國ノ燒點タリシガ、今ヤ列國ハ此燒點ヲ我亞細亞ニ移シ、且ツ出來得ル限りハ亞細亞及其他歐洲外ノ利益ヲ犠牲トシテ、以テ歐洲ノ太平ヲ買ハントス。獨逸國ガ露佛ト共ニ我國ノ滿洲占領ニ對シテ干涉ヲ爲シタルガ如キ以テ其一班ヲ見ルニ足ランカ。

奧匈國外務大臣ガ日清戰爭ノ結果トシ、公使館及領事館制ヲ改正スルノ必要アリト述ベタルハ、奧匈國ト日清兩國等トノ交際ハ將來益々頻繁ナルニ至ル可キコトヲ想像シ、特ニ從來萎靡振ハザリシ奧匈國ト日清兩國トノ商業ヲシテ、漸ク發達セシメストスルノ意志ニ基ツクモノナルコトハ、外務大臣ノ機關新聞ナル「フレムテンブラツト」ガ過日斯クノ如ク論ジタルニ依リテ益明確ナリトス。今ヤ歐洲列國ハ亞細亞及其他歐洲外ヲ以テ、自己ノ平和ヲ維持スルノ目的物トシ、所謂濁水ノ中ニ漁セント欲ス。歐洲諸國ハ東洋ノ生活ノ程度甚ダ低ク、職工ノ賃銀ハ甚ダ廉ニ、而シテ職人ハ總テ伶俐ナルガ故ニ、商工上ニ於テハ到底東洋人ト競爭シ難カル可キ

ヲ見テ、大ニ日本人ヲ恐レ居レリ。清國ヲシテ今日ノ如キ半開ノ國タラシムルハ、歐洲諸國ノ陰ニ喜悅スル處ニシテ、之レヲ日本ノ如ク開明ニ導キ、歐米ノ競争者タラシムルハ、歐米人ガ蛇蝎ノ如ク恐ル、外ナキコトハ甚明瞭ナリ。本日委員會ニ於テ、一議員ハ清國ノ開明ニ至ルハ歐洲商工上ニ於ケル恐怖ス可キ大敵ナリト論ジ、大イニ喝采ヲ博シタリ。以テ其一班ヲ知ルニ足レリ。此ノ如ク歐洲諸國ハ政治上並ニ商業上目ヲ東洋ニ注射セリ。我日本帝國ノ前途モ是ヨリ倍々多事ナル可シ。此段及報告候。敬具

明治二十八年六月廿二日

在澳國臨時代理公使 大山 綱介

臨時外務大臣侯爵 西園寺公望殿

明治廿八年八月一日

内閣總理大臣

内閣書記官(多田)(柴田)(本山)

内閣書記官長(署名)

外務大臣

大藏大臣(花押)

海軍大臣(花押)

文部大臣(花押)

遞信大臣(署名)

内務大臣(花押)

陸軍大臣(花押)

司法大臣

農商務大臣(印)

黒田議長(花押)

外務大臣進達絶東問題ニ關スル露國諸新聞ノ意向ニ付、在露西亞公使ヨリ茲ニ澳國內閣辭職ノ件ニ付キ在澳大山代理公使ヨリ抄譯報告ノ件

右回覽ニ供ス

送第一二一號

絶東問題ニ關スル露國諸新聞ノ意向ニ付、在露西公使ヨリ並ニ奧國內閣辭職ノ件ニ付在奧大
山代理公使ヨリ別紙ノ通り抄譯報告致越候ニ付、右高供閱覽候也。

明治二十八年八月一日

外務大臣臨時代理

文部大臣侯爵 西園寺公望印

内閣總理大臣伯爵 伊藤博文殿

送第四二號

絶東問題ニ關スル露國新聞ノ意向

近來當國新聞中、清國外債及朝鮮問題ニ關シ種々ノ論評ヲ掲ゲ候モノ有之候ニ付、其重ナル
二三ヲ譯出致候。

「ノウオエ、ウレミヤ」ハ六月十七日ノ紙上ニ論ジテ曰ク「タイムス」記者ハ清國外債ノ募集
ニ關シ、露國ハ其政策上ニ於テ一大進歩ヲ爲セシコトヲ祝スルト同時ニ、佛獨兩國ハ絶東ニ於
テ露國ニ助力ヲ與ヘタルモ、自カラ何等ノ利益ヲモ博取スルコト能ハザリシモノ、如ク叙述シ、
兩國ノ項門ニ一針ヲ加ヘタリ。然レドモ佛國政府ハ既ニ前週間來、巴里市内ニ斯ク迄囂々タリ
シ此種ノ詰問ニ對シ、頗ル明晰ニシテ且ツ賢明ナル答辨ヲ與ヘタリ。我國諸新聞ハ今回露國ノ
處置ニ對シ不平ヲ唱ヘザルモ、先キニ「ヘリゴランド」及阿非利加領土ノ分割ニ關スル英佛交
渉事件ノ完結後、如何ナル怒濤ガ全獨國ノ新紙上ニ狂奔シタルカハ吾輩能ク之ヲ知ル。英國ハ
價值ナキ一島ヲ拋棄シテ、阿非利加ノ獨領中錚々ノ名アリ、且ツ同洲東岸ノ好碇泊場ナル「ザ
ンジバル」ヲ「カプリウキ」宰相ノ手中ヨリ脱却シタリ。今回獨國ガ露佛ニ左袒シタルモ畢竟
如此キ前例アルガ爲ニシテ、若シ英國ト提携セバ再ビ前述ノ如キ不利益ノ地位ニ陥ルノ虞アル
ヲ以テ、寧ロ露佛ト連合シ、貿易上ニ於テ英國ト競争シ、勝利ヲ博セント企圖シタルモノニシ

テ、現ニ三國ノ新同盟ハ遽カニ成立シ、英國ハ殆ンド孤獨ノ地位ヲ占メタルヲ以テ、獨國ハ其貿易ヲ充分ニ發達セシムルノ自由ヲ得タリ。好シ絶東ニ於ケル獨國ノ利益ハ、幾分カ露國ノ利益ト反對スルモノナシトセザルモ、英國ガ陽ニ親陸ノ意ヲ表シテ「パミール」ニ於ケル讓歩ヲ要求シ、陰ニ東歐地方ニ於テ露國ニ反對ノ示威運動ヲ教唆スルノ時ニ際シ、獨國ガ自カラ來テ同盟者タラント提議セシモノナレバ、露國ハ勿論之ヲ拒絶スルノ理由ヲ有セザルナリ。

前述ノ事情ハ如何ナリトスルモ「タイムス」記者ハ「日清戰爭ニ由リ發生シタル錯雜ナル政略上ノ變戲ニ於テ、巨利ヲ博シタルハ獨リ露國ノミ」ト稱スレドモ、其利益ハ果シテ如何ナルモノナルカ、今日ニ於テ未ダ之ヲ知ルノ途ナシ。又同記者ハ「朝鮮「レザレフ」港及清國領「パミール」ノ讓與、並ニ滿洲經由「シベリヤ」鐵道線ノ延長等ニ關スル風説ハ未ダ信ヲ措クニ足ラズ、只ダ露國斡旋ノ報酬ハ必ラズ大ナルベシト雖モ、是レ今日ニアラズ、將來ニ至リ始メテ之ヲ知り得ベシ。兎ニ角露國ハ今回清國ニ對スル權威ヲ強フシ、新均勢ヲ擔保シタルガ故ニ、自己ノ宿志ヲ達スルニ便利ナル運動ヲ爲シ得ベク、之ト同時ニ「シベリヤ」鐵道築造工事ヲ督促シ、且ツ海軍ヲ盛大ナラシムルコトニ勉ムベシ」ト説ケリ。

實際「タイムス」記者ノ説ノ如ク、露國ガ日本清國ノ近海ニ強盛ナル艦隊ヲ有スルハ目下ノ急務ニシテ、東「シベリヤ」ニ充分ナル陸兵ヲ駐屯セシムルコトモ亦タ頗ル必要ナルベシ。日

本ノ通信ニ由レバ、露國ニ對スル日本ノ敵愾心ハ全國民ヲ鼓舞振起セシメタリト、夫レ或ハ然ラン。日本ノ國民派ハ歐洲諸國ノ例ニ從ヒ、海陸ノ軍備ヲ充實センコトヲ其政府ニ勸告セリト。是即チ露國トノ爭鬪ニ百般ノ準備ヲ爲スニ外ナラズ。言語ヨリ實際ニ移ルニハ多少ノ時日ヲ要スベシト雖ドモ、日本ガ夙ニ其長眠ヲ攪破シ、開明ノ途ニ就キ、既ニ軍事的進歩ヲ表ハシタルハ吾輩ガ眼前ニ目撃シタルノ事實ナリ。將來日本ノ攻撃的準備ニ對シ、周到ナル注意ヲ加フルハ最モ緊要ナリ。清帝國ノ南部ハ、日本ガ特別ナル希望ヲ有セザルトコロナリト見エ、日本某新聞記者ノ言ニ「四千萬ノ眼眸ハ總テ北方ヲ睨視ス」ト、是レ朝鮮及滿洲ヲ指示スルモノト豫定セザルヲ得ザルモノナリ」云々ト論結セリ。

「ビルジェウイカ、ウエドモスチ」(銀行新聞)ハ六月十八日ノ紙上ニ於テ「露國政府ノ擔保ニ係ル清國外債募集ニ對スル談判ノ重心ハ、目下「ペテルブルグ」ニ在リ。當府萬國商業銀行頭取「ロトシテイン」氏ハ、巴里ニ赴キ百般ノ困難ヲ排除シテ巧ミニ佛國ノ銀行家一派ト談合シ、獨國銀行社會ノ反對ヲ鎮制シ、全ク其要領ヲ得テ昨日當府ニ歸着セラレタリ。又吾輩ノ傳聞スル所ニ據レバ、佛國ノ本債發行、組合員、即チ巴里和蘭銀行頭取「ネツリン」氏「クレジ、リオネ」銀行員「プリス」氏及銀行家「ホツチンデル」氏等ハ、最後ノ條約調印ノ爲メ明日當府ニ來着スベシト、此四朱利付公債發行ノ組合ハ、當府中ノ重ナル四銀行及巴里ノ重ナル五銀行、即

チバ里和蘭銀行「コムプトアル、ナシヨナル、デ、エスコムト」クレジ、リオネ「ソシエテ、ジエネラル」及「クレジ、アンドストリエル」ヨリ成立シ、其發行總額ハ四億「フランク」ニシテ、露佛蘭ノ三市場ニ於テ募集スルモノトス。

普獨兩國新聞ノ通信ニハ常ニ傳來的誤謬アルハ今日ニ始リタル事迹ニ非ラズト雖ドモ、之ヲ正誤スルコトモ亦タ必要ナリ。即チ「露政府ハ年利四朱ノ公債ヲ擔保シテ清國ヨリハ五朱ノ年利ヲ徵收ス」ト誣ヒ、如此キ行爲ハ多分普國ガ充分ニ信用ヲ措カザル邦國ニ恩義ヲ布カントスルノ時ニ於テ見ルヲ得ベキモ、露國ハ決シテ如此キ射利的ノ事業ヲ企テ、大國ノ威望ヲ損スルガ如キ念慮ハ寸毫ダモ之ヲ抱持セズ。只ダ交誼アル隣邦ノ解體ヲ見ルニ忍ビズ、之ヲ扶持セント欲スル而已。此寬大ナル露國ノ所置ハ必ラズヤ絶東ニ於ケル情勢ニ大ナル影響ヲ及ボスベシト確信スルガ故ニ假令ヘ外國諸新聞ガ我大藏大臣ノ處措ヲ以テ、普國「ビーコンスフヒールド」侯ガ埃及前副王「イスマイルパシヤ」ヨリ無配當ノ「スエス」溝渠株ヲ買占メタルノ事迹ト同一視スルモ、吾輩ハ決シテ一驚ヲ喫セザルナリ」ト論ゼリ。

「グラジダニン」ハ六月十八日ノ紙上ニ於テ朝鮮問題ヲ論ジテ曰ク、進取ノ氣風ハ露國ヲシテ如何ナル點ニ迄達センメントスル歟。或ハ土京ヲ恐赫シ或ハ「ペルシヤ」灣岸ニ突出セントシ或ハ印度ニ侵入セントシ、今ヤ此氣運ハ延ビテ絶東ノ朝鮮ニ波及セリ。露國ハ素ヨリ此氣風ニ

倚賴シ、坤輿上六分ノ一強ノ地面ヲ領シ、外敵ノ來襲ヲ意トセズ。國民安堵シテ内治ノ整頓ニ從事スルコトヲ得ル迄ニ其國威ヲ適揚セリ。故ニ露國ハ最早其領土ヲ擴張スルノ必要アルヲ見ズ。土國トノ最後戰爭ハ全ク西歐ノ敵國ガ露國自然ノ發達ヲ妨ゲントスル陰謀ニ由リ釀成セラレタルモノニシテ、露國ハ獨リ其目的ヲ達シ得ザリシ而已ナラズ、戰後財政上ニ非常ノ困難ヲ感ジ、漸ク近年ニ及デ瘡痍ヲ全治シ得タルノミ。爾後引繼ギ最近十四年間、敵國ハ頻リニ露國ヲシテ戰端ヲ開カシメント試ミタレドモ、幸先帝ノ平和手段ニ由リ、纔カニ禍難ヲ免カル、コトヲ得タリ。然ルニ今日絶東ニ於テ敵國ガ再浴シタル陰謀ニ陥リ、平和ヲ破ブルガ如キハ、露國ニ取り最モ不得策ナルベク、寧ロ外敵來襲ニ依リテ暫ク進取的運動ヲナサザルノ勝レルニ如カズ。露國人民ハ今日迄既ニ軍事上ニ於テ功績ヲ顯ハシ、名譽ヲ博シタルハ明瞭ナル事實ニシテ、今日ハ何レノ國カ敢テ來襲スルモノアラシヤ。瑞典ハ其舊領土ヲ恢復スルニ足ルノ國力ニ乏シク、獨國ハ常ニ我國ト親睦セントスルノ意向ヲ有シ、戰爭ハ相互ノ不利益ナルコトヲ確認セリ。土國ニ至テモ露國ハ只ダ之ト義戰ヲ爲シタル而已ニ過ギズ。好シ土人ヲ其首都ヨリ放逐シ得ルモ、之ニ代ハルモノハ善人ナレバ、露國ハ復タ何等ノ利益ダモ收得スルコト能ハザルベシ。寧ロ土國ト和睦シテ露國軍艦ノ爲メ「ボスホラス」海門ヲ開カシメ、却テ他國ノ爲メ之ヲ封鎖スルノ手段ヲ執ルニ若カズ。波斯トハ多年親厚ナル交誼ヲ有シ普國ガ曾テ砲艦ヲ裏海ニ浮

マシムルコトヲ同盟政府ニ勸告セシコトヲモ、同國ハ之ヲ拒絶セリ。故ニ露國ハ特別ナル必要
ナクシテ同國ノ領土ヲ併領スルノ理由ヲ有セザルナリ。

今ヤ試ミニ眼ヲ絶東ニ轉ゼン。清國及日本ハ素ト露國ノ爲メ恐ルベキノ邦國ニアラズ。露國
傳來ノ政策ニ基クモ常ニ之ト隣好ヲ保持セザルベカラズ。況ンヤ必要ヲ見ズシテ日清韓ノ版圖
ニ囑望スルニ於テオヤ(以下露國ト絶東トノ間ニ於ケル貿易ノ微々タル情況ヲ叙述スルノ一段
略之)抑モ露國ガ日清ノ葛藤ニ干渉スルハ如何ナル理由アルニ基クモノナルカ。日本ガ朝鮮若
クハ滿洲ノ一部ヲ占領シタリトテ、果シテ如何ナル危険カアル。日本ハ夙ニ半開國ノ社團ヲ穎
脱シ、開明ノ程度上多クノ關係ニ於テ歐洲諸國ト争フコトヲ得ベシト説起シ、千八百二十年
中日本ノ囚虜ト爲リタル「ゴロウニン」氏ノ紀行中、日本ヲ讚揚スルノ諸點ヲ精細ニ記述シ、
日本ノ長處ノミヲ列舉シ、大イニ之ヲ庇護シタル後「日本ト清國トノ争鬪ハ今日肇始シタルモ
ノニアラズ。過般ノ戰爭モ亦タ或ヒハ最後ノ戰爭ナラザルベシ。日清互相ノ敵視ハ寧ロ遺傳ニ
出デ、恰モ歐洲ニ於ケル佛獨兩國ノ關係ト一般ナレバ、日清同盟杯ト唱道スレドモ是レ深ク憂
フルニ足ラザルナリ。朝鮮ハ既ニ十七世紀ニ於テ日本ニ征服セラレ、其所屬ト爲リ、之ニ年貢
ヲ拂ヒシト同時ニ、清國ニ對シテモ亦タ年貢ヲ納メ、藩屬ノ實ヲ示セリ。如此キ關係ハ到底兩
國ノ葛藤ヲシテ避クベカラザルモノタラシメタリ。故ニ今日ノ日本ガ戰捷ヲ博シ朝鮮ノ前途ニ

關シ、百方努力スルハ是レ自然ノ情勢ニシテ朝鮮ガ日本保護ノ下ニ立ツハ日清兩國間ニ存在ス
ル關係上已ムヲ得ザルノ結果ナリ。然レドモ若シ日本ガ朝鮮ヲ自國ノ攻撃ノ根據地ニ變ジ、朝
鮮以北ノ地ヲ蠶食セント試マバ、露國ハ素ヨリ之ニ抵抗スベシト雖ドモ、論理上ヨリ云フモ日
本ノ平和主義上ヨリ見ルモ、今日如此キ意思アリトスルハ全ク譏誣タルヲ免カレズ。現今露國
ノ急務ハ絶東ニ於テ氷結セザル港灣ヲ有スルニ在リ。是レ素ヨリ露國ノ爲メ必要ナルハ論ヲ俟
タズト雖ドモ、手ニ干戈ヲ弄シ、他國ノ境土ヲ侵掠スルニ先チ、最初ニ自國ノ版圖中ニ在ル港
灣ノ改良ヨリ着手セザルベカラズ。現ニ「ムールマン」地方ニハ終年氷結セザル港灣アルガ故
ニ之ヲ「フヒンランド」鐵道線ト聯絡セシムルニ於テ、誰カ故障ヲ唱フルモノアラシヤ。且ツ
現存ノ港灣浦潮ノ如キ、未ダ幾多ノ改良ヲ爲スベキ必要アルニ非ズヤ。

今日ハ露國ガ版圖ノ擴張ヲ企ツルノ時期ニ非ラズ。宜シク内治ノ整頓ヲ謀ルベキノ時期ナリ。
露人ノ才能ト熱心ハ、決シテ獨人及日本人ニ醸ラズ。唯ダ開明ノ點ニ於テ他ノ諸國ニ劣ルモノ
アルハ是レ露國ガ進取スルコトノミヲ知りテ、適時ニ必要ナル事業ヲ完成セザルニ原因スト云
ハザルヲ得ズ。今ヤ露國內到ル處ニ人材欠乏ノ歎聲ヲ聽カザルハナシ。故ニ國家ニ必要ナル人
材ヲ養成スルハ實ニ露國目下ノ急務ナリ云々ト論結セリ。

右御參考迄及御報告候。敬具

明治廿八年六月廿一日

在 露

特命全權公使 西 德 二 郎

外務大臣代理侯爵 西園寺公望殿

奧國內閣辭職ノ件

キインジツシレツツ氏ノ内閣ハ獨逸左黨(自由黨)ガ連合ヲ脱シタルガ爲メ、議會ニ多數ヲ失ヒ、六月十八日辭表ヲ呈出シ、皇帝ハ翌十九日之レヲ御採用アリテ、下奧國ノ州長キールマンスエツグ伯ヲ内務大臣ニ任ジ、臨時内閣總理大臣ノ職務ヲ執ラシメ、大藏次官リツテル、ボエム氏ヲ擧ゲテ大藏大臣ニ任ジ、國防大臣及無省大臣ハ別ニ政治上ノ波瀾ヲ被ラザリシニ由リ

依然其職ニ止マラシメ、其他ノ諸省ニ於テハ各次官ヲシテ一時大臣ノ事務ヲ代理ス可キコトヲ命ジ賜ヒタリ。依リテ六月二十日電報ヲ以テ右ノ要旨報告及置候。

臨時内閣員ハ左ノ如シ

- 内閣總理大臣 伯爵 Keelmans egg
- 國防大臣 伯爵 Welsers haimb
- 無省大臣 Ritter yaworski
- 大藏大臣 Ritter Bohm
- 農務大臣事務代理 次官 Idler von Blumenfeld
- 商務大臣 次官 Ritter von wteik
- 文部大臣 次官 Edward Ritner
- 司法大臣 次官 Ritter Krall

キインヂツシグレツツ氏ノ連合内閣辭職シタルハ前顯ノ通り、獨逸左黨ガ連合ヲ脱シ議會ニ多數ヲ有スルヲ得ザルニ至リタルヲ以テナリ。而シテ獨逸左黨ガ連合ヲ脱シタルハ豫算案中ケルンテン州ノ「チリ」ト稱スル一小都ニ、スロウエーネン語ノ中學校設定ニ關スル件ガ議會ノ委員會ニ於テ可決セラレタルニ由レリ。換言スレバ保守黨ト自由黨トノ争ニ於テ、保守黨勝チテ

奧國內閣辭職ノ件

自由黨敗北シタルニ由レリ。

何故ニ前記豫算案一部ノ可決ハ自由黨ノ敗北ニ歸スルヤト云フニ、獨逸左黨即チ自由黨ハ獨逸人種中等社會ノ代表者ナルヲ以テ、獨逸人種ノ多數ヲ占ムル「チリ」ヘスロウエーネン語ノ中學校ヲ設立セシムルハ其欲セザル處ニシテ、豫算案ガ委員會ノ議ニ上ルノ始メヨリ、自由黨ハ徹尾「チリ」中學校設立ノ件ニ反對ヲ試ミ、若シ可決セラル、ニ於テハ、自由黨ハ連合ヲ脱スベシト主張シ居リタレバナリ。政府ハ固ヨリ自由黨ノ意向ヲ知ル、知リテ而シテ尙豫算案中ヘ「チリ」中學校設立ノ費目ヲ加ヘタル所以ハ、該中學校設立ハスロウエーネン人ノ希望ニシテ、キインヂツシグレッツ公内閣ノ主動者ナリトノ評アル保守黨ハ、スロウエーネン人代表スルモノナレバ、政府此費目ヲ豫算案ニ加ヘ、委員會之レヲ可決シタルガ故ニ保守黨満足セリ保守黨満足セルガ故ニ、自由黨不満足ナリ。保守自由ノ兩黨ニ満足ヲ與ヘ、之レヲ合從連衡シテ巧ニ之ヲ制御スルハキインヂツシグレッツ公ノ手腕ノ達セザリシ處ナリ。保守ト云ヒ自由ト云フ其名稱甚美ナレドモ、墺國ノ所謂保守黨ナルモノハ眞正ノ保守黨ニアラズシテ、自由黨モ亦眞正ノ自由黨ト稱スルヲ得ズ。此ヲ以テ墺國ノ政黨ハ主義ヲ以テ去就スル英國若クハ其他立憲國ニ於ケル同名ノ政黨ト比較スルヲ得ズシテ、各黨ノ要素ハ實ニ人種的ノ性質ヲ帶有セリ。夫レ墺國ノ國會ハ主義ヲ爭フ競争ニアラズシテ、其政黨ハ各人種ノ利益代表者ナリ。其複雜

ナル有様ハ實ニ豫想外ニ出ヅ。過日維也納ノ一新聞紙ハ記載シテ曰ク、佛國ノ同僚ノ如キハ我國政黨ノ關係ヲ知了スルモノ極メテ少ナク、往々奇異ナル見解ヲ其新聞ニ記載スルモノナリ、之レ我國政治界ノ有様ハ複雜極リナク、外國人ノ之レヲ研究スルハ非常ニ困難ナルガ爲メナリ云々ト。以テ墺國政治界混雜ノ一班ヲ知ルニ足レリ。故ニ苟クモ墺國內閣ニ首座ヲ占ムル人ハ、例ヘバタツフエー伯ノ如ク尤モ老練熟達ノ士ナラザル可カラズ。然ルニキインヂツシグレッツ公ハ多少政治社會ニ名ヲ知ラレザルニハアラザルモ、内閣ノ首座ヲ占ムルニハ年尙少ニシテ、氷炭相容レラレザル諸黨派ヲ代表セル内閣員ヲ制馭シ、以テ政治ノ難局ニ當ルハ或ハ未ダ其器ニアラザリシガ如シ。十九箇月間ノ在職中一ツノ成跡アルナシ。始メ公ガタツフエー伯ニ代リテ内閣ヲ總理スルヤ、議會ニ於テ揚言シテ曰ク、撰舉法ヲ完成スルハ新内閣ノ義務ナリト、ダツフエー伯ノ内閣ハ撰舉法ノ爲メニ斃レ、撰舉法ノ爲ニキインヂツシグレッツ公ノ内閣起ル。而シテ撰舉法案ノ完成ハ實ニ公ノ内閣ガ日夜黽勉セル處ナリシニモ關ハラズ、其完成ハ世人ノ疑ヲ容レタル處ニシテ、少ナクトモ其前途尙甚遠カリシ事情既ニ瞭然ナルヲ以テ「キインヂツシグレッツ」内閣ガ早晩退カザル可カラザル素因ハ既ニ存在シタリ。只「チリ」事件ハ所謂近因ニシテ、少シク辭職ノ機ヲ早カラシメタルニ過ギズ。

キールマンズエツグ伯ノ臨時内閣ハ緊急諸法案ヲ議會ニ提出シ、且ツ之レヲ辨明スル等只一

時議會ニ對スル爲メ、差當リ組織セルモノニシテ、議會閉會ニ至テハ皇帝ハ適當ノ政治家ヲ撰ミテ内閣組織ヲ命ジ賜フ可シ。其人選如何ハ固ヨリ豫定シ難シト雖ドモ、或ヒハタツフエー伯ニハアラザルカトノ説モ有之候。
右報告候。敬具

明治二十八年六月二十四日

在 澳 國

臨時代理大使 大山 綱介

臨時外務大臣侯爵 西園寺公望殿

外務大臣ヨリ在獨青木公使ニ宛テタル 詰問書

在 獨

青木特命全權公使

外 務 大 臣

日清媾和條件ニ對シ、獨露佛三國干涉一件ト題シ、去五月二十七日附機密第五號信ヲ以テ御申越相成候次第ハ、事後ニ屬スルコト、ハ申シナガラ、其性質決シテ輕易ニ看做スベカラザルモノト存候ニ付、總理大臣始メ閣僚ヘモ相示置候。今回御申越ノ趣ニ據レバ、閣下ノ御考ニテハ獨國ニ於テ三國干涉ノ主唱者トナリタルハ、左ノ事實ニ原因スル如ク相見得候。

第一、今回干涉ノ眞ノ原因ハ佛國若シ獨國ニ先チテ着鞭シ、露國ニ借スニ有力ナル聲援ヲ以テセシナランニハ、露佛ノ同盟忽チ成就シ、獨國ハ危殆ノ地ニ立ツガ故ニ、露佛未ダ相携提シテ日清媾和條件ニ抗議ヲ試ミザルニ先チ、獨國自ラ率先シテ露佛兩政府ニ交渉シ

外務大臣ヨリ在獨青木公使ニ宛テタル詰問書

遂ニ三國一致ノ抗議ヲ我政府ニ提出セシメ、以テ獨國危殆ノ地ニ立ツコトヲ免レントスルニ在リ。

第二、直接ノ近因ハ、フオン・ブランド氏ノ讒誣アリタルコト、我政府ニ於テ軍艦及武器等ヲ獨國ヨリ購入セザリシコト、獨逸皇帝ニ對シ我政府ハ菊花章頸飾御贈進ノ外頗ル冷淡ナリシコト、獨逸皇帝英國ノ發議ニ係ル干涉ヲ退ケラレタルニ之ニ對シテ謝詞ヲ送ラザリシコト、菊花章頸飾御贈進ノ答禮トシテ獨逸皇帝ヨリ贈進セラレタル黑鷺勳章ノ頸飾捧呈ノ爲メ、獨逸公使ヲ廣島ニ於テ引見アラセラレザリシコト、並ニ菊花章頸飾御贈進及メツケル少將叙勳ノ事ニ關シ、東京某新聞ニ於テ云々セシコトニ在リ。

然ルニ今回ノ如キ有事ノ場合ニ當リテハ、我政界ノ行動ニ顧慮ナカラシムル爲メ、絶エズ各強國ノ意向ヲ承知致置クコト必要ナルハ勿論ノ義ニシテ、而シテ右各強國ノ意向如何ヲ探究スル手段ニ至リテハ、帝國ヨリ派駐ノ各公使ニ依テ之ヲ求ムルノ外他ニ道ナキハ今更申迄モ無之就テハ獨國ノ意向如何ハ閣下ノ報告ニ依テ之ヲトスルコト固ヨリ當然ノ義ニ有之候。而シテ當初ヨリ閣下來電ノ趣旨ヲ列記スレバ大略左ノ通ニ有之候。

九月廿四日ノ來電ニ曰ク

(前略) 閣下ハ露佛ノ意向ヲ詳知シ居ラル、ヤ。本使ハ歐洲ニテ何か相談中ナリト思考ス。多分兵力干涉ノ議ニ關シ意見ヲ交換スルモノナルベシ。果シテ然ラバ英國及獨國ハ其發起者ニ非ザルコトハ本使ノ信ジテ疑ハザル所ナリ。

十月廿一日ノ來電ニ曰ク

(前略) 本使ハ英國駐劄獨國大使ニ向テ、日清兩國ヲシテ自ラ勝敗ヲ決スルマデ戰ハシムベシト告ゲタリ。之ガ爲メ獨國ハ英國ノ仲裁、即チ干涉政策ニ反對セリ。露佛兩國モ同ジク反對シタレドモ其主意ハ自ラ獨國ト異ナレリ。

十一月十一日ノ來電ニ曰ク

(前略) 獨國ハ我が爲メニ仲裁ニ反對シ固ク執テ動カズ云々。

十一月二十日ノ來電ニ曰ク

獨國皇帝政府及人民ハ開戰ノ始ヨリ日本ニ對シテ同情ヲ有セリ(後略)。